

私にまで愈々明白なのは、哲學者が明日及び明後日の缺くべからざる人間として、彼の今日に對する矛盾の中に、彼自らを見出したといふこと、彼自らを見出さねばならなかつたといふことである。彼の敵はいつも今日の理想であつたのである。人が哲學者と呼ぶところの、又自分自身を賢さの友と思はないで、寧ろ不愉快なる痴漢及び危険なる疑問記號と思つたところの、總ての斯うした人道の促進者等はこれまで、彼等の使命を、彼等の冷酷な、心ならぬ、避けがたき使命を、けれども結局は彼等の使命の偉大さを、彼等の時の良心の苛責であることの中に見出した。彼等が正に時代の諸徳の胸部へ解剖刀をあてた間に、彼等は何が彼等の特有の秘密であつたかを暴露した。それは人間の一新しき偉大さを、彼の増大への一の新しき未踏の途を知る爲めであつた。いつでも彼等は、如何に多くの偽善が、御都合が、氣儘が、自墮落が、如何に多くの虚偽が、其同時代道德の最も尊敬されたる典型の下にかくれてゐたかを、如何に多くの徳が跡を絶つてゐたかを明らかにした。いつも彼等は言つた、「我々は汝等が今日最もくつろぎにくく思つてゐる處の方へ、そちらの方へ移つて行かなければならない」と。各人を一の片隅と「専門」とに閉ぢ込めやうとする「近代觀念」の一世界に而して、一の哲學者は、今日哲學者なるものがあり得たならば、人間の偉大さを、「偉大さ」といふ概念を正しく彼

の廣汎性と多様性の中に、彼の統一性の中に置くべく強ひられたであらう。加之彼は、如何に多くとさまざまのものを人が引き受けるか、如何なる程度まで人が彼の責任範圍をひろげ得たかによつて、價值及び等級を決定するであらう。今日では時代の趣味と時代の徳とが意志を薄弱にする。何物も意志薄弱ほど甚だしく時代的ではない。乃ち、哲學者の理想に於ては、ほかならぬ意志の強さが、無情さが、久しき決心の能力が、「偉大さ」といふ概念に包括されてゐなければならぬ。反對の教説や、氣の弱い、あきらめのいい、腰の低い、私のない人道の理想と同じほどの正當さで以て、一の反對の時代に適應してゐた。第十六世紀の如く、其集積されたる意志力から、また私慾の暴烈を極めたる奔流や洪水から苦み憊んだやうな、一の反對の時代に適應してゐた。ソクラテスの時代に於て、磨りへらされた本能の人々ばかりの間では、自墮落にやつてゐる——彼等の言ふところを聞けば、「幸福の爲めに」、彼等の爲すところを見れば、「悦樂の爲めに」——ところの、その辭、彼等の生活によつて全然權利を喪失してゐるやうな古い立派な言葉を、依然として口にしてゐるところの、保守的な古代アテ人等ばかりの間では、思ふに反語は魂の偉大さに對して必要であつたらう。「私の爲めに矯飾するな」この點では我々は平等である」と十分明白に語つたところの顔付きで以て、自分自身の肉體にも、並びに「貴族等」の肉敵や心臓へも容赦なく切り込んだところの、老年の醫師及び平民の、あのソクラテス風な意地悪いたしかさは、魂の偉大さに對して必要であつたらう。反對に今日では、全歐

羅巴を通じて群畜だけが名譽を獲得し、名譽を分配する今日では、「權利の平等」があまりにもたやすく不法の平等に變更され得るやうな今日では、私は總ての稀らしい、異つた、特權をもつたものに對する、より高き人々、より高き魂、より高き義務、より高き責任、創造的な全權及び主權に對する一般的挑戰に於て言ひたいのだ——今日は高貴であることが、獨立を欲することが、別の物であり得ることが、孤立することが、自分自身の努力で生きねばならぬことが、「偉大さ」の概念に屬してゐる。そして哲學者は彼が次ぎのやうに斷言する時、彼自身の理想の或るものを暴露するであらう。曰く、「最も孤獨な人間、最もかくれた人間、最もかけ離れた人間、善惡を超越した人間、自己の徳と意志の富饒とを主宰してゐる人間は、最も偉大なものであらねばならぬ。これこそ偉大と云はるべきである——渾然としてゐるだけそれだけ多様で、又充實してゐるだけそれだけ廣汎であるといふのが。」さて今一たび問ふべくは、今日に於て偉大さがあり得るか？

二二三

哲學者が何であるかは、學び知るに困難である。なぜならば、それは教へられるべきものでないから。人はそれを經驗からして「知」らなければならぬ。或は人はそれを知らないといふことの誇を有すべきである。しかし乍ら今日世間の人々總てが、彼等の全然經驗し得ない事物を口にするといふのは、

哲學者及び哲學上の事柄に關して最も甚だしく、最も残念乍ら事實である。最も僅かなる人々がそれらの事を知つて居る。それらの事を知ることが許される。そしてそれらの事に關する總ての通俗的な意見は間違つてゐる。乃ち例へば、急速に走る一の大膽な放縱な精神性と、何等の間違ひをもやらない一の辯證法的峻嚴及び必然性とのあの、純粹に哲學的な並行は、大抵の思想家や學者等にまで、彼等の經驗からして知られない。またそれ故に、誰かが彼等の前でそれを談らうとしたならば、信じられないのである。彼等は各の必然性を困迫として、痛ましき服従の強制及び拘束として考へる。思考その物が彼等にまで何等かの煩はしきもの、ぐづ／＼したものと見做され、殆ど一の煩勞と、隨分屢々「高貴な人間の汗を價する」ものと見做される。けれども、何等かの輕易なるもの、神聖なるもの、また舞踏に、放恣に密接したものと見做されることは竟にない。「思考する」と、一の事物に「本氣にな」つたり、「身を入れ」たりするとは、彼等にまで同一事である。ただ斯う云ふ具合にばかり彼等は「體驗」してゐるのだ。藝術家等は此場合一のより、精緻なる嗅覺を有つてゐるかも知れない。彼等は、彼等がもはや何事をも「勝手に」やらないで、總てを必然的にする時にこそ、自由や、精緻や、權能に對する、創造的確定や、整理や、形成に對する彼等の感情が其高頂に達するといふことを、換言すれば、必然性と「意志の自由」とが其場合彼等に於て一であるといふことを、全く餘りに善く知り過ぎてゐるのである。所詮心靈情態には、問題の段階に相應してゐるところの段階があるのである。そして最高

の問題は、自分の精神性の高さと功とによつて、それらの解釋に間に合ふやう準備されることなしに、それらの問題へ近づくことを敢てするところの各人を、容赦なく突き斥けるのである。小賢しい凡庸頭や、または氣の利かない勇敢な器械學者や經驗論者が、今日隨分屢々見る如く、彼等の平民的な功名心で以て、さうした問題の近くへ、そして謂はば此「奥の院」へ押し入らうとしたとて、そもそも何の役に立たうぞ！ 斯うした御座敷へ土足は到底許されない。この事は事物の根本法則からしてきめられてゐる。此等の侵入者が其頭をぶつつけて、それを打ち壊してしまつたらうとも、かの門戸は彼等にまで開かれないでゐるだらう。名の高い世界の爲めに人々は生れてゐなければならぬ。より明白に言へば、人々はさうした世界に對して馴育されなければならぬ。哲學——高級の意味に於て——に對する權利を人々は、一に彼等の門地によつて獲得する。此場合にも亦祖先が、「血統」が決定する。多くの世代が哲學者の出現に準備をしてゐなければならぬ。彼の徳の一つびとつは、別々に獲得され、扶養され、相續され、體現されてゐなければならぬ。そしてただに彼の思想の大膽な輕易な細緻な進路ばかりでなく、又特に大なる責任をいつでも引き受けること、俯瞰する目附きの氣高さ、群衆や彼等の義務及び徳から離れてゐるといふ感情、神にてもあれ、惡魔にてもあれ、苟くも誤解されたり誹謗されたりするところのものに對する懇切なる加護、大なる正義の悦びと實習と、命令することの技術、意志の廣大さ、稀に嘆賞し、稀に見上げ、稀に愛するところの緩慢なる眼……

第七章 我等の諸の徳

我々の徳とや？ 我々にも尙ほ我々の徳があるといふのは、ありさうな話である——勿論それは、我々がその爲めに我々の祖父等を尊敬し、またいくら我々から遠ざけるところの、それらの誠實な岩盤な徳ではなからうけれど。我々明後日の歐羅巴人は、我々第二十世紀の初生兒等は——總ての我々の危険なる好奇心や、我々の多面性及び變装の技術や、精神及び感性に於ける我々の軟熟した、謂はば甘くなりすぎた残忍性を以てして——もし我々が徳を有たねばならないならば、恐らく我々は、我々の最も内密な、最も奥深い傾向や、我々の最も痛切な要求と最も善く一致し得たやうな徳をのみ有つことであらう。いざや、我々をして我々の螺堂の中にそれらの徳を捜し索めしめよ！ 我々の知る如く、其螺堂に於て随分さまざまなのが道を迷ひ、随分さまざまなのがすつかり痕跡をもなくしてしまふのではあるが！ そして自分自身の徳を捜し索めるより以上に立派な何事かがあるだらうか？ これは殆んど、自分自身の徳を信することではないだらうか？ だがこの「自分自身の徳を信する」は、實際上それは、以前自分自身の「善き良心」と呼ばれたところのものではないか？ 我々の祖父等が彼等の頭の背に、かなり屢々彼等の悟性の背に垂れてゐたところの、あの尊敬すべき、長い、概念の辮髪ではないか？ されば他の點では我々が、如何に僅かに古風な、祖父的に尊敬すべきもの

であると我々自らを思はうとも、尙ほ且つ一の事に於て我々は斯うした祖父等の立派な孫である——我々善き良心をもつた最終の歐羅巴人等は。我々も亦やはり彼等の辮髪をつけてゐるのである。嗚呼！ 汝等にして若し、それが間もなく、まことに間もなく、異つて來るといふことを知つてさへくれたなら！

星の世界に於て折々、一の遊星の軌道を規定する一の太陽がある如く、又或る場合には色の異つた太陽が時には赤い光を以て、時には緑の光を以て、ただ一の遊星の周圍に照り耀き、やがて同時にさまざまの色をそれに浴びせかける如く、その如く我々近代人等は我々の「天體」の複雑な構造の故に、さまざまな道德によつて規定されてゐる。我々の行爲は異つた色ではあるがはる照り耀く。それは滅多に一色でない。そして我々が多彩なる行爲をなすやうな場合は随分とあるのである。

自分の敵を愛すること？ それは十分に學ばれてゐるやうに思ふ。それは小規模にも大規模にも、毎日千度も起つてゐる。いや、時としてはもつと高い崇高な事さへも起つてゐる。我々は我々が愛す

る時に、又恰かも我々が最も善く愛する時にこそ、輕蔑することを學ぶのである。だが斯うした總ては無意識に、喧噪なしに、修飾なしに、いかめしい言葉や徳の方式を口にさせない善良さのあの羞恥心と控目とを以てである。態度としての道徳は——今日我々の趣味に適しない。これがまた一の進歩である。我々の父祖等の趣味にまで終に態度としての宗教が適しなくなつたのが（宗教に對する敵對やブルテエル風な辛辣さや、並びに會つて自由思想家の仕方話に屬してゐたほどのあらゆるものをも含めて）、我々の父祖等の進歩であつた如く。我々の本心の中なる音楽は、我々の精神の中なる舞踏は、總ての清教徒的な祈禱文が、總ての道徳的説教や人の善さ加減が調子を合せたがらないところのものである。

二一七

道徳的分別に於ける道徳的手腕を信用されることに、大きな價値を置くやうな人々を警戒することだ。彼等にして一たび我々の前に（或は我々に關してさへも）やり損ひをしたならば、彼等は竟に我々を救さない。彼等は尙ほ我々の「友人」たることを失はないでゐながらも、我々の本能的な誹謗たるを避け得ないであらう。忘れっぽい人々は幸なるかな。なぜと云つて彼等は彼等の馬鹿間逕ひをも「い且合に」済ましてしまふからである。

二一八

佛蘭西の心理學者等は——今日他に尙ほ心理學者があるだらうか？——やつぱり *Petite bourgeoisie* のブルヂアの愚劣さに對する彼等の辛辣なさまざまな享樂をし盡してゐない——謂はば、要するに彼等がそれによつて何物かを裏切り示すかの如く。例へばルウアンの立派な市民であるところのフロオベニルは、竟に其他の何物をも見ず、聞かず、味はなかつた。それが彼一流の自己苛虐であり、精練された殘忍性であつた。今、それが何だか退屈なものになつてゐるやうだから、調子を變へる爲め私は一の異つた樂みを推奨して見たい。それは高級な精神をもつた人々及び其使命に對して、總ての善良な肥満した正直な凡庸人等が行動する時の無意識的な好點である。その最上の瞬間に於ける中流階級の理解や趣味より、彼の犠牲になる者共の理解よりさへ、千倍も手の込んでゐる、あの手の込んだゼンキットの好點である——「本能」がこれまで發見された總ての賢さの中、最も賢いものであるといふことの二度目の證據として。手短かに言ふ、汝等心理學者よ、「例外」と相戦ふところの「原則」の哲學を研究せよ。そこに汝等は神々及び神々の意地悪さにとりて十分に宜しき一の光景を有て！或はより明白に云へば、「善良なる人々」の上に、*homo bonae voluntatis*（善意の人々）の上に……汝等自身の上に解剖をやつて見るがよい！

道徳的に批判し判決するのは、精神的に狹隘な人々が、それほど狹隘でない人々に對して行ふところのお得意の復讐である。又彼が自然から十分に恵まれてゐなかつたといふことに對する一種の損害賠償である。最後には精神を獲得して精緻になるべき一の機會である。悪心が精神化するのである。精神上の財産や特權を賦與され過ぎたる人々も、彼等と同じやうに律しられる一の尺度のあることは、彼等の胸の奥底に於て彼をよろこばせる。彼等は「神の前に於ける總てのもの平等」を獲むとて奮闘する。そして殆んど此目的の爲めに神に對する信仰を必要とする。彼等の間には無神論の最も力強い敵手がゐる。若し人ありて彼等にまで、「一の高き精神性は單に道徳的なばかりの人間の如何なる立派さ尊さとの比較をも超えてゐる」と言つたならば、それは彼等を激怒させるであらう。私はそれをしないようにと氣をつけるであらう。寧ろ私は、一の高い精神性その物が道徳的性質の最終の産出物としてのみ存立するといふ、私の理論を以て彼等に媚び諂つてやりたい。それがひとつとつ、久しき訓練と實習とによつて、恐らくは幾代もの間に獲得された後、「單に道徳的なばかりの」人々に歸せられるところの、總てのそれらの情態の綜合であるといふ私の理論を以て——高い精神性が、世界に於ける階級の秩序を、ただに人間の間のみならず、事物その物の間にも維持すべきを知るところの

あの慈仁なる嚴格さ及び正義の精神化にほかならぬといふ私の理論を以て。

「無關心」の賞讃がこんなにも民衆的である今日にあつては、多分どれだけかの危険を伴はずにはなからうが、人は民衆が實際何に關心するか、又一體に尋常人が（教養のある人々、加之學者等、また外觀が欺かないならば、殆んど哲學者等をも包括していい）根本的に且つ深く顧慮するところの事物の何であるかを明らかにしてゐなければならぬ。精緻な贅澤な趣味の人々に興味のあるところのもの、各の高級な性情に面白いところの事物の大部分が、平凡人にまで全く「興味なく」見えるといふことの事實は、それで以て明白になる。それにも拘はらず、彼にしてそれに對する歸依を認め知るならば、彼はそれを "Disinterested"（無關心）であると云ひ、如何にして「無關心」に行動し得られるかを不思議に思ふのである。哲學者の中には斯うした民衆的驚嘆にも一の誘惑的な神的天上界的な表白を與へ得たものがあつた（なぜならば、恐らく彼等がより高き性質の人々を経験からして知らなかつたらであらうか？）——「無關心」な行爲が條件次第では一の甚だ面白い、關心されたる行爲であるといふ、赤裸々な眞に正しい眞實を述べることの代りに。「そして愛は？」——如何に！ 加之、愛から出た一の行爲が「非利己的」であり得るか？ だが汝等愚人よ——「そして自己を犠牲にする者の讚美

は？」だが實際に犠牲を持ち出した人間は知つてゐる——彼がそれに對して何物かを意欲し且つ獲得した(恐らくは彼自身からの或る物に對して彼自身からの或る物を)といふことを。彼が其處により多くを有つ爲め、事によつたら一般的により多くである爲め、或は「より多く」として自らを感じる爲めにさへ、此處に放棄したのであるといふことを。しかし乍らこれは、一の氣むづかしき精神が滯留することを欲しないやうな問答の範圍である。なぜならば此處に眞實は、それが答へねばならぬ時、彼女の欠伸を嘯み殺すことのかかり大きな必要に迫まれてゐるからである。畢竟眞實は一人の婦人である。人は彼女に暴行を加へてはならぬ。

二二二

折々起る事だが——と或る道徳上の術學者及び穿鑿家は言ふ——私は或る私心のない人間を尊敬する。だが、それは彼が私心のない人間であるからでない。寧ろ自分自身を犠牲にして他人に役立つ事の權利を、彼が有つてゐるやうに見えるからである。要するに、いつでも問題になるのは、彼が何人であるかといふこと、及び他の者が何人であるかといふことである。例へば、命令するやうにと決定され造り上げられてゐる或る人間にあつては、自己否定や控目な退却は一の徳でなくして、寧ろ一の徳の荒廢であらう。私にはさう思はれるのだ。自ら絶對的なものとして振舞ひ、且つ各の人に訴へ

るところの各の非利己的道德は、單に趣味に對して罪を犯すだけでない。それは怠慢の罪を使喚するものであり、博愛の假面をかぶつた一つだけ餘計な誘惑であり、又嚴密に、より高き、より希なる、より選ばれたる人々に對する一の誘惑及び傷害である。道徳は最も先づ階級的秩序の前に自ら屈することを強ひられねばならぬ。彼の生意氣は彼等の良心にまで追ひ返されねばならぬ——「一人に正しいものは他人にも正當である」と言ふのは不道徳であるといふことを、結局彼等が承知するやうになるまで。斯様に私の道徳上の術學者及び *bonhomme* (善い人間) が言つた。思ふに彼は、彼が道徳をかくの如く道徳の實踐にまで勧めた時、人から嘲笑されることを値してゐたらうか？ だが人は、その嘲笑者等を自分の味方に有たうとする時、あまりに多くの正しさを有ち得ないであらう。それに、一粒ばかりの間違ひは良き趣味に屬してゐる。

二二三

今日憐憫同情の説教されるところには(又正しく聞いて見ると、今如何なる他の宗教もはや説教されてない)、心理學者が彼の耳を開いてあれかし。あらゆる虚榮心を通して、此等の説教者に特有なるあらゆる喧嘩を通して、心理學者は一の嘔れたる、呻吟くやうな、純粹な自己侮蔑の音を聞くであらう。それは今や一世紀の間を増大し來つてゐるところの歐羅巴のあの暗鬱化及び醜惡化に屬してゐ

る（そして其最初の徴候はエビネエ夫人に宛てたガリアニの考深い書簡の中に既に證券的に擧げ示されてゐる）——それがあれの原因でないならば——「近代思想」をもつた人間は、這の高慢ちきな猿は、ひどく自分自身に満足してゐない。これは明確である。彼は苦み惱んでゐる。そして彼の虚榮心は、彼がただ「共に苦み惱む」（同情することのみ求めるのである）。

二二三

歐羅巴人といふ雜種人は——總體的に見て、かなり醜惡な庶民共である——どうしても一の衣裳を必要に感ずる。彼は衣裳を藏つて置く所としての歴史を有たなければならぬ。勿論その場合彼は、どれもが彼の體に合はないことを氣付く。彼は取りかへて、また取りかへる。様式假裝の斯うした急速な嗜好や變更に關して、更に我々に「何一つ合はない」といふことの絶望の瞬間に關しても第十九世紀なるものを見てやるがよ。in moribus et artibus（道德及び藝術に於て）浪漫的に、或は尙古的に、或は基督教的に、或はフロオレンス風に、或はバロコ風に、或は「國民的に」、いろいろに扮裝して見ても駄目だ。「格好がつかない」だが「精神」は、特に「歴史的精神」は此絶望によつてすらも其利を収めることを忘れない。いつもいつも過去や外國からの新しい見本が試みられ、着更へられ、脱ぎ更へられ、しまひ込まれ、特に研究される。我々は「衣裳」の細目に於ける一番研究された時代である。私は

道德や、信仰箇條や、藝術的趣味や、宗教に關して謂つてゐるのだ。これまで如何なる時代にもなかつた如く我々は、大なる様式のカアニヅル祭に對して、最も精神的な祝祭的哄笑及び倨傲に對して、最高の愚鈍及びアリストファネス的な世界譏笑の超絶的高所に對して準備されてゐる。恐らく、我々は丁度此處にも尙ほ我々の發明の領域を發見しつゝあるだらう。我々も亦、世界史の戯作者、神の道化役としてでも、尙ほ獨創的であり得るやうなあの領域を。恐らく、今日の他なる何物も未來を有しないとは云へ、尙ほ且つ我々の笑こそは未來を有するであらう！

二三四

歴史的感覺は（或は一の國民、一の社會、一人の人間がよつて以て生活したところの、評價の階級的秩序を速かに付度する能力は、此等の評價の聯絡に對する、價值の權威と働いてゐる力の權威との關係に對する「付度的本能」は）我々歐羅巴人が我々の特色として誇つてゐるところの此歴史的感覺は、階級及び人種の民主的混淆によつて歐羅巴人の突き落されたる、魅力のある、狂暴な半野蠻性のお伴をしながら我々へやつて來たものである。斯うした感覺をその第六感覺として認知したのは第十九世紀ばかりである。各の形式や生活方法の、從前五に相並び相重つてゐたところの文化の過去は、かの混淆のお蔭で我々「近代的な魂」に流れ込んで來る。我々の本能は今やあらゆる方向に流れ返る。我々

自身が混淆の一種である。結局前述の如く、「精神」がその場合にうまい事をするのである。肉體や慾望に於ける我々の半野蠻性によつて、我々は高貴な時代がかつて有たなかつたやうな内密な接近手段を到處に有つた。とり分け未完成な文化の螺堂への、及び苟も地上に存在してゐたほどのあらゆる半野蠻性への接近手段をもつた。そして人間文化の大部分がこれまで半野蠻性であつた限り、「歴史的感覚」は殆んど總てに對する感覚及び本能を、總てに對する趣味及び舌を意味してゐる。それに依つてそれは直に、賤劣なる感覚として自らを證明してゐる。例へば、我々は再びホオマアを享樂する。思ふに、ある高貴なる文化をもつた人々（ホメエルの浪費的な精神を非難したサン・エヴルモンの如き第十七世紀の佛蘭西人など、また彼等の反響であるヴルテエルなど）がそんなにたやすく占有し得ない、又占有し得なかつたホメエルの、彼等が享樂すべく彼等自らに殆んど許さなかつたホメエルの、我々が味ふことを知つてゐるといふのは、我々の最も幸福なる所得である。彼等の口蓋のまことに截然たる然りと否とは、彼等のたやすく用意の出來てゐる嘔吐感は、總ての見慣れぬものに對する逡巡躊躇や、活潑な好奇心の惡趣味その物に對する彼等の恐怖は、又一般に各の高貴なる自足的な文化が一の新しい熱望を、自分自身に對する不満を、異つた物の嘆賞を公言すまいとする意志や、斯うした總てのものは彼等の財産でないところの、又は彼等の獲物になり得なかつたところの、世界の最善なる事物に對してすらも都合悪く彼等の心に向け定める。そして斯かる人々には、如何なる感覚も丁

度歴史的感覚及び其卑劣なる庶民的好奇心より以上に理解しにくくないのである。これはシキスピアの場合も同じ事だ。あの驚くべき西班牙的ムウルの、ザクセン的な趣味の綜合を見たならば、エシユロスのアアクルにゐた古代アテン人は、半死半生に笑ひこけたか、又は癩癩を起したかであらう。だが我々は丁度此荒々しきけばけばしさを、最も精緻なものと最も粗大なものとも最も人工的なものとの此混合物を、一の内密な信頼と眞情とで以て受け容れる。我々はそれを丁度我々の爲めに貯へ置かれた藝術の精製として享樂する。そして其場合シキスピアの藝術及び趣味をとりまいてゐる英吉利の民衆の思まはしき雰圍氣にちつとも邪魔されないのは、あだかも人々がネアアペルのキアヤに於けるが如しである。あのキアヤでは貧民窟の下水がどんなにひどく匂つてゐようとも、我々のあらゆる官能をもつてゐながら、すつかり魅しられて、いゝ氣持になつて我々は我々の道を行くのである。「歴史的感覚」の人間なる我々が、此の如き人間として我々の徳を有つてゐるといふのは争ふべくもない。我々は高望みでなく、私心がなく、控目で、勇敢で、自制に充ちて居り、あきらめがよく、甚だ感謝深く、甚だ辛抱強く、甚だ慇懃なのである。だが我々は、斯うした總てを以てして恐らくは甚だ「趣味に富んで」ゐるのでない。結局我々は告白しよう——我々「歴史的感覚」をもつた人間にまで、理解し、感得し、味ひ知り、愛着すべく最も困難なものは、實際我々から先入見をもたれ、また殆んど敵視されてゐるものは、それは正しく各の文化や藝術に於ける完全なもの及び終局的圓熟である。事業

や人間に於ける本質的に高貴なものである。滑らかな海及び静穩なる自己満足の彼等の瞬間である。完成されたすべての事物が示すところの黄金性と冷たさである。思ふに歴史的感覺の我々の大なる徳は善き趣味にまで、少くとも最善なる趣味にまで一の必然的な對照をなしてゐる。そして我々は折照り輝く如き、人間生活の小さな短い最高の僥倖及び醇化をば、ただお粗末に、ただぐづくに、ただ無理強ひにのみ我々自らの中に想見し得るのである。即ち、一の大なる力が自ら甘んじて際限なく不定なものゝ前に立ちどまつた時、精やかな悦樂の過剰が突然なる抑壓威嚇に於て、尙ほ震ひ動いてゐる地盤に自分自身を確立することに於て享受された時の、あの瞬間及び奇蹟なのである。調和均整は我々に縁がない。それを我々は告白しよう。我々の操感な渴望は正しく限りなき、計量すべからざるものに對する渴望である。奔馬に跨れる騎乗者の如く、我々は限りなきものゝ前に手綱を弛めざるものゝ對する渴望である。我々近代人は、我々半野蠻人は。そして我々が最も甚だしく危険に瀕してゐる時、その時にこそ我々の天福を享けてゐる。

二二五

快樂主義にてもあれ、悲觀主義にてもあれ、功利主義にてもあれ、乃至幸福主義にてもあれ、苟くも快と苦とによつて、換言すれば附隨情態及び第二義事項によつて、事物の價値を計量するほどの考

へ方は、創造する力と藝術家良心とを知つてゐる各の人が、侮蔑及び同情なしに見下ろし得ないところの、初歩的な幼稚極まる考へ方である。汝等に對する同情！それは固より汝等が意味してゐる如き同情でない。それは「社會的困厄」に對する同情でない。「社會」及び其病弱者や薄倖者に對する同情でない。我々の周圍に地上に横つてゐる如き先天的の不徳者不具者等に對する同情でない。主權——「自由」と呼ばれてゐる——を獲ようとするところの、不平だらだらな、抑へつけられた、謀叛づきな奴隸階級に對する同情では尙更ない。我々の同情は一のより高きより、遠く見るところの同情である。我々は如何に人間が自らを矮小にするか、如何に汝等が彼を矮小にするかを見る！そして汝等の同情をば一の名狀すべからざる苦惱で以て我々の見せる場合があり、斯うした同情を我々の拒斥する場合があり、汝等の眞面目さを如何なる氣輕さよりも危険なものに我々の思ふ場合がある。汝等は出来れば——そして如何なるより、馬鹿氣きつた「出来れば」もない——苦患を廢除してしまはうと欲する。そして我々は？それは正しく我々が、苦患を以前にありしよりも寧ろより高く且つより惡しくしたがるやうに見える！汝等の理解する如く、安樂にやつて行くといふのは、たしかに如何なる標的でもない。それは我々にまで一の結末と思はれる！人間を直に笑ふべく侮蔑すべきものになすところの、彼の没落を願望させるところの一情態である！苦患の、大なる苦患の訓練は——此訓練だけがこれまで人間のあらゆる向上を招致したものであることを汝等は知らないか？魂の爲めに強さを培

養してやるところの、災厄に於ける魂のあの緊張は、大なる破滅を目にしたの其戦慄は、災厄の負擔や、忍耐や、解釋や、虐遇に於ける其案出力や勇敢は、並びに苟くも魂に贈られたほどのあらゆる深さや、祕密や、假面や、理智や、奸計や、偉大さは——それは苦患の下に、大なる苦患の訓練の下に魂へ贈られてゐなかつたか？ 人間に於ては創造された物と創造者とが一になつてゐる。人間の中には材料や、断片や、餘剰や、粘土や、軟泥や、無意味や、混沌があるだけでない。創造者や、彫刻家や、槌の硬さや、觀覽者の神性や七日目もある——汝等はこの對立を理解するか？ そして汝等の同情が「人間の中なる創造されたもの」にあてはまるといふこと、形造られ、打ち壊され、鍛へられ、引き裂かれ、燃かれ、熱せられ、清煉されねばならぬものにあてはまるといふこと、どうしても苦患せねばならぬ、また當然苦患させるべきものにあてはまるといふことを、汝等は理解するか？ 偕て我々の同情は？——我々の反對の同情が汝等の同情を、總ての柔弱化の中最悪なものとして斥ける時、その我々の同情が何にあてはまるかを汝等は理解しないか？ 乃ち同情に對立しての同情である！しかし乍ら、反復して言ふ、あらゆる快苦及び同情の問題より、一段と高い問題があるのだ。そしてこの快苦及び同情の問題をのみ取扱ふところの各の哲學が一の子供らしさである。

二二六

我等不道德家！——我々の關係してゐる此世界は、我々が恐れたり愛したりせねばならぬ場所であるところの此世界は、精緻な命令の、精緻な服従の此殆んど見るべからず聞くべからざる世界は、各の點に於て「殆んど」の、釣つばい、迷はせ勝ちな、すばしつこい、敏感な一の世界は、然り、それは氣の利かない見物や馴々しい好奇心からうまく防衛されてゐる！ 我々は義務の、峻嚴なる綱や肌衣に編み込まれて居り、そこから脱け出すことが出来ない。その處にこそ我々「義務の人間は、我々もまたあるのである！ 時としては固より我々は我々の『鍵』の中に、我々の『劍』の間に舞踏する。だがより、屢々、我々がそれらの事情の下に切齒し、我々の運命のすべての内密な残酷さに苛立つてゐるといふのも本當である。しかし乍ら我々は、我々の欲するところを爲さう。馬鹿者と皮相見とは我々に反對して言ふがいい、『これは義務心のない人間である』と。我々はいつでも馬鹿者と皮相見とを向ふに廻してゐるのだ！

二二七

正直、これが我々の、我々自由思想家の脱却し得ない我々の徳であるとしたならば、いざや我々はあらゆる意地悪さと愛善とを傾倒してそれを獲ることに努力しよう。そしてただ一つ我々に残つてゐる我々の徳に於て我々自らを「完全」になすことに勞れないようにしよう。其光輝がいつかは、一の鏡

金された青い嘲笑的な夕映ゆふばえの如く、此年老いたる文化及びその陰暗なる眞面目さの上に横つたままで
ゐようともかまはない！ 借てそれにも係はらず、我々の正直さが勞れて来て、太息たいきをついて、手足
を伸ばして、我々を嚴酷すぎるとなし、一の愉快な不徳の如くより、善良で、より容易で、よりやさし
いものにしたと願つた時、我々は、我々最終の克己派は嚴酷さを失はないでゐよう。そして苟くも
我々自らの中に有つてゐるほどのどんな悪魔的なものをでも、その救助にまで送りつかはさう——
即ち、氣の利かない、ぼやけたものに對する我々の嘔吐感を、我々の "Zimur in vetium" を、我々
の冒險的勇氣を、我々の鋭くされ氣むづかしくされた好奇心を、權力及び世界克服への我々の最も精
緻なる、最も矯飾せられたる最も靈活なる意志（將來のあらゆる領土を熱望的にさまよひ歩いてゐる
ところの）をも送り遣はさう。我々は總ての我々の「悪魔」をつれて我々の「神々」を救助に行かう！
我々がそれに就いて誤解されたり穿き違へられたりするといふのはありさうな事だ。それが何であら
う！ 人々は言ふであらう、「彼等の「正直」——それは彼等の悪魔性であつて、そのほかの何物でもな
い」と。だが、それが何であらう！ そして人々が正當であつた場合にすらも！ 總ての神々はこれ
までさうした神聖になつた、改名された悪魔でなかつたか？ 借て結局我々は我々自らについて何を
知つてゐるか？ 我々を導く精神が何と呼ばれたがつてゐるか（それは名前の問題である）？ また如
何に多くの精神を我々は藏匿してゐるか？ 我々の正直さを、我々自由思想家は——それが我々の虚

榮心に、我々の裝飾に、我々の狹隘さに、我々の愚鈍さにならないことの爲め氣を付けよう！ 各の
徳は愚鈍さへ、各の鈍愚さは徳へ傾く。「神聖に達するほどに愚鈍な」と、露西亞に於て言はれてゐる。
我々が正直さから終にまた聖徒や退屈になつてしまはないことの爲め氣をつけよう！ 人生は退屈す
べく百倍も短か過ぎるではないか？ 人が永久の生命を信じねばならないといふのも、その目的とす
るところは……

二二八

總ての道德哲學がこれまで退屈なものであり、催眠劑にまで屬してゐたといふことの發見を、人々
よ私に赦せよかし。又「徳」が私の目にまで其辯護者の與ふる斯うした退屈さによつて、他の何物によ
つてよりも以上に害はれてゐるといふことの發見を赦せよかし。だが斯う言つたからとて私はそれの
一般的有用を看落さうと思はなかつた。なるべく僅かな人々が道德について考察するといふのは結構
な事である。従つて道德が他日面白いものにならないであらうといふのは、非常に結構な事である！
だが心配するに及ばない！ 今日も尙ほ、かつてあつた通りにあるのだ。道德に對する考察が危険な、
奸譎な、誘惑なものになり得たといふ——恐ろしい宿命がその内にあり得たといふこと概念を有す
る（又は與へる）何人をも、私は歐羅巴の中に見ないのである。例へばあの癡れを知らぬ、避くべから

ざる英吉利の功利主義者等を見るがよい。如何に彼等は勿態ぶつて尊敬すべくペンタムの足跡を行つたり來たりすることぞ（一のホメエルの比喩は更に明白に言ひ表はすのである）。彼自身が既に尊敬すべきヘルゼイシアスの足跡を歩つてゐたかの如く！（然り、あのヘルゼイシアスは決して危険な人物ではなかつた——ガリアニの言葉をかりて云ふと ce sénateur Pœocourante であるところの彼は）。如何なる新しき思想でもなく、ある舊い思想のより精緻な轉向曲折の何物でもなく、以前に思想されたものの現實的な歴史でさへもなく、要するに人が若干の意地悪さを以て醜態させないならば、一の不可能なる文献なのである。乃ち此等の道學者等（それを讀まねばならぬならば、全く氣を配つて讀まねばならぬところの）の中にも、Cant と呼ばれるところの、又道徳上の偽善矯飾であるところのあの古い英吉利的不徳がむぐり込んでゐる。今度は科學といふ新しい形式の下に包み匿されてゐる。加之、以前の清教徒等の一種族が道徳とのあらゆる科學的な交渉に際して當然經驗すべき良心の苛責を、内密に防禦するといふことも缺けてゐなかつた。（道徳家は清教徒の反對物ではないか？ 精しくは道徳を疑はしき、疑問を値する物と見做すところの、つまり問題と見做すところの思想家として。道徳を論ずるといふことは不道徳であり得なかつたか？）結局彼等はいづれも皆、英吉利道徳が正常なものとして承認されることを要求する——丁度それが人類に、或は「一般的功利」に、或は「最大多数者の幸福」に、否！ 英吉利の幸福に最も善く奉仕する限りに於て。彼等はあらゆる方法を盡して彼等自

らに言ひ聞かさうとねがつた——英吉利的幸福を努力し求むるのが（それは Comfort と Fashion とを、高々議會に於ける一の席を努力し求めることなのだ）、同時に徳の正しい道筋でもあるといふことを。否、苟くもこれまで世の中に徳なるものがあり得た限り、それは斯うした努力の中にこそ成立したのであるといふことを。總ての斯うした重苦しい、良心を擾されたる群畜（利己主義を一般的福祉へ到るものとして辯護しようとするところの）は、何等知らうとも嗅ぎつけようとも思はないのである——その「一般的福祉」が何等の理想でも、何等の標的でも、何等の苟くも捕捉されさうな概念でもなく、ただ一の吐劑にすぎないといふことを。一人に正當であるものが、尙ほ且つ全く他人にまで正當であり得ないといふことを。總ての人々に對する一の道徳の要求が、丁度より、高き人々への侵害であるといふこと、乃ち、人間と人間との間に一の階級秩序があり、従つてまた道徳と道徳との間にもそれがあるといふことを。彼等は、此等の功利主義的な英吉利人は控目な徹底的凡庸なる種類の人間である。そして前述の如く彼等が退屈である限りに於て、我々は彼等の功利を十分に高く評價することが出来ないのである。加之我々は、次ぎの詩句に於て一部分試みられてゐる如く、彼等を激勵しなければならなかつた。

健在なれ、汝等殊勝なる荷車引よ、

いつも、「のろのろとやるほど結構、」
頭と膝とをし、やちこ張らせていつも、

感激もなく、諧謔もなしに、

打碎くことの出来ない凡庸さで、

Sans génie et sans esprit !

(天稟もなく、また活気もなしに！)

三三九

人間性を誇り得るそれらの近き時代にも、「野蠻にして残忍なる禽獸」(それを支配することこそそれらのより、人間的な時代の誇を構成してゐるのだ)に對する随分多くの恐怖が、その恐怖についての随分多くの迷信が矢張り残つてゐて、明々白々な眞實すらも、それがそれらの野蠻なる、終に戮り殺されたる禽獸を再び生きかへらせさうだといふ理由から、幾世紀間もの協定に於ての如く、久しく言ひ現はされない儘になつてゐるほどである。事によつたら私は、斯うした眞實を取り逃がす時何等かの冒険をするであらう。他の人々は再び彼等を捕へ、彼等が其古い片隅におとなしく忘られて横るまで、それだけ澤山の「信心深い考へかたの乳」を彼等に飲ましてやるがよい(譯者註——シラアの「キル

ヘルム・テル」第四幕第三場から取つて來た言葉遣である)。人は残忍さについて學び直し、その目を見開かねばならぬ。人は結局斯うした不遜な酷い間違ひ——例へば悲劇に關して古來の哲學者等が抱いてゐたやうな——が此上もう有徳らしく厚顔に歩き廻らないことの爲め、氣短さを學び知らなければならぬ。我々が「より、高き文化」と呼ぶところの殆んど總ては、残忍性の精神化と深化との上に基礎を置いてゐる。これが私の論結である。かの「野蠻なる禽獸」は全く戮り殺されてゐない。それは生きてゐる。それは生き榮えてゐる。それは單に神聖化されたに過ぎない。悲劇の痛ましき悅樂を構成してゐるのは残忍性である。所謂悲劇的同情に於て、加之あらゆる崇高なるものの基底に於て、最も高く最も精緻なる形而上學の感動に至るまで、快く人々の心に働きかけるところのものは、其甘みを残忍性の混淆されたる成分からのみ獲て來るのである。演武場に於ける羅馬人が、十字架の大歡喜に於ける基督教徒が、火刑もしくは闘牛を目前にしたる西班牙人が、自らを悲劇に追ひつめて行くところの今日の日本人が、血なまぐさい革命に郷愁を感じるころの巴里の場末の労働者が、トリスタンとイソルデとを何の他愛もなく「堪へ忍ぶ」ところのワグネル派の婦人が——此等の總ての人々が享樂し、且つ神秘的な熱情を以て飲み込まうと努めるところのものは、それは「残忍性」といふ偉大なる魔女の藥酒である。此場合勿論我々は昔の馬鹿々々しい心理學を驅逐し去らねばならぬ。昔の心理學は残忍性に關して、それが他人の苦惱を目撃して成立するといふことを教へ得たに過ぎない。しかし自分自身

の苦惱にも、自分自身を苦惱せしめることにも豊富な、豊富すぎる享樂がある。そして苟くも人間が、フィニシア人や禁欲家等の如く宗教的意義に於ける自己否定もしくは自己殘害にまで、或は一般に感性超脱、肉體超脱、悔恨にまで、清教徒的悔改癡癡にまで、良心の苛責にまで、パスカルの sacrifizio dell' intelletto にまで自らを委し去つた場合には、彼はひそかに彼の殘忍性によつて、自分自身へのあの危険なる感動的戰慄によつて誘はれ、押し出される。所詮我々をして考量せしめよ——認識する者すらも、彼が精神の傾向に反して、又随分屢々彼の心情の願ふところにさへ反して認識すべく、乃ち彼が肯定し、愛好し、禮拜したいと思ふ場合にも否を言ふべく、彼の精神に強ひる時、殘忍性の藝術家及び醇化者として働いてゐるといふことを。げに物事を深く根本的に扱はうとする各の行爲が、絶えず外觀と皮相とへ走らうとする精神の根本意志に對する一の暴行であり、故意の傷害である。認識に對する各の意欲の中に既に一滴の殘忍性はあるのである。

三三〇

思ふに私が此處に『精神の根本意志』について言つたところのものは、一も二もなく理解されないであらう。人よ、私に一の説明を許せよかし。民衆から『精神』と呼ばれるところの命令的な或るものは、それ自らの中に、またそれ自らのまはりには君臨し、それ自らを主權者として感ずることをねがふ。

それは數多から單一への意志を、一の結合するところの、屈服するところの、支配せむとするところの、又實際に支配者的な意志を有つてゐる。此際その要求と能力とは、生活し、成長し、増大する一切のものにまで、生理學者から與へられるところのそれと同一である。他の物を自分の物にする精神の力は、新しいものを舊いものに同化し、多様なものを單純化し、全く相反してゐるものを看過したり放擲したりする一の強烈なる傾向の中に顯はれる。恰かもそれが他の要素に於ける、『外界』の各の部分に於ける一定の輪廓や線條を、勝手により、強くアンダラインしたり、際立たせたり、誤魔化したりすることく。その場合その目的は新しい『經驗』の同化であり、新しい事物を舊い順序の中に配置することであり、従つて成長といふことである。更に一層明確に云へば、成長の感情が、増大した力の感情がその目的とするところのものである。この同じ意志に奉仕するのは精神の外見上反對な衝動である。一の突然に現れるところの無識への、勝手な閉鎖への決定である。その窓の閉鎖である。此物其物への内的拒否である。締め出しである。多くの知り得べきものに對する一種の防衛的情態である。暗黒に對する、閉ぢ込めたる地平線に對する満足である。無識の肯定及び賞讃である。斯うした總てがその同化力の程度に應じて、比喩的に云へば『消化力』に應じて必要である如く。そして實際にも『精神』は最もよく『胃腑』に似てゐるのである。同じくこれに屬してゐるのは自ら欺かれようとする其時々々の意志である（事によつたら、それがこれこれであるといふのでなく、ただこれこれ通

つてゐるに過ぎないといふことの、一のいい加減な預覺を以て、あらゆる不確實と曖昧とに於ける悦樂である。あの片隅の氣儘な狹隘及び内密に於ける、近すぎること、前景に於ける、大きくされたもの、小さくされたもの、出来損つたものに於ける愉快なる享樂である。總てのかうした權力顯現の氣儘さに於ける自己享樂である。所詮これに關聯しては、他の精神を欺瞞し、それらのもの前に自らを矯飾しようとする、かの精神の疑ふべくもない手つ取り早さがある。一の創造するところの、造形するところの可變的な力のかの、絶間なき壓迫衝動がある。精神はそこに彼の假面的多様性と狡猾とを享樂する。彼はその中に彼の安全といふ感じをも享樂する。丁度彼のプロオトイス（希臘神話に於て、さまざまに其姿を變へるところの海神）的技術によつて、彼はげに最も善く防衛せられ隠蔽せられるのである！ 外見への、單純化への、假面への、外套への、云ひ換へれば皮相へのかうした意志は——各の皮相は一の外套であるから——事物を深く、複雑に、徹底的に取るところの、取らうと欲するところの、認識する者のあの崇高なる傾向と反對に働き合ふ。後者は各の勇敢なる思想家が至極當然の事乍ら、自分自身に對する彼の目をかなり久しく硬くし鋭くし、峻嚴なる訓練と、又峻嚴なる言葉に習熟してゐるとしたならば、彼自身の中に認知するであらうところの理智の本心及び趣味の一種の殘忍性としてである。彼は言ふであらう、「私の精神の傾向の中には何等かの殘忍なものがある」と。有徳な人々及び愛すべき人々が彼にまで左様でないことを言ひ聽かすべく試みよかし。

全くのところ、殘忍性の代りに「過度なる正直さ」でもが談られて、耳語されて、評判されてゐたのならば——我々自由な、非常に自由な精神にまで——それはより、結構に聞きなされたであらう。そして恐らく實際に他日我々に對する後世からの評判はさうしたものでもあらうか？ それまでのところ——なぜと云つて、それまでにはだいたい中間があるから——我々はそんな道徳上の美辭麗句で以て我々自らを覆ひかくさうとしてはならぬ。我々のこれまでの仕事全體が丁度此趣味と其華やかな賑かさをあきあきさせてゐる。それは美しい、照り輝き、鳴り響くところのお祭的な言葉である。即ち正直だとか、眞實への愛だとか、睿智への愛だとか、認識の爲めの犠牲だとか、眞摯なる者の英雄主義だとか云ふのだ。それには人の胸を自尊心で以てふくらませるところの何物かがある。しかし我々隱遁者及びモルモトは、我々はずつと前から隱遁者的本心の奥底に我々自らへ説得しきつてゐた——此立派な言葉の華やかさも無意識的な人間的虛榮心の舊い虚飾に屬してゐるといふことを。又斯様な阿諛的な色彩や塗抹の間にも homo natura と云ふ恐るべき原文の再び認められねばならぬといふことを。要するに人間を自然にまで連れもどすこと。これまで homo natura といふあの永久的な原文の上に掻き刻まれ塗りたくられてゐた數多くの空虚な空想的な解釋や敷衍を支配すること。人が今日學術の鍛練に於て無情にされて、恐れを知らぬエディプスの目と詰め塞がれたオディソイスの耳を以て、あまりにも久しく彼にまで「汝はより、多くである！ 汝はより、高い！ 汝は異つた素性を有つてゐる！」と欲

ひきかしてゐる古い形而上學的捕禽者の誘惑を感じなくなつて、他の自然の前に立つ如く、人間が今後その如くして人間の前に立つやうにすること——これは一の奇異なる又馬鹿げた仕事であるかも知れない。しかし乍らそれは一の仕事である。誰がそれを否定し得たか！ 何故に我々はそれを、かうした馬鹿げた仕事を選んだか？ 或は別の問ひ方を以てすれば、「そもそも何故の認識ぞ？」各の人がそれについて我々に問ひ尋ねるであらう。そして我々は、かくの如く押しつけられて、百度も既に同じやうに自ら問ひ尋ねたところの我々は、我々は何等のより善き答をも見出さなかつたのである。見出さないのである……

三三一

學習は我々を變化する。それは生理學者の知つてゐる如く、單に「保存する」だけでない、總ての營養の爲すところのものを爲すのである。しかし乍ら我々の奥底に、全く「下の方に」は、勿論何等かの教ふべからざるものがある。精神的宿命の花崗石が、豫定され選定された間に對する豫定された答と決定との花崗石がある。各の重大なる問題に於て、不變なる「これが私である」は物を言つてゐる。例へば男子と婦人について一人の思想家は學び改めることが出来ない。むしろ單だ學び盡すことが出来るだけである。それについて彼自身の中に「確定」してゐるところのものを、突き詰めて發見するだけ

である。折々我々は、丁度我々の爲めに大なる信仰をもたせるやうな、問題の或る解決を見出す。恐らくその後それは彼の「信念」と呼ばれるであらう。後日人はそれの中に單だ自己認識への足跡を、我といふ問題への、——より正しく云へば、我々といふ大なる愚かさへの、我々の精神的宿命への、全く「下の方の」教ふべからざるものへの道標を見るだけである。私が今しも私自らに對して拂つたやうな、豊かなる慰懃さを見たほどの人は、私が「婦人そのもの」について若干の眞實を發言することを、恐らくより容易く許してくれたであらう——如何なる程度にまでそれが私の眞實であるかを、初めから知つてゐてくれたなら。

三三二

婦人は一本立にならうとねがつてゐる。そしてその爲めに、「婦人その物」について男子の蒙を啓き出してゐる。これは歐羅巴の一般的醜化に於ける最惡の進歩に屬する。なぜと云つて、婦人の學術的傾向及び自己暴露の斯うしたぶざまな試みが何を明るみへ持ち出さねばならぬかよ！ 婦人は羞恥心に對する随分多くの理由を有つてゐる。婦人には随分多くの街學的なものが、皮相的なものが、學校教師的なものが、小生意氣なものが、だらしなさが、また淺慕さがかくされてゐる（試みに子供等に對する彼女の態度といふものを研究して見るがいい）。それが實際にはこれまで男子に對する恐怖に

よつて最も善く制御されてゐたのだ。萬々一にも「婦人に於ける永久に退屈なもの」が——それを婦人がどつさり有つてゐる——とつとと駈け出すことを許されたらどうだらう！ 婦人にして彼女の惻發さと技巧とを、愛嬌の、遊戯の、憂拂ひの、氣休めの、また好い加減に始末をすることの惻發さと技巧とを、婦人にして愉快なる欲望への彼女の精かなる器用さを、主義として、すつかり忘却しはじめらるらば！ 今や、恐れても恐るべき（アリストファネス聖者の名を呼びたい！）婦人の聲が既に擧げられてゐる。最初に且つ最終に婦人が何を男子から要求するかは、醫學上の明白さを以て物凄く擧げ示されてゐる。婦人が斯様に學術的になるべく取掛るといふのは、最悪の趣味ではないだらうか？ これまでは仕合せにも智見の開明啓發は男子の事柄であり、男子の天分であつた。我々は其場合「我我自らの間に」留まつてゐた。そして結局我々は、婦人等が「婦人」について書くところのもの總てを見て、そもそも婦人が自分自身について本當に開明啓發を意欲するかどうか、また意欲し得るかどうかといふ、かなりな疑問を抱き得るのである……若し婦人がそれで以て自分自身に對する一の新しい飾りを求めないならば——だが私は思ふ、自らを飾るのは永久に女性的なものに屬してゐないだらうか？——さらば改めて言ふまでもなく、彼女は自分自身を恐れしめようと欲ふのである。恐らく彼女はそれで以て支配者にならうと欲ふのであらう。しかし乍ら彼女は眞實を欲求しない。婦人にとつて眞實が何であらうぞ！ 抑もかうした婦人にまで、何物も眞實よりより縁遠くなく、より忌まはし

くなく、より敵らしくない。彼女の大なる技術は虚言であり、彼女の最高の關心事は外觀と美しさである。我々はそれを告白しよう、我々男子等は。我々は正に婦人に於ける此技術と此本能とを敬愛する。骨の折れる仕事をやつてゐる我々は、その手や、目や、やさしき愚かさの下に、我々の眞面目さや、我々の重苦しさを、我々の奥深さが、殆んど一の愚かさの如く我々自らへ見えるといふやうな、さういふ生物と付き合つて骨休めをしたいのである。結局私は問ひ尋ねて見よう、「婦人自身かつて婦人の頭に深みを、婦人の胸に正しさを承認したことがあるだらうか？ そして一體に、「婦人」はこれまで婦人自身から最も酷だしく輕蔑されてゐたのでは、又全然我々から輕蔑されてゐなかつたのではなからうか？ 我々男子等は婦人が開明啓發によつて彼女自身を露出しつづけたいことを願望する。教會が *mulier taceat in ecclesia*（婦人は宗教に關して沈黙せよ！）と宣した時、それが婦人に對する男子からの心遣ひであり、愛惜であつたごとく。ナポレオンが餘りにも雄辯なるド・スタエル夫人に *mulier taceat in politicis*（婦人は政治に關して沈黙せよ！）を言ひ聞かせた時、それは婦人のためになる事だつた。そして私の考では、今日婦人等に向つて *mulier taceat de muliere*（婦人は婦人自らに關して沈黙せよ！）と説ききかす人こそ婦人の本當の友達である。

それは本能の腐敗を暴露し示してゐる——それが悪趣味を暴露し示してゐるといふことは別にしても——ある婦人が丁度ロオランド夫人だとか、ド・スタエル夫人だとか、ヂョルヂ・サンド君だとかを引合ひに出すならば（あだかもこれで以て『婦人そのもの』のためになる何事かが證明されでもしたかの如く）。男子等の間では上記の人物は三人の喜劇的な婦人そのものであり、それ以上の何物でもない！ そしく正しく婦人の解放及び婦人の自己支配に對する最善の自からなる反對論證である。

二二四

臺所に於ける間拔さ加減。料理番としての婦人。よつて以て家族や家の主人の食物が調へられるところのあの、恐るべき思慮なさ！ 婦人は何を食物が意味するかを理解してゐない。それでゐて料理番たらうとする！ 婦人にして思想する生物であつたならば、彼女はたしかに數千年來の料理番として、最も大なる生理學的事實を見出し、同じく醫療の技術をも自分の物にした筈である！ 悪しき料理女等によつて——臺所に於ける理性の缺乏によつて、人類の進歩は最も久しく喰ひ止められ、最も甚だしく害はれて來てゐる。今日でも事態はあまり改善されてゐない。——高等教育を受けてゐる娘さん達にまで一言して置く。

二二五

何でもない考や思ひつきで、文句で、僅かな言葉數で、その内に一の文化全體を、一の社會全體を突然結晶せしめるやうなものがある。ド・ラムベエル夫人が彼女の息子に言つたあの折に觸れての言葉はそれに屬する。曰く、mon ami, ne vous permettez jamais que de folles, qui vous feront grand plaisir！ 序ながら、曾つて一人の息子に與へられたる最も母親らしき且つ最も賢き言葉である。

二二六

ダンテとゲエテとが婦人について信じてゐたところのもの——前者は、彼が“ella guardava susso, ed io in lei”と歌つた時、後者は彼がそれを翻譯して“das quig=Weibliche zieht uns hinan”（永に女性的なるものは我等を引き上げる。）と言つた時——私は各の高貴なる婦人が此信仰に對して自ら防衛すべきことを疑はない。なぜと云つて、彼女は丁度その事を永久に男性的なものについて信じてゐるからである。

二二七

婦人の爲めの七の箴言

一人の男子の我等にまで匍匐し來る時、いかにいと久しき無聊の逃げ去るかな。

嗚呼！ 老年と、並びに學術とは弱き徳にも力を與ふ。

黒き衣服と沈黙とは各の婦人をして聰慧なるものに見えしむ。

幸福なる時我は何人に感謝すべきか？ 神に！ 而して我が仕立屋に。

年若きは——花をもて飾られたる洞窟。老いたるは——蛇怪の這ひ出づるを見る、

高き名聲と、麗はしき脚と、加ふるに男子と。嗚呼、彼にして我が物ならましかば！

簡潔なる言葉に、深長なる意味をこめて——牝の驢馬の爲めの策略！

婦人等はこれまで男子等から鳥——何等かの高みより彼等の間へ迷ひ下つたところの鳥の如く扱はれてゐた。何等かより精緻な、より脆い、より荒い、より不思議な、より甘い、より生きいきとしたものとして。けれども又、それが逃げ去らない爲め、閉ぢ籠めて置かれねばならないやうな或るものとして。

二三八

「男女」と云ふ根本的な問題に於て誤謬を犯し、この場合一の永久に敵視しあつてゐる緊張の最も深刻なる對立と必然性とを否定するのは、この場合恐らくは平等の權利を、平等の教育を、平等の要求と責務とを夢想するのは、それは淺薄さの類型的な一徵證である。そして斯うした危険な場所に彼自らの淺薄さ——本能に於ける淺薄さ——を證據立てた一思想家は、一般に猜疑深いもの、それよりも以上に、見透されたもの、見露はされたものと見做されていいのである。多分彼は生活の、また將來の生活のあらゆる根本問題に對して、餘りにも「短き」に過ぎ、如何なる深みへも降り行き得ないであらう。これに反して其精神にも其欲求にも深みを有するところの男子は、峻嚴さに堪へ得る、たやすく峻嚴さと取り違へられる寛仁の深みをも有するところの男子は、婦人に關して常にただ東洋的にのみ考へることが出来る。彼は婦人を所有物として、閉ぢ籠めて置ける財産として、奉仕すべく預定

された、また奉仕の中に自らを完成するやうな或るものとして解せざるを得ない。彼は曾つて希臘人が、あの亞細亞の最善なる相續者であり門下生であるところの希臘人がなしたる如く、此事柄に關しては亞細亞の驚くべき理性に、亞細亞の優れたる本能に立脚せざるを得ない。そしてかの希臘人は人も知る如く、ホメエルよりペリクレスの時代に至るまで、文化及び國力の増進と共に、一步一歩婦人に對してもより峻厳に、云ひ換へれば、より東洋的になつて來たのである。これが如何に必然的であり、如何に論理的であり、如何に人間的に願はしくさへあつたか——この事につき我等をして我等自ら考量せしめよ！

二三九

弱い女性が男性の側から、如何なる時代に於ても我々の時代に於けるほど、それほど大きな尊敬を以て扱はれたことはない。これは老年者に對する不敬と同様、民主主義的の傾向及び根本趣味に屬してゐる。直ぐに又かうした尊敬が濫用されるやうにならうとも何の不思議な事があらうぞ？ 彼等は、より多くを意欲する。彼等は要求することを學び知る。彼等は終に例の尊敬を殆んどもう厭はしきものに感じてゐる。彼等はむしろ權利の争奪を、いや全く實際に闘争の方をましたと思ふであらう。要するに、婦人は羞恥を失ひつつあるのである。更に附け加へて言ふならば、彼女は趣味をも失ひつつ

あるのである。彼女は男子を恐れることを忘れてゐる。けれども「恐怖を忘れる」ところの婦人は彼女の最も女性的な本能を犠牲にささげてしまふ。男子の中なる恐怖させるものが、よりはつきり云へば男子の中なる男子がもはや意欲され開發されない時、婦人が出しや張るやうになるといふのは、十分正當であり、又十分呑み込める事である。呑み込み難いのは、丁度それと共に、婦人が翻敗するといふことである。これが今日の出來事だ。我々をしてそれについて我々自らを欺かしめざれ！ 苟くも産業的精神が軍事的貴族的精神に打ち勝つた處では、今や婦人は一書記の經濟上並びに法律上獨立を努力し求める。「書記としての婦人」は出來上りつつある近代社會の入口に掲げられてゐる。婦人がかくの如く新しい權利を自分の物にし、「主人」にならうと努め、婦人の「進歩」を彼の旗幟に書きしるしてゐる間に、恐ろしき明白さを以て正反對の事が實現される。即ち婦人が退歩してゐるのだ。佛蘭西革命以來歐羅巴に於ける婦人の勢力は、婦人が其權利及び要求を増大した割合に於て減少してゐる。そして「婦人の解放」はそれが婦人自身から（ただに男性的淺薄者流からのみならず）願望され促進されてゐる限りに於て、かくの如く最も女性的な本能のいよいよ甚だしき弱体化及び殘害の著しき一徵候たることを明らかにする。此運動の中にある愚劣さは、一の殆んど男性的な愚劣さは、立派に育て上げられた婦人が——つねに恰愴な婦人であるところの——衷心からして恥ぢなければならぬやうなものである。その地盤の上でこそ最も確實に勝利を得ることの出來るやうな嗅覺を、直覺をなくしてし

まふこと。婦人特有の武器の使用を等閑なほすにすること。婦人が以前は自制して、また精こころやかな巧妙なる慎ましさに於て振舞つてゐたところの、男子の前へのさばり、出ることを、恐らくはあまつさへ「書物にまで」出掛けて行くこと。婦人の中に包みかくされた根本的に異つた理想に對する、何等かの永久に必然に女性的なものに對する男子の信仰を、立派な厚かましきで冷却さしてしまふこと。婦人があるかよわき、不思議に野性を帯びた、又往々にして愉快な家畜の如く、保存され、世話をされ、保護され、容赦されねばならぬといふ考を男子に棄てさすべく、力説し且つ饒舌を弄すること。これまでの社會秩序に於ける婦人の地位を繋ぎとめてゐたところの、そして尙ほ繋ぎとめてゐるところのあらゆる隷從的隸屬的な關係を無器用に且つ憤激しながら蒐集すること（あだかも奴隸制度があらゆる高級文化の、あらゆる文化向上の反證であつて、そして其條件でなかつたかの如く）——斯うした總てのものが女性的本能の崩壊でなかつたら、女性滅却でなかつたら何であるか？ 固もとより、博學な男性的驢馬の中には随分愚劣な「婦人の友」や「婦人の悪化者」共がゐて、かくの如く女性をなくしてしまふこと、又歐羅巴に於ける「男子」が、歐羅巴的な「男らしき」に病をなしてゐるところの總ての愚劣さを見習ふことを婦人にすすめてゐる。婦人を「一般的教養」にまで、否新聞を讀んだり政治を談じたりすることにさへも引き下ろしたがつてゐる。人々は其處此處で婦人等を自由思想家や文學者にさへもしようとしてゐる。あだかも信心深さをもたない婦人が深みのある不信心な男子にとつて、何等かの完

全に厭はしき、或は笑ふべきものでなかつたかの如く。人々は殆んど到處に、あらゆる種類の音樂の中で最も病的で最も危険なるもの（我々の最近の獨逸音樂）を以て彼女等の神經を汚毒してゐる。そして彼女等は一日一日とよりヒステリイ的にされ、強健なる子供等を生むといふ彼女等の最初にして最終なる職分をより出来なくされてゐる。人々は一般に彼女等を更に一層「開發」し、また彼等の言つてゐる如く、「弱い性」を開發によつて強くしてやらうとする。あだかも歴史が最も痛切に次ぎの事を教へてゐなかつたかの如く——人間の「開發教化」と弱化、換言すれば意志力の弱化、寸斷、滅殺とが、いつも歩調を揃へて進んだといふことを。又世上の最も有力な最も人を動かすところの婦人等が（最後にはナポレオンの母もが）正しく彼女等の意志力のお蔭で（學校教師等のお蔭でなく）彼女等の男子に對する優勢と支配力とを獲てゐたといふことを。婦人にあつて尊敬の念を、また往々恐怖の心を吹き込むところのものは、男子の本性よりも「より本性的」であるところの彼女の本性である。彼女の純粹な、肉食獸的な、狡猾な、なやかさである。手袋の下の彼女の獸爪である。天真爛漫なる彼女の利己主義である。彼女の教育し難さと内的な荒々しさである。彼女の欲求や徳のつかまへどころなさと、廣さと、逸れ具合とである……あらゆる恐怖にもかかはらず、この危険な美しい猫なる「婦人」に對して同情を起させるものは、彼女が如何なる生物よりもより苦んで居り、より傷き易く、より多く愛を必要として居り、より多く幻滅すべく運命づけられて居るやうに見えるといふことである。恐

怖と同情と、これらの感情を以てこれまで男子は婦人の前に立つた——狂喜させると共に胸をかきむしるところの悲劇へ、いつも既に一步を踏み込みながら。ところがどうだらう？　これが今やお仕舞ひにならねばならぬではないか？　そして婦人の魅力喪失がはじまつてゐるではないか？　婦人の退屈化が徐ろにやつて來てゐるではないか？　おお、歐羅巴よ！　歐羅巴よ！　汝にとつていつも最も興味があつたところの、又いつもいつも汝に危険を思はせるところの、角の生えた獸を我々は知つてゐる！　汝の古い比喩譚たとへばなしは今一度「歴史」になつたかも知らない。一の恐ろしく巨きな愚劣さが今一度汝を支配し、汝を連れ去つてしまつたかも知らない！　そしてその愚劣さの下には如何なる神も包みかくされてゐない、如何なる神も！　ただ、一の「觀念」が、一の「近代的觀念」だけが……

第八章 民族と祖國

私はリヒアルド・ウグネルの「マイスタル・ジンデル」への序樂を、はじめて繰返し聽いて見た。それはそれが理解される爲めに二世紀間の音樂を尙ほ生きてゐるものと豫想することの誇を有つところの、立派な、華やかな、重苦しい、近來の一藝術である。斯様な誇が勘違ひをしなかつたといふのは獨逸人等の名譽である。どんな風味と力とが、どんな季節と風土とが此處に混在してゐないか！それは古代的に感じさせるところもある。異邦的で、未熟で、新しすぎるころもある。それは勝手氣儘であると共にすばらしく傳統的である。それは人の惡さうな感じを與へることもめづらしくなく、更により、屢々粗暴で、生硬である。それは火と勇氣とを有つて居り、同時にあまりに晩熟にすぎる果物のたるんだ、青しやぶれた外皮を有つて居る。それは廣く一杯に流れる。そして忽ち名狀すべからざる逡巡の一刹那がある。謂はば原因と結果との間に生じて來る一の間隙が、我々に夢を見させる一の壓迫が、殆んど一の夢魔がある。けれども直ぐに又寛ぎの、此上もなく多様な寛ぎの、古く新しき幸福のものとの流は擴がつて來てゐる。中にも著しいのは藝術が包みかくさうとしないところの自身に對する彼の悦びである。彼の此處に用ひたる手段の——彼が我々に打明けようとしてゐる如く、新に獲得された十分に試験し盡されない藝術的手段の老巧さについての、彼の驚嘆したる満足げなる

自認である。しかも全體を通じて何等の美しさもなく、何等の南方的なものもなく、南方的な精やかな天の晴れやかさの何物もなく、都雅らしい何物もなく、何等の舞踏もなく、殆んど論理への一の意志もない。あまつさへ或る一の無骨さがあつて、それも御下座に力説されてゐて、あだかも此藝術家が「それが私の意圖に屬する」と言はうとしたかのやうである。それから何等か出鱈目に野蠻なものとして、邪魔臭ひべら／＼とした衣裳がある。博學老巧なる落想や機智のきらめきがある。最善の又最惡の意味に於ける獨逸的な或るものがある。獨逸風に多趣多様な、無格好な、切りのない或るものがある。類收の精巧さの下に自らを包み匿すことを恐れない、ある獨逸的な魂の横溢がある（それが其處で恐らくははじめて最も心易く感ずるであらう）。うら若いと共に年の寄つてゐる、熱し過ぎてゐると共に尙ほ未來に富んでゐるところの獨逸魂の、本當の純粹の徵證がある。かくの如き種類の音樂は、私が獨逸人等について考へてゐるところのものを最も善く表白する。彼等は一昨日のものであり、また明後日のものである——彼等はまた何等の今日をも有しない。

我々「善き歐羅巴人」にも、我々にも亦、我々が一の衷心からの祖國主義を、舊式な愛情や偏狹への階級退却を——私は今しがた其一例を挙げたのである——我々自らに許すやうな時間がある。國民

的興奮の、愛國的懊惱の、他のあらゆる古風な感情の氾濫の時間がある。我々より愚圖々々した精神は、我々に於て數時間を限られ、數時間の内に済んでしまふやうなものをも、より、長き時間内に於てのみ完了し得るのかも知れない——彼等が其「材料を變化し」消化する場合の速さと力とに應じて、或る者は半年をも、他の者は半生涯をもかゝつて。固より、我々の急速なる歐羅巴に於てさへも、祖國主義や土着心の斯様な隔世遺傳的發作に打ち克つて、再び理性へ、換言すれば「善き歐羅巴主義」へ引き返すべく、半世紀を要したといふやうな、野呂馬な愚圖愚圖な人種を私は考へることが出来た。そして私が斯うした可能性に道草を食つてゐる間に、偶ま私は二人の老いたる「愛國者」等の對話を耳にする——彼等は明らかに互に相手の言葉を聞きとりにくかつた。そしてそれ故に愈々聲高に語り合つたのである。「彼は農夫又は大學生ほどの哲學を有つてゐる。或は知つてゐる」と、一方が言つた。「彼はまだ無邪氣である。だが今日ではそれが何であらう！ それは群衆の時代である。群衆はあらゆる群衆的なものの前に平伏してゐる。政治上でもやはり然うだ。彼等の爲めに一の新しいペベルの塔を、帝國的な又は強國的な何等かの怪物を築き上げてやるところの政治家は、彼等からして「偉大だ」と云はれる。我々より、慎重なるより、保守的な人間が一方に於て、一の行爲や事柄に偉大さを與へるのは、一にただ偉大なる思想だけであるといふ、舊式な信仰をやはり棄てないでゐたらうとも何であらうぞ！ 假りにある政治家が其民衆の本來天分も準備ももつてゐないやうな「大なる政策」を遂行すべき

地位へ、彼等を連れ込んだとする。その爲めに民衆は一の新しき疑はしき凡庸さへの愛から、其舊きより、確實なる徳を犠牲にすべく餘儀なくされたとする。假りにある政治家が其民衆をひろく「政策遂行」へ驅り立てた場合、民衆の方はこれまで爲し且つ考へるべきより、善きものを有つてゐて、その魂の奥底から、本當に政治化するところの民衆の不安さ、空虚さ、騒々しさに對して思慮深き嘔吐感を禁じ得なかつたとする。假りに斯様な政治家が其民衆の眠れる熱情や渴望を刺戟し、其これまでの冷淡さや超然主義的傾向を汚點だとし、其超祖國主義やかくれたる境界撤去を彈劾し、其最も裏心的な偏向をしりぞけ、其本心を顛覆し、其精神を狭くし、其趣味を「國民的」にしたとする。如何に！ 其民衆に未來があるならば、彼等があらゆる未來の中に賠償せねばならぬやうな然うした總ての事を爲すところのある政治家は、彼は偉大であつたらうか？「疑ひもなく然うだ！」と、今一人の老いたる愛國者は激烈に答へた。でなかつたら彼はそれを爲し得なかつたであらう！ さうした事を爲すのは恐らく狂氣の沙汰であつたらう。しかし乍ら恐らく總ての偉大なるものは其初めに於て狂氣の沙汰であつたらう！「言葉の濫用だ！」と彼の談敵は叫んだ。「強いのだ！ 強いのだ！ 強く且つ狂氣染みてゐるのだ！ 偉大ではない！」二人の老人はかくの如く彼等の眞實を眞向から叫び合つた時、明らかに熱狂してゐた。だが私は、私の幸福と向ふ岸とに於て、如何に間もなく強き者がより、強き者から支配されるやうになるべきかを思ひ量つてゐた。更に、ある國民の精神的淺薄化に對しては一の賠

償が、精しくは他の國民の深化による一の賠償があるといふことを思ひ量つてゐた。

二四二

今日歐羅巴人に特色をなすところのものが、『文明』と呼ばれようとも、『人類化』と呼ばれようとも、乃至『進歩』と呼ばれようとも、さては賞讃したり非難したりすることなしに單純に、歐羅巴の民主主義的運動といふ一の政治上方式を以て呼ばれようとも、兎に角斯うした方式によつて指示される總ての道徳的並びに政治的前景の背には、一の巨大なる生理學的的作用がはたらいて居り、しかも愈々擴大しつつあるのである。それは歐羅巴人の同化し合ふ作用である。風土的に又地位的に結合された人種成立の諸條件からのいよいよ太だしきを加へたる釋放である。數世紀の間心身に於ける同一要求を以てそれ自らを銘刻しようとながつたところの、各の一定した環境からのいよいよ太だしきを加へたる獨立である。乃ち、生理學的に云ふと順應術及び順應力の一最大限を類型の特徴として有するところの、本質的に超國民的な遊牧的な人間の緩漫なる出現である。歐羅巴人の出來上つて來る此經過は、大なる回歸によつて其テムポオをこそ弛められるかも知れないが、恐らく丁度それで以て激しさと深さを増し加へるであらう（そして今日尙ほ荒れ狂つてゐる『國民的感情』の大あらしも、又今しも現れかゝつてゐる無政府主義などもこれに屬してゐる）。此經過は其素樸な促進者頌讚者であるところの

『近代的觀念の使徒』が思ひもかけなかつたやうな結果へ多分行き着くであらう。均らして見て人間の平等化と凡庸化とを——有用な、勤勉な、色々役に立つ、そして伶俐な群畜的人間の——招致するやうな此等の新しき條件は、最高の程度に於て、最も危険な又最も面白い性質をもつた非凡人を出現させるべく適當してゐる。なぜと云つて、つねに變化する條件を試験し、各の世代と共に、殆んど各の十分世紀と共に一の新しき仕事を始めるところのあの順應力が、類型の強大さを全く不可能にしてゐる間に——斯様な未來の歐羅巴人の總體的印象が多分は、日々のパンを要する如く主人を、命令者を要するところの多様な、多辯なる、意志の弱い、甚だ間に合ふ勞働者等の總體的印象であらう間に——従つて歐羅巴の民主主義化が最も精緻なる言葉遣ひに於ける奴隸制度に備へられたる一類型の産出を來すであらう間に、個々の又除外例の場合に於て、力強い人間は恐らく彼が會つてあつたよりより、強く且つより富んだものにならざるを得ないであらう——彼の訓練の先入見なさに依つて、練習や技術や假面の恐ろしい複雑さに依つて。私が言はうと思ふのは、歐羅巴の民主主義化が同時に專制者等（あらゆる意味に於て、又最も精神的な意味に於て）の養成に對する知らず知らずの自らなる設備であるといふことである。

二四三

私は我々の太陽がヘラクレスの星座の方へ急速に動きつゝあるといふことを聞いて愉快に感ずる。そして此地球の上の人間がその點に於て太陽の如く爲すべきことを希望する。そして我々は眞先に、我々善き歐羅巴人は！

二四四

曾つて或る時代には、獨逸人に「深い」と云ふ特色を歸するのが慣はしとなつてゐた。けれども、新しき獨逸主義の最もうまく行つた定型が全く別な名譽をほしがり、そして深みを有する總ての物に於て恐らく「鋭さ」を足りなく思つて居る今日では、我々が曾つてあの讃辭で以て我々自身を欺いたので、はなかつたかしらと云ふ、換言すれば、獨逸的な深みが實際何等か他の、より、悪しきものでないかしら、又仕合せと我々がよい具合に脱却せんとしてゐる何物かではないかしらと云ふ、さう云ふ疑は殆んど當世向きな又愛國的なものである。されば我々は獨逸的な深みを學び直す試みをして見よう。それをする爲めには、獨逸魂の一寸した解剖よりほかの何物も必要でない。獨逸魂は何よりも先づ多様で、起源がさまざまで、實際に構造されたのであるよりも寧ろ結合され積み重ねられてゐる。これは其起源の然らしむるところである。「おおー！ 一、二の魂が私の胸の中に住んでゐる」と思ひ切つて斷言しようとする一獨逸人は、その眞實を掴み損ふであらう。より、正確に云へば、魂の數に關する眞實に取

り残されるであらう。最も異常なる人種の混淆から出來上つてゐる、加之恐らくはアリアン以前の要素の著しい一民族として、あらゆる意味に「中間民族」として、獨逸人は他の諸民族が彼等自身に於けるよりも、更によりつかまへどころがなく、より廣汎で、より矛盾だらけで、より知られない、より計量しにくい、より面喰はせるもの、より恐るべきものでさへもある。彼等は定義のしようもない。そしてそれだけでも佛蘭西人等の絶望である。獨逸人等の間に「獨逸的とは何ぞや？」の疑問の途に絶えないのが、彼等に特色をなしてゐる。コツエブは固より十分に善く彼の獨逸人等を知つてゐた。「我々は知られてゐる」と彼等は彼にまで歡呼の聲を擧げた。しかし乍らサンド（賣國奴としてコツエブを殺した）も亦彼等を知つてゐると思つたのである。ジャン・パウルはフィヒテの詐偽的だけれども愛國的な曲學阿世に對して眞向から憤慨してかゝつた時、自ら何を爲しつゝあつたかを知つてゐた。けれども多分ゲエテは獨逸人についてジャン・パウルと見るところを異にしてゐたであらう——フィヒテに關してはジャン・パウルの態度の正しいことを承認してゐただけだ。ゲエテは實際獨逸人に關してどんな事を考へてゐたらうか？ 彼は其周囲の色々の事物に關して明白に談つたことがない。そして一生涯その沈黙を守りつづけることを心得てゐた——多分それには然るべき理由のあつたことであらう。固より彼をしてより悦ばしげに前望せしめたのは「獨逸戰爭」でもなければ佛蘭西革命でもなかつた。そして其事の爲めに彼が彼の「ファウスト」を、否「人間」の全問題を考へ直したといふ出來事

はナポレオンの出現であつた。ゲーテの言葉の中には、獨逸人等の誇りとしてゐるところのものを、氣短かな嚴しさで以て、外國からでもする如く彈劾してゐるのがある。有名なる獨逸的心情を彼は會つて定義して、『他人の及び自分の弱點に對する寛容』と言つてゐる。その點に於て彼は纏つてゐるだらうか？ 獨逸人等については滅多に人の纏らないといふのが、獨逸人等の特色なのである。獨逸魂はそれ自體の内に通路や行廊を有つてゐる。その内には洞穴や、かくれがや、城牢がある。その無秩序は神祕なものゝ魅力をもつてゐる。獨逸人は混沌への近道を心得てゐる。そして各の事物が彼の象徴を愛する如く、獨逸人は雲を、また不分明な、出來上りつゝある、黎明的な、熾つばい、覆ひかぶさつた總てのものを愛する。不確實なもの、展開しないもの、自らを推し動かしてゐるもの、成長しつゝあるものあらゆる種類を、彼は『深い』のだとして感ずる。獨逸人その物は存在しない。彼は出來上りつゝあるのだ。彼は『自らを展開しつゝ』あるのだ。乃ち『展開』は哲學的方式の大領域に於ける本當に獨逸的な發見であり思ひつきである。即ち獨逸のビイル及び獨逸音楽と相並んで、全歐羅巴を獨逸化することに働くところの謎（それにヘゲルは體系を立て、それをワグネルは終に音楽にしたのである）に驚かされ惹き附けられる。『お人好しで意地悪』——如何なる他の民族に關しても矛盾撞着たるを免れない此の如き聯結觀念が、残念乍らあまりに塵々すぎるほど獨逸に於ては正當なものとなされる。

人は試みに少時の間をシウアペン人の間にでも生活して見るがよい！ 獨逸の學者の野暮さ加減は、彼の社交的沒趣味は、あらゆる神々がもう恐怖することを學び知つてゐるほどの内面的索跳びやお手軽な大膽さと、恐ろしく仲を善くしてゐる。人にして若し『獨逸魂』の具體化されたものを見たいと欲するならば、獨逸の趣味を、獨逸の藝術と風習とをのぞいて見れば澤山である。『趣味』に對しての何といふ百姓らしい無頓着さぞ！ そこには最も高貴なものとも最も通俗なものとも如何に相並んでゐることぞ！ この魂の全結構が如何に無秩序であり、また如何に豊富であることよ！ 獨逸人は彼の魂を引きすり歩く。彼は彼が體驗するところの總ての物を引きすり歩く。彼は彼の遭遇した出來事を消化し切らない。彼がそれを『片付けてしまふ』といふことは會つてない。獨逸的な深みは往々にして一の困難な抄らない『消化』にすぎない。そしてあらゆる持病をもつた者が、あらゆる胃弱者が便宜なものを好む如く、獨逸人は『明けつばなし』と『正直』とを愛する。明けつばなしで且つ正直であるのが如何に便宜であるかよ！ 思ふに今日、獨逸人の心得てゐる最も危険にして且つ最も土出來な假裝は、この打ちとけた、慇懃な態度であり、獨逸的正直さを振廻はす事である。それは彼の固有なるメフィストオ的技術である。それで以て彼は『更に多くをやつてのける』獨逸人がぶらぶらとやつて行きながら、まことしやかな、青い、空虚な獨逸眼で以て見てゐる——と、直ぐに外國人等は彼を彼の寢衣と取り違へる！ 私の言はうとするのは斯うだ——『獨逸的な深み』が何であらうと構ふことはない（全

く我々自身の間にのみ恐らく我々はそれを嘲笑すべく我々自身に許すのであらう。我々は今後も引き続き其出現と好き評判とに敬意を拂ふべきであり、深みある民族としての我々の名譽を、普魯西風な「鋭さ」や伯林風な機智などと引換へに、あまりに安つぽく手放してしまふべきでない。それ自らを深みのあるものに、無骨なものに、お人好しに、正直者に、開拔に見せかけるのは、さうしたものとして通用させるのは、ある民族にとつて惻かなやり方である。加之、深みのあるやり方でもあるのだ！要するに、我々は我々の評判に敬意を拂はなければならぬ。我々が「finische」民族、即ち詐欺民族と呼ばれてゐるのは無意味な事でない。

二四五

「善き過去」の時代は行つてしまつた。モツァルトの中にそれは歌ひ盡されてゐる。我々にまで彼のロココオがやはり話しかけるといふのは、彼の「善き社交」が、彼のやさしき狂熱が、支那風なもの、裝飾文字的なものに對する彼の子供らしい悦びが、彼の衷心からの感歎さが、典雅なもの、慕はしいもの、舞踏するもの、涙ぐましいものなどに對する彼の願望が、南國への彼の信仰がやはり、我々の内なる何等かの殘存物に訴へ得るといふのは、我々にとつて如何に幸福な事であらう！ 嗚呼、いつかはそれも無くなつてしまふであらう！ だが、ベエトオフンに對する理解と好尚とが、更により速

かに跡を絶つべきことを、これも何も何人か疑ひ得るものぞ！ げに彼は、様式上過渡期の最終の反響に過ぎなかつた。そしてモツァルトの如く數世紀に亘る偉大なる歐羅巴的趣味に最終の反響をなしてゐるものでない。ベエトオフンは絶間なく壊れしつゝある舊い軟熟した魂と、絶間なく到來しつゝある將來の若過ぎる魂との間なる介在的事件である。彼の音楽の上には永久的な喪失と永久的な過度な希望とのあの黄昏が覆ふてゐる。即ち、歐羅巴がルッソオと共に夢を見た時、革命の自由の樹のまはりに亂舞し、遂にナポレオンの前に殆んど拜跪してしまつた時、歐羅巴の浴びたところのものと同じ光である。しかし乍ら今正に此感情が如何に速かに色ざめつつあるか、今日では此感情についての智識すらも如何に困難であるか、かのルッソオや、シラアや、シェリイやバイロンの言葉が、如何に縁遠く我々の耳に響くかよ（彼等を引括めて、ベエトオフンの中に歌はれ得たところの同じ歐羅巴の運命が、その中に表白への道を見出したのであつた！）そのあとに來たほどの如何なる獨逸音楽でもが浪漫主義に屬する。換言すれば歴史的に考察して、あの大なる中間曲よりも、ル、ドオからナポレオンに至る、デモクラシイの出現に至る歐羅巴のあの過渡期よりも、更に短い、更に一時的な、更に淺薄な運動に屬する。エエベルは——しかし我々にまで今日「フライシュツ」や「オオベロン」が何であらう！ 或はマルシュネルの「ハンス・ハイリンク」や「吸血鬼」が！ 或は更にワグネルの「タンホイゼ」さへもが！ それらはまだ忘れ去られてゐないまでも、もう鳴り止んでしまつたところの音楽である。そ

人が母音や二重母音の順序に於て意味を付度せねばならぬといふこと、そしてそれらのものが其配列具合で以て如何に精やかに且つ豊かに彩られたり、彩り直されたりし得るかを洞察せねばならぬといふこと——書物を読んでゐる獨逸人の中の何人が斯様な義務及び要求を承認すべく、又言語に於ける斯くも多くの技巧と意圖とに耳をかすべく十分に心掛よきものぞ！ 所詮人は「それに對する耳を有たない」のだ。かくて様式の最も著しい對照が聞きとられず、最も細緻なる技巧が襲者の前に於ての如く浪費されてゐる。これは散文藝術に於ける二人の名家が没分曉に且つ淺薄に混同されるのを見た時の私の所感であつた。右の名家の中、一方に於ては言葉が水つぼい洞の屋根からでも落ちる如く、ぼとりぼとりと冷たく滴り落ちるのである。彼は其暗鬱な響きと反響とを計量してゐる。そして今一人の名家は彼の言葉をしなやかな劍の如くに扱ひ、腕から足の指まで、喰ひついたり、齒を鳴らしたり、嚙みきつたりしたがるところの、震ひわなないてゐる切れ過ぎる刃の危険なる幸福を感じるのである。

二四七

獨逸の文體が音調と、又耳と如何に關係するところ少きかは、恰かも我々の善き音楽者等が悪く書いてゐるといふことの事實によつて示される。獨逸人は聲を立てて、耳の爲めに讀むのでなく、寧

ろ單に目だけで讀む。彼はその場合彼の耳を抽斗にしまつて置いてゐる。古代の人間は彼の讀んだ時——それはかなり稀らしい事だつた——何等かを自分自身に、しかも聲高に讀み聞かした。誰かが低聲に讀んだ時には異んで、ひそかに其理由を問ひたづねた。聲高にといふのは、古代の公衆世界が悦びとなしたところの、あらゆる音調の膨脹、屈折、轉換及びテムポオの變化を以てするの謂ひである。その時分には記述文の法則が談話文の法則と同一であつた。そして法則は半ば耳及び喉頭の驚くべき發達と精練されたる要求とに土臺を置いて居り、半ば古代人の肺臓の強さと耐久性と力とに土臺を置いて居つた。古代人の意義からすれば、一期間は何よりも先づ、それが一呼吸に包括される限りに於て生理的一全體であつた。デモステネスに、チツェロオに出て来る如き諸期間は——二度膨らみ二度沈んで、總てが一呼吸の外に出ない——それに悦びを見出したところの古代の人間等はその中なる徳を、斯様な期間を演述することの稀らしさと難しさを、彼等自身の訓練によつて評價し得たのである。我々は實際大なる期間に對して何等の權利をも有しない。我々近代人は、あらゆる意味に於て息切れのし易い我々は！ げに此等の古代人はいづれも皆談話に於てディレクタントであり、従つて精通者であり、従つて批評家であつた。かくして彼等は其談話者等を最高調にまで追ひ上げた。前の世紀に、總ての伊太利人及び伊太利婦人が歌ふことを知つた時、彼等の間に歌唱の老巧さ（それと共にメロディイの技術も）が頂上へ達したのと、同じ具合に於てである。だが獨逸に於ては（一種の講壇的雄辯がか

なり内氣に且つ無器用に其うら若き翼をはばたきはじめた極々最近までのところ、實際に取だ一種類の公衆的な、そして稍や藝術的な談話があつたに過ぎない。それは説教壇からのそれである。説教家は一の綴音が、一の言葉がどれだけの意義を有するか、一の章句がどの程度まで叩きつけ、跳び上り、突き進み、流れ込み、流れ去つてしまふかを知つたところの、獨逸に於ける唯一の者であつた。彼のみが彼の耳に良心を、往々にしてかなり良心の苛責をも有つてゐた。なぜと云つて、特に獨逸人に於て談話のたしかさが獲られることめづらしく、或は殆んどつねに晩すぎるといふのに、理由が缺けてゐなかつたから。されば獨逸の散文の傑作は當然其最も偉大なる説教家の傑作である。聖書はこれまで最善なる獨逸の書物であつた。ルウテルの聖書に比べると、他の殆んど總てのものが單なる「文献」である——獨逸に成長したのではないところの、従つてかの聖書の如く獨逸的心情に根を下ろしてゐなかつた、また下ろしてゐないところの或る物である。

二四八

天才には二種類がある。一方は何よりも先づ生殖する、又生殖しようとする。他の一方は好んで妊娠し、そして出産する。同じやうにも天才的な民族の中にも、懐胎といふ婦人の問題や、形成、成熟、完成といふやうな内密な仕事の課せられる民族がある。例へば希臘人は、同じく佛蘭西人も此種類の

民族であつた。そして別の種類の民族は妊娠させて、新生命の原因にならなければならぬ。例へば猶太人、羅馬人などがそれだ。借てあらゆる謙讓の態度を以て問ひ尋ねるならば、獨逸人がやはりそれではあるまいか？ 彼等は知られざる熱から惱まされ狂喜させられて、又自分自身から抵抗しがたく推し出されて、他の種族(妊娠させられるやうな)を戀慕し熱望してゐる。又それと共に、自分自身に生殖力の充實してゐることを、従つて「神の恵から」強められてゐることを意識するところの、總ての民族と同じく覇氣をもつてゐる。此等の二通りの天才者等は、男子と婦人との如く互に相求める。けれども彼等はまた互に誤解し合ふ——男子と婦人との如く。

二四九

どの民族でもがそれに固有な偽善をもつてゐる。そしてそれを其徳だと稱してゐる。人の中にあるところの最善なるものを、彼は知らない。彼は知ることが出来ない。

二五〇

歐羅巴は猶太人等にまぜ何を負ふてゐるか？ 善き悪しきさまさまな物を。そしてとり分け、最善であると共に最悪であるところの一の物を負ふてゐる。即ち、道徳に於ける偉大なる様式である。際

限なき要求の、際限なき意義の恐ろしさと威厳とである。道德上の疑はしさの浪漫主義と壯美とである。又従つて今日我々の歐羅巴文化の天に、その夕天に餘光をとどめてゐる——恐らくはそれももう久しくつづかない——あの虹色と人生への誘惑とに於ける最も魅力のある、最も蠱惑的な、最も優秀なる部分である。これに對して、觀覽者及び哲學者の間に藝術家であるところの我々は、猶太人等にまさき感謝の念を抱いてゐる。

二五一

國民的の神經病や政治的功名心に悩んでゐるところの、又悩みたがつてゐるところのある民族の精神上に、さまざまの暗雲騷擾が通りすぎる時、換言すれば一寸した愚劣の發作が通りすぎる時、それは我慢されなければならぬのである。例へば、今日の獨逸人等の間には反佛蘭西的愚劣があり、時には反猶太的愚劣があり、時には反波蘭的愚劣があり、時には基督教的浪漫的愚劣があり、時にはワグネル派の愚劣があり、時にはテウトンの愚劣があり、時には普魯西的愚劣があり(試みにそれらの氣の毒な歴史家等を、それらの幾人かのジイベルやトッライチケや彼等の繙帯を巻かれた頭を見るがいい)、そのほか何と呼ばれてゐようとも、獨逸的精神及び本心の斯うした小さな晦冥がいろいろとある。遠慮なく云ふと私も亦、非常に流行してゐた土地に一寸の間逗留することを敢てした時、右の

病氣に感染しないであつた。そして世間の人々同様、私に何の關係もなき事物について既に考をもちはじめた。政治的病毒感染の第一徴候なのである。例へば猶太人等に關する問題だが、まゝ次ぎに述べるところを聽いて貰ひたい。猶太人等に好意を有する獨逸人といふものに、私はまだ出會つたことがない。總ての慎重なる政略的な人々の側に於て、實際的な反セミテイク主義の否認がどんなに決定的であらうとも、尙ほ且つかうした慎重と政略とは恐らく感情その物の種類に向けられてゐるのでなく、寧ろただ其危険なる極端さに、とり分け此極端なる感情の沒趣味な破廉恥な表白のみ向けられてゐるのである。それについて我々は自らを欺いてはならぬ。獨逸國がかなり十分なる猶太人を有つてゐるといふこと、獨逸の胃腑が、獨逸の血液が此分量の「猶太人」だけをでも片附けるのに——伊太利人や、佛蘭西人や、英吉利人などがより、強壯なる消化力によつて片附けてゐる如く——困難してゐる(又久しく困難するであらう)といふこと、これは人の聽き従はねばならぬ、よつて以て人の行動せねばならぬ一般的本能の明瞭なる表白である。「この上一人の猶太人をもはいらせるな!」そして特に東方に(埃太利にも)戸をとさせよ!」その性質がまだ非常に薄弱不定であつて、より強き種族によつてたやすく掃蕩され、たやすく剿滅されるかも知れないほどの、ある民族の本能は右の如く命令する。だが猶太人等は何等の疑ひもなく、今日歐羅巴に生きてゐる最も強き、最も硬き、最も純なる種族である。彼等は最悪の條件の下にあつてすらも、今日人々が惡徳として刻印を打ちたがつ

たやうな何等かの徳によつて、うまくやり了せる(加^{plus}之、有利な條件の下によつてより以上に)ことを知つてゐる——特に、「近代的觀念」の前に自らを恥づることを要しないやうな、一の斷乎たる信仰のお蔭で。彼等は彼等が自らを變化する時つねにただ、露西亞帝國が其侵略をなす(夥しき將來の時をもつて居り、昨日のものでないところの一帝國として)やうにしてのみ自らを變化する。即ち、「出来るだけゆるゆる」といふ主義で自らを變化するのである。歐羅巴の將來を其本心にもつてゐるところの一思想家は、將來に關するあらゆる畫策に際して、露西亞人を測定する如く猶太人を測定し、大なる列強鬭争に於ける何よりも先づ最も確實な、最もありさうな、要素と見做すであらう。今日歐羅巴に於て「國民」と呼ばれてゐる、また實際に *terra nata* (生れた物)よりも *terra facta* (造られた物)であるところの——否時としては *res facta et picta* (伴^{comitatus}の又畫かれたる物) にまぎらはしく似てゐる——それは、いかなる場合にも何等か出来上るところのもの、若きもの、動かされ易きものであつて、まだ何等の人種でもない。猶太人等の如き *aere perennius* (もとのいふもの)でないのは尙更の事である。さう云ふ「國民」等は各の熱狂した競争や敵對を最も用心深く回避せねばならなかつた！猶太人等にして欲したならば、或は反セミテ、ク派が欲してゐるやうに見える如く、彼等にして其事へ強ひられたならば、彼等が今でも直ぐに歐羅巴に於て優勢になり、否全く文字通り覇を稱したかも知れないことは確實である。彼等がそれに對して働いたり計畫を立てたりしてゐないことも同様だ。その間にも

彼等は寧ろ、若干の厚かましさを以てすらも、歐羅巴へむぐり込み、歐羅巴から吸ひ込まれることを欲望してゐる。彼等は結局どこかに落ちつかせられ、許され、眼中に置かれて、遊牧生活に、『永久の猶太人』に結末をつけてしまふことを渴望する。そして人は此傾向と衝動と(それは事によつたらかの猶太人的本能の緩和を表示してゐるかも知らない)に十分に留意し、それを出迎へてやらなければならぬ。その目的の爲めには恐らく此國の反セミテ、ク派的叫喚者等を逐ひ出してしまふのが有用正當であつたらう。あらゆる細心を以て、選擇を以て迎へ入れることだ。大體に於て英吉利の貴族が爲す如く。新獨逸主義のより、強き、又既により堅く打ち出されたる定型も、例へば普魯西の國境からの貴族出の將校なども、最も躊躇しないで猶太人等と相提携し得たのは明白である。命令及び服従といふ遺傳的技術にまで——この二の事に於て、問題の國は定評を獲てゐる——金錢及び忍耐の天才(また特に、問題の場所に甚だしく缺けてゐるところの或る理智性)が附け加へられ、附け加へて訓練されないかどうかを見ろといふのは、さまざまな點から興味のあることであつたらう。だが此處では、私の快活な獨逸主義と祝辭とを中止すべきである。なぜと云つて私は既に私の嚴肅な問題に、私の理解する如く「歐羅巴的な問題」に觸れてゐるのだから。歐羅巴を支配するところの一新しき階級を養成するといふ、歐羅巴的な問題に觸れてゐるのだから。

二五二

彼等は何等の哲學的人種でもない——あの英吉利人等は。ペエコンは汎く哲學的精神に對する攻撃を意味して居り、ホッブスやヒュウムやロックは一世紀以上に亘つて『哲學者』といふ概念の貶下と減價とを意味して居る。ヒュウムに反抗して立つたのはカントであつた。ロックはシェリングが "the Heilige Locke" (私はロックを輕蔑する) と言ひ得たところのものであつた。英吉利的器械論的な世界の愚劣化との戦に於ては、ヘゲルとショペンハウエルと(ゲエテと共に)が調子を合せてゐた。哲學上に於けるあの二人の敵視し合つた同胞的天才は、獨逸精神の反對した兩極に従つて相分れ、ただ兄弟同志が苦しめ合つた如くのみ苦しめ合つたのだが。英吉利に何が缺けてゐるか、又いつも缺けてゐたかは、あの半俳優にして修辭家なるカライルが、わからず屋で頭の悪いあの男が十分に善く知つてゐた。彼は熱情的なしかみつ面の下に、彼が自分自身について知つたところのものを、即ち、カライルに缺けてゐたものを包み匿さうと努めた。偕て彼に缺けてゐたのは理智の本當の力である。理智的な知覺の本當の深み、換言すれば哲學である。かくの如き非哲學的人種の特徴は、彼等がしつかりと基督教に取りついてゐる點にある。彼等は『道德化』と人間化とに對する基督教の訓練を要するのである。獨逸人よりも陰鬱な、肉感的な、意志の強い、獸的な英吉利人は、その故にこそ双方の中のものより、俗惡なもの

として、更に獨逸人よりも敬虔である。彼が愈々以て基督教を要するわけである。より敏感なる鼻孔にまで、この英吉利の基督教その物が脾臓とアルコホルの過度との純粹に英吉利的な附味を有つてゐる。それに對して善き理由から、かの基督教は藥劑として用ひられる。即ち粗惡な毒に對する細緻な毒として用ひられる。全くのところより、細緻なる毒は粗野なる民族に於て既に一進歩であり、精神化への一轉歩である。英吉利の粗野さ加減とお百姓らしき生眞面目さとは基督教的身振りによつて、祈禱や讚美歌によつて尙ほ最も我慢し易くつくろはれてゐる。より正しく云へば説明され表白し直されてゐる。そして以前メソヂスト主義の勢力の下に、近頃では再び『救世軍』として道德的に唸ることを選び知つたところの、酒食ひの、また極道者のあの家畜等にとつては、悔改めの療學は實際、彼等が持ち上げられ得たる比較的にも最も高い『人情』の顯現であるかも知れない。そこまでは當然認容されてよいのである。だが最も人情のある英吉利にさへ忌々しいものは、比喩で以て(又比喩なしに)云ふならば、音樂に於ける彼の缺乏である。彼は彼の魂や彼の體の運動に何等の拍子や舞踏を有しない。否更に、拍子や舞踏に對する、音樂に對する渴望をすら有しないのだ。彼が話をしてゐるのを聞くがよい。最も美しい英吉利婦人等が歩いてゐるのを見るがよい。地球上の如何なる土地に於てもより美しい鳩や白鳥がないのだ。最後に、彼等が歌ふのを聞いて見るがよい！ だが私はあまりに多くを求めすぎる……

眞實の中には、それが凡庸なる頭腦に最も適應してゐる故、彼等からして最も善く認識されるものがある。ただ凡庸なる理智に對してのみ魅力と誘惑力とを所有してゐるところのものがある。尊敬すべき、けれども凡庸なる英吉利人等——私はダアキンや、ジョン・ステュアアトミルや、ハアバト・スベン・サアを擧げることが出来る——の精神が歐羅巴的趣味好向をもつた中流階級に勢力を占めだしてゐる今日では、右の恐らくは不愉快な命題をも承認しないわけに行かないのである。全くの處、一時かくの如き精神の勢力を占めることの有用なるを、何人か疑ひ得たらうぞ？ 丁度かの秀拔なる超然たる精神が、いろいろの小さな平凡な事實を確定したり、蒐集したり、論斷したりすることに、特に適當したものであると考へるのは誤謬であつたらう。寧ろ彼等は除外例として、そもそもから「原則」に對する何等の有利なる地位にもゐないのである。所詮彼等は單に認識するより以上をしなればならぬ。乃ち何等かの新しいものであること、何等かの新しいものを意味すること、新しい價値を表現することを要するのである。——智識と能力との間隙は恐らく人々が考へるより大きく、また神秘的である。偉大なる様式に於ける能力者は、創造者は出來得る限り無識者であらねばならぬであらう。これに對して一方では、ダアキンなどのやうな科學者發見にとつては、何程かの狹隘、乾燥、及び勤

勉なる心遣ひが、換言すれば何等かの英吉利的なものが不ためではないかも知れない。結局英吉利人等が會つて彼等の根深い凡庸さで以て歐羅巴精神の一般的壓迫を招致したことを忘れてはならぬ。されば「近代的觀念」と云ひ、「十八世紀の思想」と云ひ、「佛蘭西思想」と云はれるところのもの——それに對する強烈なる嘔吐感を以て獨逸的精神が起ち上つた——英吉利的な起源をもつてゐる。それについては何の疑ひをも容れないのである。佛蘭西人等は此思想の猿か俳優か、また其最善なる兵士等が、更に残念乍ら、其最初の最も徹底的な犠牲にほかならなかつた。なぜと云つて、「近代的觀念」といふ恐ろしき英吉利狂の故に、終に *âme française* (佛蘭西魂) は非常に薄弱なものになつてしまひ、其十六七世紀が、其深い熱情的な力が、其獨創的な氣高さが、今日では殆んど信じられないほどであるからだ。だが、人は歴史的に正しい此判斷を固執し、一時的外觀的なものに對してそれを防衛しなればならぬ。感情上の、趣味上の、風習上の、一言にして云へばあらゆる高い意味での歐羅巴的貴族主義は、佛蘭西國の所作であり發明である。歐羅巴的凡庸さは、近代的觀念の平民主義は英吉利のものである。

今日に於ても尙ほ佛蘭西は歐羅巴の最も精神的な最も精練された文化の座席である。それは尙ほ趣

味の最高學府である。だが人々はこの「趣味の佛蘭西」を見出すことを知らなければならぬ。それに附屬するところの人間は、うまく彼自らを包み匿してゐる。趣味の佛蘭西が體現されてゐるやうな人々は、少數であるかも知れない。加之恐らくは、最も強壯な脚で立つてゐない人々で、一部分は宿命論者、厭世家、病人であり、一部分は自らを匿さうとする野心を有つた、やさしく扱はれ過ぎた、リフ、インされ過ぎたやうな連中であるかも知れない。何物かが彼等一同に共通してゐる。彼等は民主主義的ブルジョアの狂氣染みた愚劣さと騒々しき御託に耳を閉ぢる。全くのところ今日では愚鈍化粗悪化された佛蘭西が前景にのさばり出てゐる。それは近頃ギクトル・ユウゴオの葬式に際して悪趣味の、同様に自己讃嘆の全くの噪宴をやつた。彼等本當の佛蘭西に附屬する者には、他の或るものがまた共通してゐる。理智的獨逸化を防止しようとする善き意志——そして更により善きそれに對しての無能力である！ 悲觀主義の佛蘭西でもあるところの此理智の佛蘭西に於ては、思ふにシ・オペンハウエルは今日、彼が獨逸に於て處を得たよりも、より多く處を得てゐるのである。ハインリッヒ・ハイネに至つては、すつと前から巴里の氣取つた氣位の高い抒情詩人等の間へ生れ代つて來てゐる。今日テエヌ——即ち現存して第一の歴史家——の形をとつてゐるヘゲルは、一の殆んど專制君主的な勢威をふるつてゐる。だが、リヒアルト・ワグネルに關して云へば、佛蘭西の音楽が *une moderne* (近代の魂) の現實的要求に自らを順應させることを學べば學ぶほど、愈々以てそれは「ワグネル化」するであらう。そ

れは我々から豫言され得ることである。否、今日既に起つてゐる事なのである！ しかし今日尚ほ佛蘭西人等が、趣味のあらゆる故意の、又故意ならぬ獨逸化賤民化にも係はらず、彼等の相續物所有物として、歐羅巴に於ける昔の文化的卓越の失はれざる徵證として誇示し得べき三の物がある。第一は藝術的熱情に對する、「形式」への歸依に對する能力であつて、その爲めに「藝術の爲めの藝術」といふ言葉が、さまざま他の言葉と共に發明されてゐる。さうした能力は三世紀に亘つて佛蘭西に缺乏してゐなかつた。そしていつも「少數」に對する畏敬のお蔭で、歐羅巴のよそでは求められない文學の宮廷樂のやうなものを可能にしてゐる。佛蘭西人等が歐羅巴に於ける優越を要求し得るところの第三のもの、その昔の複雑な道徳的・文化的文化である。その爲めに平均して新聞の小さな *romanciers* (小説家等) や偶然の *boulevardiers de Paris* にすらも、例へば獨逸などで何等の概念も有たれない(事柄その物は別として) やうな心理學的興奮及び好奇心が見出されるのである。それに必要な道徳的修養の二世紀ばかり(それを前述の如く佛蘭西は惜まなかつたのである) が獨逸人等には缺乏してゐる。其事の故に獨逸人等を「素樸」だと云ふ人は、彼等の缺點を賞讃してゐるのである。(獨逸的社交の退屈さ加減とあまり縁遠くない、心理學的な悦びに於ける獨逸的無經驗及び無邪氣なものとしては、又ディリケエトな感動の此領土に對する純粹に佛蘭西的な好奇心や發明力の最も上出來な表白としては、アンリ・ベエルが注意されていい。あの顯著なる預言的先驅的人物は、一のナポレオンのテムボオで以て彼の歐羅巴

を、歐羅巴魂の幾世紀間かを、その観測者発見者として駈けぬけた。彼を兎も角もしてつかまへる爲めには、彼を、あの不思議な享樂派にして疑問記號なる男を、佛蘭西の最終の偉大なる心理學者を苦しめたり狂喜させたりする謎のあるものを、あとから釋きほぐすことの爲めには、二の世代が必要であつた。尙ほ、卓越への第三の要求といふものがある。佛蘭西人等の性質には、英吉利人の決して捕捉しないだらう色々の事物を佛蘭西人等に捕捉させ、また他の事をも爲さしめるところの、半ば成功したる南北の綜合調和がある。周期的に南北に向いたり反いたりする彼等の氣質——その中で折々プロオプンスやリグウルの血が沸きかへる——は恐ろしき北方の全く灰色なものから、又日當りの悪い概念的幽霊や貧血症から彼等を擁護してやる。それらのものは趣味の上の我々の獨逸的疾痛で、それの太だしき蔓延を防ぐため、目下大なる決心を以て鐵血政策、換言すれば「高等政策」が處方されてゐる（私をして待たせる上にも待たせるけれど、今尙ほ望みをもたせないところの一の危険なる治療法に従つて）。今日でも尙ほ佛蘭西には、何等かの祖國主義に満足すべく餘りに包括的であり、また北方に於て南方を、南方に於て北方を愛するところの、あの希なる、そして希に満足する人々に對する、生れながらの中部人、「善き歐羅巴人」に對する敬愛と歡迎とがある。それらの人々の爲めにビゼエは音樂を作つてゐる——一の新しい美と誘惑とを見たところの、音樂上に一南方曲を發見したところの、あの最終の天才は。

二五五

私は獨逸の音樂に對してさまざまな警戒のなさるべきことを主張する。人ありて、私が南方を愛する如く南方を愛してゐるとせよ——最も精神的な及び最も肉感的な病氣に對する大なる療養地として、自分自身を信じてゐる一の自主的存在の上にひろがることこの始末に了へない日常り及び日の照り輝きとして。乃ち此の如き人は獨逸音樂に對して何等か自ら警戒することを學び知るであらう。なぜと云つて、それは彼の趣味を新たに汚毒すると共に、彼の健康をも新たに汚毒するであらうから。此の如き南方人は、生れによるのでなくして寧ろ信仰による南方人は、彼にして音樂の將來を夢みるならば、北方の音樂からの解放をも夢みなければならぬ。そして一のより深き、より強き、事によつたらより、惡しき且つより、不可思議な音樂への序曲を其耳に有たなければならぬ。それは青い、淫靡な海や地中海的な天の晴れやかさに面して、總ての獨逸音樂がなす如く、濁み、色あせ、消え去るやうなことの無い超獨逸的の音樂である。それは砂漠の褐色なる日没の前にもへこたれないところの、又その魂が棕櫚の木に近親であり、大なる美しき孤獨なる肉食動物の間に打ち寛ぎ、ぶらつき廻ることの出來るところの一の歐羅巴的音樂である。……一の音樂が善惡についてもはや何物をも知らないといふところに、其最も稀有なる魅力が成立するやうな音樂、さうした一の音樂を私は想像することが出來

た。ただ、事によつたら何等かの水夫的郷愁が、何等かの金色の影ややさしき弱さが折々その上を掠め過ぎるのである。乃ち、すつと遠くの方から、沈みつつある、殆んど理解されなくなつた道徳世界の色彩が、自分自身の方へ逃げて来るのを見るところの藝術である。又此の如き晩き亡命者を迎へ容れるべく十分に深切であるところの藝術である。

二五六

國民主義的亂心が歐洲諸民族の間に置いたところの、尙ほ置きつつあるところの病的なよそよそしさに依つて、又今日あの亂心の助けをかりて勢力を握つてゐるところの、そして彼等のやつてゐる分難政策がどうしても間狂言的政策たるに過ぎないことを思ひもかけないところの、近視眼にして手ばかり速い政治家等に依つて、斯うした總てのもの及び今日では全く名状すべからざるさまざまなものに依つて、歐羅巴が一にならうとしてゐることを言ひ現はしてゐる、最も明瞭なる徴證が今看過されたり、或は勝手に、不正直に誤り解せられたりしてゐる。此世紀のあらゆるより深き、より包括的な人々にあつては、かの新しき綜合への道に準備し、試験的に將來の歐羅巴人を豫想するのが、彼等の魂の神祕的な仕事に於ける本當の一般的方向であつた。ただ彼等の外見に於て、或はより弱き時に於て、老年期なぞに於てのみ、彼等は「祖國派」に屬した。彼等は彼等が「愛國者」になつた時、その時の

み自分自身から安息したのである。私はナポレオンや、ゲーテや、ベエトオフェンや、スタンダールや、ハインリッヒ・ハイネや、シ・オペンハウエルの如き人々を思ひ浮べてゐる。私が彼等の間にリヒアルト・ワグネルを數へても、どうかそれを咎めないで貰ひたい。彼については、彼自身の誤解によつて欺かれてはいけない（彼のやうな種類の天才等は、自分自身を理解することの權利を滅多に有しないのだ）。勿論、今日佛蘭西に於てリヒアルト・ワグネルに反對抵抗してゐる人々の、あの不行儀な喧噪によつて欺かれていけないのは尙ほ更の事である。それにも係はらず事實は依然として、リヒアルト・ワグネルと四十年代の佛蘭西の後期浪漫主義とが最も密接に關係し合つてゐるのである。彼等は其要求のあらゆる高さ及び深さに於て相近く、根本的に相近い。歐羅巴の、一の歐羅巴の魂が彼等のさまざまな噪暴な藝術を通して外へ、上へむぐり出で、憧れ出る——何處へ？ 一の新しき光へ？ 一の新しき太陽の方へ？ しかし乍ら、新しき話し方の總ての此等の名家によつて明瞭に言ひ表はされなかつたところのものを、誰が厳正に言ひ現はし得たらうか？ 同じスト・ルム・ウント・ドラングが彼等を苦しめたこと、彼等が、此最終の大なる探求者等が同じやうにして探求したことはたしかである——いづれも皆、その耳目に至るまで文學に浸つてゐて——世界文學的教養をもつた第一流の藝術家等で——その上大抵は自分自身書く人、作る人、また藝術と官能との中介者混淆者なのだ（ワグネルは音楽者としては畫家等の間に數へられ、詩人としては音楽者等の間に數へられ、一般に藝術家としては俳

優等の間に數へられてゐる。彼等はいづれも皆「どんなにしてでも」の表白に對する狂信家である。私は特にワグネルに最も近きデラクロアを擧げる。彼等のいづれもが崇高なもの、醜きもの、又恐るべきものの領土に於ける偉大なる發見家である。効果に於ける、見世物に於ける飾舗の技術に於ける更に一層偉大なる發見家である。彼等のいづれもが彼等の天才のずつとむかうまで才能を揮つた——誘惑し、強迫し、顛覆する總ての物への神秘的な入口をもつた、徹底的の名人である。縁遠いもの、異國的なもの、怪物的なもの、彎曲したもの、自己撞着してゐるものを熱望するところの、生れながらなる論理及び直線の敵である。人間としては、自分自身が生活及び創造に於て高貴なるテムボオの、一のレントオの能力なきことを知つたところの、タンタルスの意志をもつた成上り者である——例へばバルザックを考へて見よ——拘束されざる勞作者であり、殆んど勞作によつて自己を破壊する者である。均衡も享樂もない、功名心の強い、飽くことを知らない風習の背戾者反逆者である。彼等のいづれもが結局基督教的十字架に於て破滅し没落するのだ（そして其事が正當である。なぜと云つて、彼等の中の何人が反基督教的哲學に對して十分に深く且つ獨創的であつたらうぞ）。一體に、彼等の世紀に——それは群衆の世紀である——「より、高き人間」といふ概念をはじめて教へなければならなかつたところの、大膽に敢行するところの、めざましく熾な、高く飛び、高く引張り上げるところの、より、高き人間の階級である。……リヒアルト・ワグネルの獨逸の友人等は、そも／＼ワグネル藝術の

中に何等か純粹に獨逸的なものがあるかどうか、或は丁度其特徴が超獨逸的根源及び動機から來るものでないかどうか、いつそ、とくと談合して見ることだ。この點では、最も際どい時機に於て彼の本能の深みが彼をして願望せしめたところの巴里こそ、彼の定型を展開する上に如何に缺ぐべからざるものであつたか、又彼の出現の、彼の自己使命の全様式が如何にたゞ佛蘭西の社會主義的原型を前にしてのみ完成され得たかを輕視してはいけない。思ふにより、念入りに比較して見たならば、リヒアルト・ワグネルの獨逸的天性に名譽を加へるものとして次ぎの事が見出されるであらう——彼は總ての物に於て十九世紀の佛蘭西人がやり得たよりも、より強く、より大膽に、より硬く、より高くやつたのである——我々獨逸人が野蠻人に佛蘭西人等よりもより近く立つてゐるといふ事情のお蔭で、加之恐らく、リヒアルト・ワグネルの作つた最も顯著なるものは、あんなにも晩期の拉丁種族全體にとつて、たゞに今日ばかりでなく永久に近づき難く、解しがたく、模倣しがたいであらう。例へばジイグフリイトの、あの非常に自由なる人間の姿を考へて見るがよい。彼は全くのところ古い、軟熟した文明民族の趣味に對して、あまりに自由であり、あまりに粗硬であり、あまりに快活であり、あまりに健全であり、あまりに反加特力的である。彼は、あの反拉丁的ジイグフリイトは浪漫主義に對する罪惡ですらあつたかも知れない。げにワグネルは彼の悲しき晩年に於て此罪惡を十分に贖つた。即ち其時彼は、さうかうする内に政略になつたところの一の趣味を預感しながら、彼に固有なる宗教的熱

烈を以て、羅馬への道を、自ら行かないまでも説教はじめたのである。此等の最終の言葉が誤解されないことの爲め、私は敷衍の力強い詩句に助けをかりて見よう。それらの詩句はあまりデリケートでない耳にさへも、何を私が意味してゐるか、『最終のワグネル』と彼のピアシフル音楽とに反對して、何を私が意味してゐるかを裏切り傳へるであらう――

これは尙ほ獨逸的なるか？

獨逸的心情よりして此暑苦しき叫びは來りしか？

又獨逸的肉體よりか、この肉體苛虐は？

この祭司の手を張り擴げたるは獨逸的か？

薫香の如く立ちのぼれる此官能の興奮は？

斯く立ち止り、打ち倒れ、よろめくは、

このさだかならぬごん、ごん、ごん、ごんは？

この尼僧の秋波は、晩鐘の響きは、

このあやまれる法悦の、有頂天の悉くは、

これは尙ほ獨逸的なるか？

思ひ見よ！ 尙ほ汝等は門戸に立てり。

汝等の聞けるは羅馬ぞ！ 言語の道を断えたる羅馬の信仰ぞ！

第九章 高貴とは何ぞや

「人間」といふタイプを引き上げるのは、これまでいつでも貴族的な社會の仕事であつた。そしていつもさうなのであらう。其社會は人間と人間との階級及び價值差別の一の長い段階を信じ、何等かの意味に於ける奴隸制度を必要としてゐる。有形的な身分の相違から、從屬者及び道具に對する支配階級の間斷なき見張りや見下しから、又服従や命令に於ける、抑壓や隔離に於ける彼等の同じやうに間斷なき實習から成長して來る如き距離の感奮 (das Pathos der Distanz) なしには、あの今一のより神秘的な感奮も全然生じ得なかつたであらう。その感奮とは魂其物の内なる常に新しき距離擴大に對する、常により高き、より希らしき、より遠き、より廣き、より包括的な情態の産出に對する、一口に云ふと、一に「人間」といふタイプの引き上げに對する、一の道徳的方式を超道徳的意義に用ひれば、繼續されたる「人間の自己克服」に對するあの願望である。勿論人は貴族的な社會の發生史(従つて「人間」といふタイプのあの引上げの前提)について、如何なる人道主義者の幻想にも陥つてはいけない。眞實は冷酷である。これまで各のより高き文化が如何にして始まつたかを、我々をして遠慮なく言はしめよ！ 尙ほ自然の健なる性情をもつた人々は、各の恐るべき言葉遣ひに於ける野蠻人等は、撓ぐべからざる意志の力と權力の渴望とを尙ほ所有してゐるところの肉食人等は、より弱き、より道義的

な、より平和な、事によつたら商業を営んだり家畜を飼つたりしてゐる人種等を征服した。或は最終の生命力が才氣及び頽敗の華々しき火花になつて燃え盡きさうになつてゐた、古い軟熟した文化を征服したのである。最初高貴なる階級はいつも野蠻人階級であつた。彼等の優勝は最も先づ彼等の肉體力に存しないで、むしろ彼等の精神力に存した。彼等はより完全な人間等であつた(それは各の點に於て更に「より完全な禽獸」といふほどの事を意味してゐるのだ)。

二五八

腐敗は、本能の内に無政府情態が生じようとする事、「生命」と呼ばれてゐる感情の土臺石が揺り動かされることの表白であるとする。その腐敗はそれが自らを現はし示す生命體の模様次第で、根本的に異つたものになつてゐる。例へば革命の初めに於ける佛蘭西貴族制の如き貴族制が、崇高なる嘔吐感を以て其特權を擲げ出し、自分自身をその道徳的感情の放逸の爲めに犠牲にした時、それはたしかに腐敗であつた。それは實際、よつて以てかの貴族制が一步一步其支配的特權を放棄し、それ自らを王家の一職能にまで(終には其裝飾及び美服にさへも)落してしまつたところの、あの數世紀に亘つた腐敗にすぎない。しかし乍ら、一の善く且つ健やかなる貴族制に本質的なのは、それが自らを職能(王家のであらうとも、乃至社會のであらうとも)として感ずるのでなく、むしろ其意義及び最高の權

威として感ずることである。それ故、その爲めに不完全な人間に、奴隷に、道具に押し下げられ、抑へつけられねばならぬ、無数の人間の犠牲を安らかな良心を以て受取ることである。其根本的信仰は一に、社会は社会の爲めに存在するを許されぬ、寧ろ撰ばれたる一種屬が其より、高き使命に、また汎く一のより、高き存在へ高められるべき、土臺及び足場としてのみ存在するを許されるといふことであらねばならぬ。それはジッワにあるといふかの日なた好きな蔓草にも比べらるべきだ。その蔓草は——Sipo Matador と呼ばれてゐるが——其腕で以て一の樞の木にまで、まことに久しく且つまことに屢々絡まつてゐて、終にその木より高く、けれどもそれに支へられながら、自由なる光の中へ其冠をひろげ、其幸福を誇示し得るのである。

二五九

お互に傷害を、暴行を、虐使を控へ合ひ、自分の意志を他人の意志と同列に置くといふこと、これはそれに必要な条件が附與されてゐる時(即ち、個々の者等が力の分量や價値の程度や一有機體内の相互關係に於て實際に類似してゐるならば)あるお粗末な意味合で個々の人間に善良なる風俗となるかも知れない。しかし乍ら人が此原理をより汎く取り、出来れば更に社会の根本原理として取らうとねがつたや否や、それは直に、それが實際に何物であるかを明らかにするであらう——即ち、生命否定

への意志であることを、解體及び衰亡の原理であることを明らかにするであらう。此點に於て人は根柢にまで徹底して考へ、あらゆるセンチメンタルな氣弱さを斥けなければならぬ。人生その物が本質的に占有であり、傷害であり、縁遠きものより、弱き者の征服であり、抑壓であり、冷酷であり、自己の形式の強制であり、同化であり、又少くとも、最も穩かに言つても虐使である。しかし乍ら、何の爲めにいつでも人々は、昔から誹謗の目的を刻印打たれた丁度あんな言葉を用ひねばならないか？前に推定された如く、個々人等が互に平等に他を扱ひ合つてゐるやうな團體も亦——各の健全なる貴族制に於て右の如くなつてゐるのだが——それが生きた團體であつて、死にかかつた團體でないならば、個々人等が内部で互に遠慮し合つてゐるやうな總ての事を、他の團體に向つてそれ自ら爲さねばならぬ。それは體化された權力への意志であらねばならぬであらう。それは成長し、周囲を掴み、自身へ引き寄せ、優勝者にならうと欲するであらう。しかもそれは何等かの道徳からでも、乃至不道徳からでもなく、寧ろ彼が生きてゐるからであり、生命が正しく權力への意志だからである。だが歐羅巴人の一般的意識はこの點に於て教へ正されることを最もいやがるのだ。今人々は到處に、科學的假裝の下にすらも、「虐使的性格」のなくなるべき將來の社會情態について、罵り騒いでゐる。それは私の耳にまで、あらゆる有機的職能の差控へられるやうな一の生活を、人が發明することを約束したかの如く響くのである。「虐待」は腐敗した、又は不完全な、原始的な社會に屬しない。それは有機的

根本職能としての生存物の本性に属してゐる。それは正しく生命の意志であるところの、固有たる權力への意志の一歸結である。これが理論として一の新規なものであらうとも、現實としてはそれは總ての歴史の根原的事實(Ur-Faktum)である。希くは我等自らをして、この位には我等自らにまで正直であらしめよ！

二六〇

これまで地上を支配してゐたところの、或は尙ほ支配してゐるところの精粗さまざまなる道德の間を迴歴したあとで、私は若干の特性が規則正しく反復し合ひ聯結し合つてゐるのを見出した。そして終には二の根本的な定型が私にまで姿を現はし、一の根本的差別が明らかになつて來た。そこには貴族道德と奴隸道德とがある。私は直ぐに附け加へて言ふ、總てのより、高き、より、混合せられたる文明の中には兩道德を調停しようとする試みも現はれてゐる。更により、屢々その混淆と相互の誤解とが、否時としては其極端な並列が、同一の人間に於て、一の魂の中にすらも見出される。道德的價值差別は、被支配者等に對する自己の差異を、愉快な心持で意識するところの支配者階級の間に生じたか、でなければ被支配者等、あらゆる程度の奴隸や從屬者等の間に生じたかである。前の場合に於て、『善』といふ概念を決定するのが支配者等である時、特色をなし階級を決定するものとして受取られる

のは高められたる尊大なる心持である。高貴なる人間は、かかる高められたる尊大なる心持の正反對が現れるやうな存在物を自分自身から引きはなす。彼はそれらのものを輕蔑する。直ぐにも注意して貰ひたいのは、此第一種の道德に於ては『善』『惡』(schlecht)の對照が『高貴』と『輕蔑すべきもの』との對照を意味してゐるといふことである。"gut", "böse" (日本語に譯すれば、やはり『善』『惡』となつてしまふ)の對立は別の起源をもつてゐる。臆病な者、びくびくしてゐる者、つまらない者、狭くろしい功利を考へてゐる者は輕蔑される。同じやうに落ちつきのない目をもつた猜疑者、自らを卑下する者、自らを虐げさせる犬のやうな人間、物ほしげな追従もの、特に虚言者は輕蔑される。平民共はうそを吐くといふのがあらゆる貴族主義者等の根本的信仰である。『我等誠實なる者』——斯く古代希臘に於ては貴族等が彼等自らを呼んだ。道德的價值の表彰がどこでも先づ人間の上に向けられ、かた轉用的に、そして後になつてからのみ行爲の上に向けられたことは明々白々である。されば道德史家が『何故同情的行爲は賞讃されたか？』といふ疑問からして出發する時、それは途方もない大間違である。高貴なる種類の人間は自分自身が價値を決定する者だと思つてゐる。彼は賞讃されることを要しない。彼は『私に有害なものが、それ自體に於て有害である』と判断する。彼は事物に名譽を附與するのが一にただ彼自らばかりであると知つてゐる。彼は價値の創造者なのである。彼が自分自身に於て認知するところの總ての物を彼は尊敬する。かくの如き道德は自己頌讚である。前景には充實の、溢れんと

する権力の感情がある。高度の緊張の幸福が、施與しようとながふところの富の意識がある。高貴なる人間も不幸なる者を救助する。けれども憐憫からでなく、又は殆んど憐憫からでなく、寧ろ権力の過剰が生ずるところの一の衝動からである。高貴なる人間は自分自身の中に有力なる者を尊敬する。自分自身の上に力をふるつてゐるところの人間、言説したり沈黙したりすることを知つてゐるところの人間、好んで自分自身を峻厳に扱ひ、總ての峻厳なるものに敬意を拂ふところの人間をも尊敬する。「ラタンは一の冷酷なる心情を私の胸に置いた」と、一の古いスカンディナヴィア傳説にある。かくの如くそれは尊大なる一キキングの魂から正當に考へ出されてゐる。かくの如き種類の人間は同情の爲めに作られてゐないことを誇りにさへもしてゐる。さればかの傳説の主人公は附け加へて警戒してゐる。「年若くして既に硬き心情を有しない人間は、竟にそれを有たないであらう」と。斯様に考へるところの高貴にして勇敢なる人々のはかの、恰も同情の中に、又は他人の爲めの行爲の中に、又は *réressment* (無慾) の中に道德的人物の特色を見るやうな道德から最も遠ざかつてゐる。自分自身に對する信仰は、自分自身についての誇は、「無私慾」に對する根本的敵意と皮肉とは、同情及び「温かな心情」に對する軽い侮蔑と警戒との如く、丁度その如くはつきりと高貴なる道德に屬してゐる。尊敬することを心得てゐるのは強大な人々である。それは彼等の技術である。彼等の發明の領域である。老年に對する、及び傳習に對する深い畏敬は——總ての法律はこの二重の畏敬の上に立つてゐるのだ。

が——祖先等に都合よく、新しく來る者等に都合悪しき信仰と先入見とは、強大者等の道德に典型的である。そして若しも反對に「近代的觀念」をもつた人々が殆んど本能的に「進歩」と「將來」とを信じ、老年に對する尊敬をいよ／＼缺乏しつゝあるならば、これらの「觀念」の下賤なる素性はそれで以て既に十分に暴露されてゐる。しかし支配階級の道德は、人がたゞ同等な者に對してのみ義務を有するといふ——又より、低い階級の者等に對しては、總ての縁遠き者等に對しては、思ひ通りに、或は「心の欲するが儘に」、そしてとにかく「善惡を超越して」行動してよいといふ、其原則の峻嚴さに於て現代の趣味にまで最も縁遠く且つ厄介なものである。同情及び類似のものが其處を得る所以である。久しき謝恩と久しき復讐とを行ふ能力及び義務は——どちらも唯だ同等者等の内に於てのみ——報復に於ける巧緻は、友情に於ける概念の精練は、敵を有つことのある必要は（謂はゞ、嫉妬、争氣、倨傲などの如き感情に對する出口として——實際に、善き友人であり得る爲め）、總ての斯うしたものは高貴なる道德の類型的特徴である。そして其高貴なる道德は前に指示されたる如く、「近代的觀念」の道德でない。従つて今日想見するに難く、掘り起したり暴露したりするにも難い。それは道德の第二のタイプと、奴隸道德と別である。苛虐されてゐる者、抑壓されてゐる者、苦惱してゐる者、束縛されてゐる者、自分自身を明らかにしてゐない者、及び疲勞してゐる者が道德を口にするとせよ。彼等の道德的評價に於ける共通な要素は何であらうか？ 恐らく人間の全境地に對する悲觀的猜疑が、恐らくは

人間及び其境地に對する呪咀が表白されるであらう。奴隷の目は強大者の徳に好意をもたない。彼は懷疑と不信をもつてゐる。彼はそこに尊敬されてゐるところの總ての「善き」ものに對する不信の巧緻をもつてゐる。彼は幸福その物が其處に純粹でないことを自分自身に信じさせようと欲する。一方では、苦惱者に其生存を樂にしてやることに役立つところの性質は、特別に引き出され、光を浴びせかけられる。この處に同情や、深切な世話好きな手や、温かな心情や、忍耐や、勤勉や、謙遜や、友情などが尊敬される。なぜと云つてそれらのものは此場合最も有用なる性質であり、生存の重荷を支持すべき殆んど唯一の手段であるからである。奴隷道徳は本質的に功利道徳である。ここにかの有名な「善」「悪」(「Gut」「Böse」)の對照の出來上つて來る、つぼがある。權力と危険さとが、輕蔑され得ない或る恐ろしさ、狡猾さ、力強さが、惡の中にはいつてゐると感じられる。乃ち奴隷道徳に依れば「惡しき」人間は恐怖心を起させる。貴族道徳に依れば、恐怖心を起させ、また起させようとするのは、ほかならぬ「善き」人間であり、「惡しき」(「schlechte」)人間は輕蔑すべきものと感じられるのである。この對立が其頂上に達するのは、奴隷道徳の論理的歸結に従つて、遂に今此道徳の「善き」人間の上にも輕視の氣息が——それは一寸した、又好意のあるものであるかも知れないが——かかつて來る時の事である。なぜならば、奴隷的な考方によれば善き人間はいつでも危険ならぬ人間であらねばならないから。彼はお人好しで、欺かれ易く、事によつたら少し足りない、un honnime なのだから。奴隷

道徳が優勢である如何なる處でも、言語は「善」と「愚」とを相近づかしめる傾向を示してゐる。一の最終の根本的差別を云へば、自由に對する願望が、幸福に對する本能が、又自由感情の精練が必然的に奴隷道徳及び道徳性に屬してゐる如く、畏敬及び歸依に於ける技術及び狂熱は、ある貴族的な思考及び評價方法の普通の徴候である。これからして一も二もなく理解されるのは、何故欲情としての愛が——それは我々の歐羅巴的特色に屬するものだ——あくまでも貴族的な起源をもつてゐなければならぬかの理由である。已に十分に知れ渡つてゐる如く、その發明はプロオヴンスの騎士詩人のお蔭である。歐羅巴が随分多くのものを、又殆んどそれ自身を負ふてゐるところの、あの華々しき獨創に富んだ「gai saber」(悦ばしき智識)の人々である。

二六一

高貴なる人間にまで最も理解しにくいものの一は虚榮心である。他の種類の人間が兩手で以てそれを捕へたやうに思つてゐる場合にも、彼は尙ほそれを否定したくなるであらう。彼にとつての問題は、自分自身もつてゐない——従つてまた「値して」もゐない——自分自身についての好評を喚起しようとするところの、その癖あとでは其好評を自ら信ずるところの人々を思ひ浮べて見ることである。彼にまでこれは一面まことに没趣味で、自分自身を辱めることであると共に、他面まことに途方もなく

反理性的である爲め、彼が虚榮心を除外例として考へたがり、それについて談られる大抵の場合それを疑はしく思ふほどである。例へば彼は言ふであらう、「私は私の價値を誤解するかも知らない。だが一方では、私の價値が私の見積ると丁度同じやうに他人からも承認されるべきことを要望する。だがこれは決して虚榮心ではない（寧ろ自負心であり、或はより、屢々、「卑下」とか「謙遜」と呼ばれるところのものである）。」或は又言ふであらう、「彼は色々の理由からして他人に關する好評を悦ぶかも知れない。恐らくは私が彼等を尊敬し、愛し、各の彼の悦びを悦びとするからである。恐らくは又、彼等についての好評が私自身についての好評に對する信仰を承認し力づけてくれるからである。恐らくは、他人についての好評が、私のそれに分前をもたない場合にすらも、私にまで有用であり、有用なることを約束してくれるからである。しかし乍ら斯うした事はいづれも皆虚榮心ではない。」高貴なる人間は先づ強制的に、とり分け歴史の功をかりて知らされなければならぬ——太古の時代から、如何やうにか從屬的になつてゐるところの總ての社會相に於て、尋常人は單に、彼が通用してゐるだけのものであつたこと、價値その物を定めることに全く慣れないので、彼はその主人が彼に附與したよりほかの如何なる價値をも自ら附與しなかつたことを（價値を創造するのは特有なる主人の權利である）。尋常人が今日でもやはり自分自身についての評判のみ待つて居り、やがてそれに本能的に服従するといふのは、一の驚くべき隔世遺傳の結果として理解され得るかも知れない。だが右の場合は決して、

「善き」評判ばかりでなく、惡しき、不當なる評判をもふくんでゐる（例へば、信心深い婦人等が彼等の懺悔悔僧から聞き知るところの、又一般に信心深い基督教徒が其教會から聞き知るところの、自己評價及び自己非難の大部分を考へて見るがよい）。實際のところ今や民主的社會事情（及び其原因たる、貴族と奴隸との混血）の次第に發生し來つたに伴つて、自分自身の價値を自ら附與し、自分自身を「善く思ふ」といふ本來高貴なる又希有なる衝動は、いよゝゝ激勵され擴大されるであらう。しかし乍らそれは如何なる時にも、それ自身に反對な一のものより古い、より廣い、より根本的に喰ひ込んだ傾向をもつてゐる。そして「虚榮心」の現象の中に此より古い傾向がより新しい傾向を壓倒してゐる。虚榮的な人間は、彼が自分自身について聞くところの各の好評を悦ぶ（それが有用であるかないかのあらゆる見地から全然はなれて、又同じやうに眞實か虚偽かといふことをも頓着することなしに）——丁度彼があらゆる惡評から苦しみ悩む如く。なぜと云つて彼はどちらにも服従するのだから。彼は彼の中に發生して來るところのあの最も古い服従の本能から、自分自身を彼等に服従してゐるものと感ずるのだから。それは虚榮家の血の中にある「奴隸」である、奴隸の狡猾さの殘留物である——そして如何に多くの「奴隸」が例へば今日尙ほ婦人の中に残つてゐるかよ——自分自身についての好評へ誘惑して行かうと努めるのは。あとで直ぐ、あだかも彼が呼び出して來たものではなかつたかの如く、それらの好評の前に自ら平伏するのも又奴隸である。さて反覆して言へば、虚榮心は一の隔世遺傳である。

本質的に同一の不利なる条件との久しき闘争の下に、一の種属は生じて来る。一のタイプは強固なものになつて来る。一方では、飼養家等の経験から知られてゐるのは、潤澤すぎる營養を、又一般に餘計な保護や世話を受けるところの種属が、直ぐに最も著しき仕方にて變種を生じ易く、且つ畸形や怪異に(怪異的不徳にも)富んでゐるといふことである。今試みに一の貴族的共存體を、古代希臘の一都市、またゼニスなどを見よ——故意であるか否かを問はず、人類育成を目的にしたところの一設備として。そこでは自分達の種属を持続させやうと欲する人々が、お互に、また自分自身に信頼せられてゐる。その主要なる理由はと云へば、彼等が自分自身を持続させざるを得ないから、でない根絶されるといふ恐るべき危険に陥るからである。ここでは、よつて以て變種が招致されるといふやうな、あの恩寵が、あの過剰が、あの保護が缺けてゐる。種属は種属としてのそれ自身を要する——丁度その冷酷さや、その同一性や、その形式の單純さによつて、隣人等との、又は反逆的な、反逆しさうな臣下等との斷間なき戦の中に、總じて持續して行き且つ持續的にして行くところの或る物としての、それ自身を種属は要するのである。最も多様な經驗は種属にまで教へる——あらゆる神々や人々をもともせず、それが尙ほ存在してゐるのは、それがやはり勝利を占めて來たのは、主として

如何なる性質のお蔭であるかと云ふことを。これらの性質をそれは徳と呼び、此等の徳をのみそれは大きく養ひ育てる。それは随分な嚴格さでそれをやる。然りそれは嚴格さを欲求する。各の貴族的道徳は年少者の教育に於て、婦人に對する取扱に於て、婚姻の風習に於て、年若の關係に於て、刑罰法(種属の頹敗をのみ眼中に置いてゐる)に於て寛容でない。それは苛酷その物を「正義」の名の下に、諸徳の一に數へてゐる。少數の、けれども非常に力強い特徴をもつた一のタイプは、峻嚴なる、好戰的なる、賢く寡言なる、沈鬱なる人間(又かくの如き者として、社會の魅力やニュアンスに對する精やかな感情をもつた)の種属は、かやうにして世代の轉移に動かされることなしに確立される。つねに同一なる不利の条件との斷間なき戦は、前にも述べた如く、一のタイプが強固になることの原因である。しかし乍ら終に幸福なる事情の生じて來る日がある。巨大なる緊張は弛められる。恐らく隣人等の間にはもう如何なる敵もない。そして生活に對する、加之生活の享樂に對する手段はありあまつてゐる。ただ一撃の下に舊い訓育の拘束は打ち破られてしまふ。それはもはや必要なものとして、生存を規定するものとして感じられないのだ。それが存続しやうとしたならば、それはただ贅澤の一形式として、一の骨董趣味としてのみそれをなし得たであらう。變種は、それらのものがより、高きもの、より、精やかなるもの、より、希れなるものへの脱線であるにもせよ、黒化、怪異化であるにもせよ、忽ち最大の夥しさと華やかさとに於て登場する。個々の者は個々の者であり、且つそれ自身を浮き出させること

を取てする。歴史のかかる轉機に際し、互に相並んで、又屢々互に絡み合ひもつれ合つて現れ来るのは——「太陽と光との爲めに」互に競ひ合ひ、如何なる限界をも、如何なる拘束をも、如何なる容赦をももはや従來の道德から取り出して來ることを知らない、荒々しく向ひ合つた、謂はば爆發するところの自我主義のお蔭で——一の立派な、複雑な、原始林的な繁茂成長である。成長の競争に於ける一種の熱帯的なテムポオである。また恐るべき衰亡と自滅とである。そんなにも物凄く弓を引きしぼつたところの力を、恐ろしきまでに積み上げたのは道德その物であつた。今やそれは「跡を絶」つてゐる。今や「跡を絶」たうとしてゐる。より大なる、より複雑なる、より包括的な生活が舊道德を超越して營まれてゐるところに、危険な不氣味な點に到着してゐるのだ。そこに個人は、自分自身の立法に、自己保存、自己向上、及び自己救済に對する自分自身の術策に依頼すべく餘儀なくされて立つてゐる。新しき「何故に」のほかは何物もなく、新しき「如何に」のほかは何物もなく、もはや何等の共通なる方式もなく、誤解と輕蔑とが相結んで、衰頹や、腐敗や、最高の渴望が恐るべく絡まり合つて、種族の天才が善悪のあらゆる豊富角から溢れ出て、春秋の宿命的な合一が、新しいけれども盡くるなき、疲るるなき頹敗に特有な、新しき魅力と神祕とに充ちみちて。又もや危険は、道德の母なる大なる危険は現れてゐる。しかもこの度は個人にまで、街上の隣人や友人にまで、自分の子供にまで、自分の胸にまで、願望や意志の最も固有にして最も秘密なるものにまで移されてゐるのだ。此時代に於て出現する

ところの道德哲學者等は今、何を説教しなければならぬであらうか？ 彼等は、この鋭き袖手觀察者等は發見する——終局が急速に近づきつつあることを。彼等をとりまける總てのものが頹敗し、頹敗させるといふことを。人間の一種屬、盡しがたく凡庸なものを除き、何物も明後日まで持ちこたへないといふことを。凡庸なものだけが自らを持續し自らを繁殖することの見込みを有つてゐる。彼等は將來の人間であり、唯一の生き残るべき者等である。「彼等の如くあれかし！ 凡庸になれ！」が今や、尙ほ意義を有し、聞く耳を見出してゐるところの唯一の道德である。しかし乍らこれを、この凡庸の道德を説教するのは困難である！ げにそれは、それが何であるか、又それが何を欲求するかをつひに告白し得ないのだ！ それは中庸と品位と義務と隣人愛とを談らねばならぬ。それは其反語を包みかくすことに困難するであらう！

二六三

そこには何物にもまして、既に一の高い階級の徵證であるところの、階級に對する本能がある。高貴なる素姓と慣習を想見させるところの、畏敬のニュアンスに對する悅樂がある。一の魂の精やかさ、善良さ、高さは一の危険なる試練に置かれる——最高階級に屬する、けれども尙ほ權威の畏怖によつて厚かましき觸接や無作法から保護されないやうな、何物かがそのそばを通り過ぎる時、差別され

ないで、見出されないで、誘惑しながら、事によつたら故意に包みかくされ假装されて、生きた試金石の如くして行くところの何物かが通り過ぎる時。魂を研究するのを仕事と實習とにしてゐる人は、一の魂の最終の價值、即ちその魂の屬してゐる變へがたき生得の階級を確定する爲めに、丁度此技術のさまざまな形式を利用するであらう。彼はその魂を畏敬の本能で以て試験するであらう。Difference en-gendre haine (差異は憎悪を生む)。多くの性情の卑俗さは、何等かの神聖な容器が、閉ぢ込められてゐた祠堂からの何等かの貴重品が、大きな運命の標徴をもつた何等かの書物が持ち出される時、忽ち不潔な水の如く噴き上る。そして一方では、魂が最も尊敬すべきものの近接を感じてゐることを示すやうな、一のわざとならぬ沈黙があり、眼の逡巡があり、あらゆる身振の靜止がある。一體にこれまですて聖書に對する畏敬といふことが歐羅巴に於て持ち續けられて來た、その具合なるものは恐らく、歐羅巴が基督教に負つてゐるところの行儀習得の最善なる實例であらう。深さと最上の意味深さをもつた此の如き書物は、それを汲み盡し味ひ盡すに必要なあの幾千年間の持續を獲る爲め、外から加へられる專制的權威で以て保護されることを要するのである。如何なる物にも觸れてはならぬといふ、その前に靴を脱いだり、不淨の手を控へたりせねばならぬやうな、神聖な經驗もあるのだといふ感情が、大衆(あらゆる種類の淺薄愚劣な連中)にまで終に浸み込んだ時、それは随分な成功である。それは殆んど人間性への彼等の最高の向上である。これに反して所謂教養ある階級、「近代的觀念」の信仰

者等にあつては、恐らく何物も彼等の廉恥心の缺乏ほど、よつて以て彼等が一切の物に觸つたり、嘗めたり、手さぐりしたりするところの、手や目の心易げな厚かましさほど、それほど嘔吐を催させはしないであらう。そして今日民衆の中に、下層の民衆の中に、とり分け農夫等の間にまだまだ、新聞の讀める半可通連中、教養ある階級なぞの間に於けるより、より多くの比較的上品さと畏敬心が存在してゐるといふのは、正にあり得べき事である。

二六四

ある人間の魂から、彼の祖先が最も好んで、最も持續的に爲してゐたところのものを拭ひ去ることは出来るものでない。彼等が勤勉な節儉家かなんぞであつて、帳場机や錢箱にかじりついてゐて、その欲望に於て控目で町人的であり、その徳に於ても亦控目であつたらうとも。或は彼等が朝から晩まで命令することに慣れてゐて、荒つばい悅樂を、並びに恐らくは更に荒つばい義務や本分を好んであらうとも。或は彼等が終に、あらゆる妥協の前に面を赤らめる、撓げがたく敏感な良心をもつた人間として、全然彼等の信仰——彼等の「神」——の爲めにのみ生きるべく、いつか生得及び所有の舊い特權を犠牲にしてしまつたらうとも。ある人間が其兩親や祖先等の性癖を其體内に有つてゐないといふのは、全くあり得ない事である——よし外觀が反對を語つてゐようとも。これは人種の問題である。

両親について何等かの事を知つてゐれば、その子供にして一の結論をつけることは許される。何等かの忌まはしき不節制は、何等かの下劣な羨望心は、不法な自尊心は——この三の物が相寄つて何時でも純粹な賤民的なタイプを造り上げてゐる如く——斯うしたものは遺傳された血の如く、それほど確實に子供の方へ移つてゐなければならぬ。そして最善なる教育と修養との助けをかりて、人は正しく單だ、かくの如き遺傳について欺瞞することをなし得るだけである。そして今日教育と修養とが、このほかの何を爲さうとしてゐるか！ 我々の非常に民衆的な、或は寧ろ賤民的な時代に於ては、「教育」と「修養」とは本質的に欺瞞することの技術であらねばならぬ——素姓について、體と魂とに於ける遺傳された賤民性について欺瞞することの技術であらねばならぬ。今日特に誠實を説き、間斷なくその弟子共に「誠實であれ！ 自然であれ！ 汝等のあるが儘に自らを示せ！」と言ひ聞かせてゐる一教育家は——かくの如き有徳眞摯なる一鈍物すらも、暫くすると本性を引出す爲めにホラアツの例の熊手を手にすることを學び知るであらう。だが、それでどれだけの成功を収めたか？ 「賤民」はあとしざりする。(これは *naturam expellere furca, tamen usque recurret* 「熊手で以て本性を引き出さうとしても、彼女はいつでもあとしざりする」といふホラアツの句を利用したものである)。

二六五

無邪氣な耳を不快ならしめることの危険を冒しても私は、自我主義が高貴なる魂の本質に屬することを言明しよう。私が謂ふのは、「我々」の如き存在にまで他の存在が本來從屬してゐなければならず、また自らを犠牲にしなければならぬといふ、あの動かしがたき信仰の事である。高貴なる魂はその自我主義の事實を、如何なる疑問もなしに、又その内に酷薄、強制、氣隨の感情をもつことなしに、寧ろ事物の根本法則に土臺を置いてゐるかも知れない或る物として受取るのである。彼にしてそれに對する一の名稱を求めたならば、則ち彼は言つたであらう、「それは正義その物である」と。彼ははじめの程彼をして躊躇せしめる事情の下に於て、そこに彼と同様に正しいもののあることを承認する。彼がこの階級問題を片附けたや否や、彼は自分自身との交渉に於て有つのと同様にたしかな廉恥心と畏敬心とをもつて、此等の同等者及び同等に正しき人々の間を動き廻るのである——總ての星辰が心得てゐるところの、一の生得の天上的な機構（機構）に従つて。それは、自分と同等なものとの交渉に於ける斯うした巧緻と自己制限とは、彼の自我主義に今一つ實例を加へたものである。各の星辰は此の如き自我主義者である。高貴なる魂は彼等の中に、又彼が彼等に附與する權力の中に、彼自らを尊敬する。彼は名譽及び權利の交換が總ての交際の本質として又、事物の自然的情態に屬してゐることを疑はない。高貴なる魂はその奥底に横つてゐる熱情的な、興奮し易い報復本能から、彼の受くる如く與へるのである。「恩寵」といふ概念は——*inter pares*——何等の意義をも善き善をも有しない。そこには上

からの施與を謂はば自分の上へ落ちさせ、渴いてゐたものが滴を呑むやうにしてそれを呑むといふ立派な技術がある。けれども、かうした技術や態度に於ては高貴なる魂は何等の手練をも有しない。この場合彼の自我主義が彼を遮るのだ。彼は一體に「上」の方へ目をやることを欲しない。むしろ自身の前方に、水平に、そして徐かに、或は下方に目をやることを欲する——彼は自らが高所にあることを知つてゐるのである。

二六六

「人はただ、自分自身を捜し求めない人間をのみ眞實に尊敬することが出来る」——ラアト・シュロオセルへのゲエテの言葉。

二六七

支那人の間には、母親から其子供等に教へさへもするところの「一の諺がある。曰く、siao-sin" mache dein Herz Klein!"(汝の心を小さくせよ)と。これこそは末代文明に於ける根本的傾向である。私は「古代希臘人すらも我々今日の歐羅巴人に於て最も先づ自己小化を見つけ出すであらうことを疑はない。この點だけでも既に我々は彼の「趣味に反」してゐるだらう。

二六八

所詮卑俗とは何であるか？ 言葉は概念に對する聲音記號である。しかし乍ら概念は屢々引返して來るところの、また結合するところの感覺に對する、感覺集團に對する多少なり截然たる標徴である。お互に理解し合ふ爲めには、同一の言葉を使用するといふことがまだ十分なものでない。我々は更に同じ種類の體驗に對して同じ言葉を使用しなければならぬ。結局我々はお互に其經驗を共通にしなければならぬ。この故に同一民族の中の人々は同一言語を用ひてゐる場合にすらも、異つた民族に屬する人々よりも、お互により、善く理解し合ふのである。或は寧ろ、人々が久しい間類似の條件(氣候、土地、危険、需要、勞働などの)の下に一緒に生活してゐれば、それからして「それ自らを理解する」何物かが、一の民族が生じて來る。總ての魂に於て、屢々引き返して來るところの體の同一數は稀に引き返して來るところの物に對して優勢になつてゐる。この事柄について人々は速かに、いよいよ速かに理解し合ふ。言語の歴史は一の省略作用の歴史である。この急速なる理解を基礎として人々は、緊密に、いよいよ緊密に結合し合ふ。危険が大きければ大きいほど、必要な事についてさつさと連合することの要求がいよいよ大きくなる。危険に於て互に誤解し合はないといふのは、それは人々が實際どうしてもやらずにゐられないところの事である。各の友情や戀愛に於ても經驗されることだが、

同じ言葉を叩ひながらも、一方は相手と異つた感情や、考へや、直覺や、願望や、恐怖をもつてゐるのだと分つたや否や、友情とか戀愛とか云つた種類の何物も持続しなくなる。(永久の誤解に對する恐怖)それは性を異にする人達が、官能や心情に契められる性急な結合から、随分屢々免れさせて貰ふところの深切なる守護神である。そしてシ・オペンハウエルの所謂「種屬の守護神」なぞのやうなものではない。一の魂の中なるいづれの感覺集團にもせよ、最も速く目覺め、言葉を捕へて、命令を發するところのものが、其價值の一般的階級を決定し、それが結局其商品目録を作り上げる。ある人間の價值決定は彼の魂の構造のそれだけかを暴露する。又何處にそれが其生活條件を、其本當の需要を見てゐるかを暴露する。昔から必要は、類似の象徴で以て類似の需要を、類似の體驗を表白し得たやうな人々をのみ、相寄らしめたとしたならば、一體には、結局平均の、凡庸なる體驗の闇歴だけを意味する、困迫の容易なる傳達性が、これまで人類の上に働いたあらゆる力の中、最も力強いものであらねばならなかつたといふことになる。より類似した、より尋常な人々はいつても有利の地位に立つた。そしてやはり立つてゐる。より秀拔な、よりリファインされた、より特色のある人々は、ともすれば孤立になり易い。彼等は其孤立の爲めに不運な目に遭ふ。そして滅多に繁殖しない。人はこの自然なる、あまりに自然すぎる Progressus in similitudine (似寄つたものへの前進)を、似たもの、尋常なもの、平凡なもの、群畜的なものへの、卑俗なものへの人間の進歩に逆行すべく、巨大なる反對力に訴へなければならぬ。

ければならぬ。

二六九

ある心理學者——生れついたる、避くべからざる心理學者、魂の洞察者——がより、秀拔なる場合及び人間の方へ留意すればするほど、同情の爲めに窒息するといふ彼の危険は愈々大きくなつて来る。彼は他の人間より以上に、冷酷と快活とを要する。なぜと云つて、より高き人間の、より異常に出来てゐる魂の壊敗没落は古今の通則なのだから。かくの如き通則をいつも念頭に置いてゐるのは恐ろしい事である。この没落を發見したところの、より高き人間の此一般的な内部的「絶望」を、あらゆる意味での此永久の「晩すぎる」を、先づ一たび、その次ぎには殆んど幾度となく、歴史の全體を通して發見するところの心理學者のさまざまなる拷問苦は、恐らくいつかは、彼が苦々しさを以て彼自らの運命へふり向き、自己破壊の企てをなすこと、彼が彼自らを「壊敗」することの原因になるかも知れない。人は殆んどあらゆる心理學者に於て、普通の、善く出来た人々との交際に對する裏切らしき嗜好と享樂とを認めるであらう。それによつて裏切り示されるのは、彼が常に一の治療を要してゐるといふこと、彼の洞察と鋭さが、彼の「仕事」が彼の良心の上に横へたところのものから離れて、彼が一種の逃避及び忘却を必要としてゐるといふことである。彼の記憶に對する恐怖は彼に固有である。彼

は他の人々の批判によつてたやすく沈黙させられる。彼は彼が見てゐる場合、そこで如何に尊敬され、嘆賞され、愛着され、讃美されるかを、感動しない顔付きで以て傾聴してゐる。或は彼は、何等かのもの、つとも、い、意見にはつきり同意を表しながら、やはり彼の沈黙を包みかくしてゐる。事によつたら彼の矛盾した地位は随分な恐ろしいものになつて来て、その結果、丁度彼が大なる侮蔑と共に大なる同情を學び知つた場合に、群衆は、教養ある連中は、夢想家等は夢想家等の方で、大なる崇敬——「大なる人」及び奇蹟に對する崇敬——を學び知るであらう。それらのものの爲めに人は祖國を、大地を、人類の品位を、また自分自身を祝福尊敬する。それらのものを人は年少者に指し示し、それらのものを目標にして年少者を教育するのである……そしてこれまで凡ての大なる場合に於て丁度同一の事が起らなかつたと誰が言ふか。即ち、群衆は一人の神を禮拜したのである——そしてその「神」は一のあはれなる犠牲の獸であつたのである！ 成功は常に最も大なる虚言者であつた。そして「事業」その物が一の成功である。大なる政治家は、征服者は、発見者は、彼等が認識されなくなるまで共創造物の中に包みかくされてゐる。藝術家の、「事業」は單だ、彼が創造したところの、創造したと思はれるところのものを發明するにすぎない。「偉大なる人間」は——彼等が崇敬されてゐるやうな——あとから出来た小さなつまらない虚構物である。歴史的價値の世界に於ては貨幣製造が盛に行はれてゐる。例へばバイロンだとか、ミッツセイだとか、ボオだとか、レオバルディだとか、クライストだとか、ゴッ

ルだとか（私はより、大なる名前を擧げることをしてないけれど、念頭には置いてゐる）云ふやうな大なる詩人は——今日ある如き、恐らくあらねばならぬ如き——狂熱的な、肉體的な、子供らしい、その信任及び不信に於て輕率唐突な、現前の人々で、通常何等かの瑕瑾が包みかくされてゐなければならぬやうな魂をもつてゐる。屢々其業績で以て一面的汚辱に復讐する。屢々其高翔で以てあまりにも誠實すぎる記憶に對しての忘却を求める。屢々彼等が泪のまはりの鬼火のやうになり、自ら星辰を氣取るまで、泥濘の中に迷ひ込み、殆んど感溺してしまふ——民衆はその時彼等を理想家と呼ぶのである——屢々一の久しき嘔吐感と戦ひ、不信仰のいくたびか現れるところの幽靈と戦ふ。そして其不信仰は彼等を冷くし、彼等を強ひて *bold* を戀ひ慕はせ、「自分自身に對する信仰を陶醉した詭譎者の手から食ひ盡させる——此等の大なる藝術家が、一般により、高き人々は、かつて彼等を洞見したところの人にとつて如何なる拷問苦であるかよ！ かくて、苦患の世界に於て千里眼的であり、又生憎と遙に其力量を超えて救助したがるところの婦人から、丁度さうした婦人から彼等があんなにもたやすく、實際のない最も献身的な同情のあの爆發——群衆が、特に崇敬の心をもつた群衆が理解しないで、好奇的な自惚の強い解釋で以て壓倒してしまふやうな——學び知る所以は明らかにされる。此同情は通例其力についてそれ自らを欺く。婦人は愛が一切をなし得るものと信じたがる。これが彼等の特有なる迷信である。心情を知るところの人は、最上の最も深き愛すらも如何にあはれなる、術なき、身の

程知らぬ、あぶなつかしきものであり、救助するよりもたやすく破却するものであることを看破する！
 耶蘇の生涯の神聖なる比喩譚や粉飾の下に、愛に關する知識の殉教の、最も痛ましき一の場合が包み
 かくされてゐるかも知れない——如何なる人間の愛をも、十分に有たなかつたところの、峻厳さを
 以て、亂心を以て、彼に愛を拒んだ人々に對する恐ろしき發作を以て、愛を、愛されることを、その
 ほかなる何物をも要求しなかつたところの最も無邪氣なる、最も熱望的なる心情の殉教である。彼
 を愛しようと欲しなかつた人々へ送り込んでやる爲め、地獄を發明しなければならなかつたところの、
 又結局人間愛を明らかにしてしまつて、全部愛であり、全部愛の能力であるやうな一人の神を發明し
 なければならなかつたところの、愛に飽足しなかつた、飽足し得ない一人のあはれなる人間の物語が
 である。その人間は人間の愛を憐憫する。なぜならば、それがあんなにもみじめであり、あんなにも
 無智であるから！ 斯様に感ずる人は、愛について斯様に認識する人は——死を求めぬ！ だが、何
 故に人は此の如き痛ましき事柄に屈托して行かねばならぬか？ 人にしてもし、必ずしもそんなこと
 をするにも及ばないとしたら——

二七〇

深く苦しんだ各の人間の精神的慢心と嫌惡とは——如何に深く人々が苦しむ得るかが殆ど階級を決

定する——彼の苦しみによつて、最も聰慧賢明なる人々が知り得るよりも、より多くを知ると云こと、
 「諸君がまるつきり知らない」さまざまの遠い恐ろしい世界と相親み、又「打寛ろげ」と云ふことの、
 彼の物凄い確信は——それで以て彼がすっかり染め上げられてゐる——苦しむ者の斯うした精神的な
 無言の慢心は、認識の上にも選ばれたる者の、「入門者」の、殆んど犠牲にされた者の斯うした誇りは、厚
 かましき同情深き手との接觸に對して、又苦しみに於てそれに匹敵しない總ての物に對して自らを防
 衛する爲め、あらゆる形式の假裝を必要に感じて来る。深い苦しみは高貴にする。それは分離させる。最
 もリファインされた假裝形式の一は享樂主義である。並びに苦しみを氣輕に受け取り、あらゆる悲しき
 奥深きものに反抗するところの、ある街はれたる趣味の勇敢さである。快活さの爲めに誤解されるとい
 ふので、その快活さを使用するところの「快活な人々」がある。彼等は誤解されたいのである。科學が
 一の快活な外觀を呈する故、科學的傾向が人間を皮相的だと論結させる故、科學を使用するところの
 「科學的な人々」がある。彼等は一の謬れる論結へ連れ込んでやりたいのである。打ち砕かれた尊大な
 憲し難き心情をもつてゐることを包み匿したり、否定したりしたがるところの自由な、厚顔な精神が
 ある（ハムレットのキニイク主義——ガリアニの場合）。そして時としては愚鈍その物が不幸なるあま
 りにも確實すぎる知識の假面である。そこで、「假面に對して」畏敬の念をもち、まぢがつた場所に心
 理や好奇心を使用しないのが、よりリファインされた人間性に屬するといふことになる。

二七一

人間を最も深く別つところのものは、純潔さのさままなる意義及び程度である。あらゆる僻氣けきも、お互に有用だといふことも何の役に立たうぞ！ お互の間のあらゆる好意も何の役に立たうぞ！ 結局依然として、彼等は「お互に臭氣を我慢し合ふことが出来ない！」純潔に對する最高の本能はそれに苦しんでゐる人間を、聖徒として最も奇異なる、最も危険なる孤獨に置く。なぜと云つてそれこそは聖の聖なる所以であるから——右の本能の最高なる精神化であるから。沐浴の悦びに於ける名狀すべからざる充實に關する何等かの精通は、魂を絶えず夜から朝へ、暗鬱から朗らかな、輝かしき、深き、精こころかなものへ逐ひやるところの、何等かの熱望は、丁度さうした傾向は差別するだけだけ甚だしく——それは一の高貴なる傾向であるが——それは又分離させるのである。聖徒の同情は人間的な、あまりに人間的なもの、汚穢けがれに對する同情である。そして同情そのものも彼から汚穢として、不潔として感じられるところの程度及び高さがあるのである。

二七二

高貴の標徴は、我々の義務を各人に對する義務にまで引き下げようと決して考へないことである。

自分の責任を放棄したり、または分配したりしようと欲しないことである。自分の特權及び其行使を、自分の義務の中に數へることである。

二七三

偉大なる事物を努力し求めてゐるところの人間は、彼が其途中に出で會ふ各の人を、手段と見做し、或は延引障害と見做し、或は一時的の休息所と見做す。その彼に特有なる同胞達への氣高き温情は、彼が其高頂にあつて、支配してゐる場合にのみ可能である。苛立いらだたしき、及びそれまで常に喜劇に宿命づけられてゐるといふことの彼の意識は——なぜと云つて、鬭争すらも一の喜劇であり、且つ各の手段が目的をかくす如くかくすのだから——彼の爲めにあらゆる交際を汚毒する。斯うした種類の人間は孤獨を知つて居り、又何が孤獨に於て最も有毒であるかを知つて居る。

二七四

待つ人々の問題。——ある問題の解決が眠り潜んでゐるより、高き人が、尙ほ宜しき時に於て行動に及ぶことの爲めには、人の言ひ得たであらう如く「爆發」にまで來ることの爲めには、好機會が、また色々の計量すべからざるものが必要である。尋常にしてはそれが起らない。そして地上のあらゆる騷

隅に、ちつとして待つてゐる人々は、如何なる程度まで彼等が待つてゐるかを殆んど知らない。だが、彼等の待つたのが無益であつたことは尙ほ更ら知らないのである。時には又、呼び覺ましの叫びが、行動への『許し』を與へるところのあの機會が餘りにも晩くなつてから来る——その時既に、最善の若しさと行動への力とは靜座の爲めに用ひ盡されてゐる。そして、如何に多くの人々が恰かも「起ち上つた」時、彼等の手足の萎えてゐること、彼等の精神の既に重苦しくなり過ぎてゐることを、愕然として見出したかよ！ 『それは餘りにも晩すぎる』——と言つた彼等は、自分自身を信じなくなつて居り、又今や永久に不用になつて居るのである。天才の領土に於て、『手のないラファエル』(最も廣い意味にとつて)は恐らく例外でなくして、寧ろ通例であらねばならなかつたか？ 恐らく天才は決してそんなに希でない。けれども Kalpos 『宜しき時』を虐壓し終る爲め、機會の前髪をつかまへる爲め必要な五百の手が希なのである！

二七五

ある人間の高所を見たがらない人は、彼に於て低卑であり前景であるところのものを、いよいよ鋭く眺め入り——斯くすることによつて己自らを暴滅する。

二七六

あらゆる種類の傷害損失に於て、低劣粗惡なる魂は高貴なる魂よりも都合がよい。後者の危険は、より大きくあらざるを得ない。加之、その生活條件の複雑さを勘定に入れて見れば、それが不幸になり破滅に陥るであらうといふ蓋然性は巨大である。蜥蜴にあつては、一たび失はれたる指が再び生えて来る。人間にあつてはさう行かない。

二七七

——随分困つた事だ！ 又しても舊い話である！ 人が其家をすつかり築き上げた時、彼は築き始めた前に必ずや知つてゐるべきであつたところの何物かを、思ひもかけず學び知つたことに心付く。この永久の痛ましき『あとの祭り！』あらゆる完成物の憂鬱！

二七八

——彷徨者よ、汝は何人ぞ！ 私は汝が侮蔑なしに、愛なしに、測るべからざる目をもつて汝の道を行くのを見る——充ち足らはずして各の深みから再び明るみへ出て來るところの測深鉛の如く、打

ち濕めりて物悲しげに——それは其處に何を求めたか？——太息つかぬ胸をもつて、その嘔吐感を包みかくすところの唇をもつて、尙ほ徐ろにのみ探り摺むところの手をもつて。汝は何人ぞ？ 汝は何を爲すか？ 汝は此處に休息せよ。此處は各の人に對して懇ろである。汝自らを休養せよ！ そして汝が何人であらうとも、今汝を悦ばすのは何物か？ 何が汝の休養に役立つか？ ねがはくはそれを擧げ示せよ。私が有するほどの物を、私は汝に提供するであらう！ 『休養にとや？ 休養にとや？ おお、汝ものすきなる漢よ、汝はそのところに何を語つてゐるか！ だが私に與へよ、私が乞ひ求めるのは——』何か？ 何か？ はつきりと言へ！ 『今一つ假面を！ 二つ目の假面を一つ！』

二七九

深い悲しみをもつた人々は、彼等が幸福である時自らを暴露する。彼等は嫉妬心から幸福を締めつけて、その息の根を止めてやらうと欲したかの如く、幸福に跳びかゝる罅を有つてゐる。嗚呼彼等は、それが彼等から逃げ去るといふことを、あまりにも善く知り過ぎてゐるのである！

二八〇

「いけない！ いけない！ どうだ？ 彼はあとへ——引くぢやないか？」——然うだ！ けれども

諸君は、そんな事をかれこれと氣に病む時、十分に彼を理解してゐると云はれない。彼は大なる跳躍を爲さんとする各の人間の如く、あとへ引くのだ。

二八一

「人々は私の言を信じないであらうか？ だが私は、人々が私の言を信じてくれることを要望する。私はいつもただ不十分にのみ私自身に對して、私自身の事を考へた。ただ全く希なる場合にのみ、ただ止むを得ずしてのみ、いつも『事物に對する』悦樂なしに、すぐに『私自身』から逸れてしまふべく心構へして、いつも結果に對する信仰なしに——自己認識の可能に對する打ち克ちがたき不信のお蔭で。そして其不信は理論家等が己自らに許すところの『直接認識』といふ概念の中にすらも、1の contra-dictio in adjecto を感ずるほど、それほどのところへ私を連れて行くのである。かうした事實全體は私が私自身について知つてゐる、先づ最も確實な事である。私自らについて何等かの一定した事を信ずるには、私の内に一種の反感がある。そこには事によると一の謎があるのであらうか？ 多分さうだらう。だが、仕合せと私自身の齒の立つ何物でもない。事に依つたらそれは、私の屬してゐる種屬を裏切り示すであらうか？ だが、私にとつて十分願はしいやうに、私自身にまで示すのでない。」

二八二

「しかし、何が汝に起つてゐるのか？」「私は知らない」と彼は躊躇し乍ら言つた。「事によると怪鳥ハルビイが私の食卓の上へ飛んで來たのであらう。——今日でも折々どうかすると、一人の温良な、冷靜な、控へ目な人物が突然狂氣のやうになり、皿を壊したり、食卓を引つくり返したり、叫んだりわめいたりして、あらゆる人々を面喰はせる。そしてお仕舞ひには、恥ぢ入つて、自分自身を怒り憤り乍ら退いて行く。何處へ？ 何の爲めに？ ひとりぼちになつて餓死する爲めか？ 自分の記憶で以て窒息してしまふ爲めか？ 氣高い、好き嫌ひの激しい魂の熱望を有し、ただ希れに彼の食卓が、彼の食事が用意されてゐるのを見出すところの人にまで、危険はつねに大きいであらう。しかし乍ら今日は別して然うなのである。一緒に彼が一大皿から食べることを欲しないやうな、一の騒々しい、賤民的な時代へ投げ込まれて、彼はわけなく飢渴の爲めに、又は結局やはり「さばり附く」ならば、突然なる嘔氣の爲めに死滅してしまふかも分らない。我々は多分いづれも皆、我々の屬してゐなかつたところの食卓に就いてゐた。そして賄ふのに最も面倒な、我々の中の最も精神的な輩こそは、我々の食物及び食卓仲間に対する一の突然なる洞察幻滅から起つて來る、あの危険なる *dyspepsia* を、食後の嘔吐感を知つてゐる。

二八三

人にして苟くも賞讃しようと思ふならば、つねにただ、同意されぬ場合にのみ賞讃するといふのは——他の場合には實に自分自身を賞讃するのだらうが、それは善き趣味に反してゐる——一のデシリケエトな、同時に高貴なる自制である。勿論その自制は、斷えず誤解される爲めに一の立派な機會と動因とを提供する。趣味と道徳との斯うした實際の贅澤を自分自身に許し得る爲めには、人は理智的鈍物共の間に生活すべきでなく、寧ろ其誤解や失策が矢張り其念の入り加減によつて面白がらせるほどの人々の間に生活すべきである。でなかつたら、人はそれを高價に償はざるを得ないであらう！

「彼は私を賞讃する。乃ち彼は私の正當なることを承認するのだ」——斯うした驢馬式の推論は我々隱遁者の半生涯をも駄目にしてくれる。なぜと云つて、それは我々の近所や交友の中へ驢馬を引張り込んで來るのだから。

二八四

一の大なる、自尊に充ちたる沈着さを以て生きて行く。常に超然として……。自分の感情を、自分の去就を随意に有つたり有たなかつたりする。數時間はそれらのものにまで自らを下して見る。馬に

乗る如く、往々にして驢馬に乗る如く、それらのものに乗つて見る。けだし人はそれらのものの火を利用する如く、それらのものの愚劣さをも利用することを知らなければならぬからである。自分の三百の前景を保存する。黒い眼鏡をも。なぜと云つて、何人も我々の目を見入つてはいけないうやうな、それ以上に我々の「動機」を見入つてはいけないうやうな場合があるのだから。そしてかの無頼漢的な快活な不徳を、慇懃を仲間を選ぶ。そして勇氣、洞察、同感、孤獨といふ自分の四の徳を支配しつづけて行く。なぜと云つて、孤獨は我々にあつては、純潔の崇高なる傾向衝動として一の徳なのだから。そしてそれは、人間と人間との接觸に於て、「社交に於て」、いかにそれが避けがたく不潔であらねばならぬかを洞見する。あらゆる社交が如何やうにかして、如何なる處でか、如何なる場合に「凡庸」にするのである。

二八五

最も大なる事件と思想とは——しかし最も大なる思想が最も大なる事件である——最も晩く理解される。それと時を同じうしてゐる世代は此の如き事件を體驗しない。彼等はそれを素通りして行く。そこには星辰の領土に於ける如き何事が起る。最も遠い星の光は最も晩く人間にまで到達する。そしてそれが到達しない前に人間は、其處に星のあることを否定する。「一」の精神が理解せられる爲めに

如何に多くの世紀を必要とするか？——これがまた、精神にも星辰にも必要なやうな等級格式をも、依つて以て作り上げるところの尺度である。

二八六

「此處に眼界が開けて、精神が高められる（譯者註——ゲテの「ファウスト」第二部、第五幕より）——しかし乍ら、それと正反對な種類の人間もあるもので、さう云ふ人は高所にもあり、打開けた眼界を有つてもゐながら、尙ほ且つ下の方を見下ろすのである。

二八七

何が高貴であるか？ 我々にまで今日尙ほ「高貴」といふ言葉は何を意味してゐるか？ 今しも始まりかかつた賤民支配のこの重苦しく垂れ下つた天——それに依つて總ての物が暗く鈍くなる——の下に、如何に高貴なる人間が自らを裏切り示すか？ 如何に認識せられるか？ 彼を證據立てるものは其行動でない。行動は常に曖昧で、常に測定しがたいものだから。それは彼の「業績」でもない。今日人は藝術家等や學者等の間に、如何に高貴なものへの深い渴望が驅り立てるかを、その業績によつて裏切り示してゐる人々の澤山を見出す。しかし乍ら高貴なものへの此需要こそは、高貴な魂その物の

需要と根本的に異つてゐる。而して正しく其缺陷の雄辯にして危険なる特徴である。此場合決定的であり、階級を確立する(一の新しきより、深き意味に於て一の舊き宗教的方式を今一度使用するならば)ところのものは、業績でなくして信仰である。ある高貴なる魂が自分自身について有するところの何等かの根本的な確信である。求められない、見出されない、そして恐らくは又失はれることのない何物かである。高貴なる魂はそれ自らに對する畏敬の念を有つてゐる。

二八八

そこにはどうしても精神を有たざるを得ないやうな人々がある。彼等をして欲するが儘に彼等自身をひねりかわさせ、その手を裏切者のやうな目の前にかざさせて見るがよい(さながら手は何等の裏切者でもなかつたかの如く)。結局はいつでも、彼等がその包みかくすところのもの、即ち精神を有つてゐるといふことになるのである。少くとも出来るだけ久しく欺瞞することの、又實際以上に馬鹿者らしく自らを装ふことの、最も巧緻なる手段の一は(日常生活に於ては往々にして、雨傘同様に願はしき物であるが)、熱狂と呼ばれてゐる——それに屬するところのもの、例へば徳をも包括して、なぜと云つて、それを知つてゐたに違ひないガリアニの言つた通り、徳は狂熱であるから (veru est ent housisume.)

二八九

ある隱遁者の述作の中にはいつでも、荒野の山彦のやうな或るものが、寂寥の嘯き聲と臆病な見張りとのやうな或るものが聞えてゐる。彼の最も力強い言葉から、彼の叫びその物から、やはり一の新しい、危険な種類の沈黙が、緘黙が響いてゐる。年の端から年の端へかけて、晝も夜もただ其魂とのみ、親密なる不和及び對話に於て坐り込んでゐるところの彼は、その洞——それが螺堂であつても、またよく一の金鑛であり得るのだ——の中に穴熊に、又は寶掘りに、又は寶の番人や龍になつたところの彼は……彼の考その物が終に獨得の薄明色を獲る。微の匂だけそれだけ甚だしく深みの匂を、各の通行人を冷く吹き渡るところの或る名状しがたき忌まはしきものを獲る。かの隱遁者は曾つてある哲學者が——ある哲學者にして常に先づ隱遁者であつたとしたら——彼の實際の終局の意見を書物の中に表白したといふことを信じない。書物は我々の内なる物を包みかくす爲めにこそ書かれるのではないか? 否彼は、そもく哲學者が「最終の又實際の」意見なるものを有ち得るや否やを疑ふであらう。彼の内なる各の洞穴の背に、尙ほ一のより、深き洞穴が横つてゐるや否やを、横らざるを得ないや否やを疑ふであらう——一の皮相のあなたに、一のより、包括的な、より、縁遠い、より、豊富な世界が、各の底の背なる、各の「根據」の下なる一の深潭が。いづれの哲學もが一の前景哲學である。これが或

る隠遁者の批判である。「あの哲學者がこゝに立ちとまり、見かへり、見廻はしたといふこと、彼がここにもはやより深く掘らないで、スぺエドをほり出したといふことの中には、何等かの出鱈目なものがある。その中には何等かの猜疑的なものもある。」各の哲學は又一の哲學を包みかくしてゐる。各の意見は又一の潜伏所である。各の言葉は又一の假面である。

二九〇

各の深い思想家は誤解されることよりも理解されることを餘計に恐怖する。後者によつて恐らくは彼の虚栄心が傷けられる。けれども前者によつて、彼の心情が「ああ、何故に汝等は私ほどそれほど苦しきと欲するのか？」と常に言ふところの、彼の同感が惱まされる。

二九一

複雑な、虚言吐きの、巧妙な、そして不透明な生物なる人間は、力によつてよりも學術策謀計によつて他の生物等に氣味悪き人間は、結局彼の魂を單純に享受する爲め善き良心を發明した。そして道德全體は、よつて以て一般に一の享樂が魂のまのあたりにして可能になるところの、一の大膽なる久しき誤魔化しである。この見地からすれば恐らくは、人が普通に信じてゐるよりすつと多くのもの

が「藝術」といふ概念に屬してゐる。

二九二

哲學者とは如何なるものか？ 曰く、彼は絶えず異常なる事物を體驗し、見、聞き、猜疑し、希望し、夢想する。彼は外からの如く、上及び下からの如く、彼一流の事件及び電撃からの如く、彼自身の思想から打たれる。彼自ら恐らくは新しき電光を孕める暴風雨である。宿命的な人間なる彼を取りまいて、つねに怒鳴り聲が、唸り聲が、欠呻が、また氣味悪き何物かが起つてゐる。哲學者は、嗚呼、屢々自分自身から走り去るところの、屢々自分自身に對して恐怖を感じるころの生物である——しかし乍ら彼は又しても「自分自身へ歸」らずにゐられないほど、それほど強い好奇心をもつてゐる。

二九三

「それは私の心に適つてゐる。それを私は私自身の物とし、それを保護し、各人から防衛してやらうと思ふ」と言ふところの人は、一の事柄を處理し、一の決定を遂行し、一の思想を恪守し、一人の婦人を保持し、一人の無法者を處罰し壓伏するころの人は、彼の憤と彼の劍とを有するころの、そして弱い者、苦しんでゐる者、虐げられてゐる者が、禽獸すらもがよろこんで歸服し、自らにして附屬

するところの人は。一口に云ふと、自らにして君主であるところの人は。かくの如き人にして同情を有するならば、さうだ！ その同情には價值がある！ しかし乍ら、苦しみ惱める人間の同情が何だ！ 或は、同情を説法する人間が何だ！ 今日では歐羅巴の殆んど到處に、苦痛に對する病的な多感性と興奮性がある。同じく愚痴をこぼすことに於ける厭はしき意氣地なさがある。宗教や哲學的ながら、くたで以て何等かより高尚なものを自らを飾り立てたがつてゐるところの柔弱化がある。そこには苦惱の正式な禮拜がある。かくの如き狂熱者仲間から「同情」と呼ばれてゐるところのものめめしさは私と思ふに、いつでも最も先づ目につくところのものである。人はかうした新しい種類の惡趣味を、力強く徹底的に破門放逐してしまはなければならぬ。そして最後に私は、人々がそれに對する惡魔除けの御守として“gai saber”（解り易く言へば「悦ばしき智識」）を、胸や頭のまはりにかけてくれることを願望する。

二九四

オ・リ・ム・プ・ス・風・の・不・行・儀。——純粹の英吉利人としてあらゆる思想家の間に笑を不評判なものにしよ
うと努めたところのあの哲學者に反抗して——「笑は各の思想家が克服すべく努力するであらうとこ
ろの、人間性情の忌まはしき弱點である」(ホプス)——私は哲學者等の等級が彼等の笑の階級によつ

てきまる(上は黄金の笑をよくするところの者に至るまで)とさへも言ふであらう。そして神々も哲學
を立する(いろいろの理由が私にさう信じさせてゐるのだ)としたならば、私は彼等もその場合一の超
人的な新しい仕方で笑ひ、又あらゆる嚴肅な事物を犠牲にしても笑ふことを心得てゐるのを疑はな
い！ 神々はじやうだん好きである。彼等は神聖なる行動に際してすらも笑ひを休め得ないやうに思
はれる。

二九五

かの大なる神祕的なる者が有つてゐる如き心情の天才！ 彼の、試練者であり、生れながらの良心
の捕鼠者であるところの彼の聲は、各の魂の下界にまで降り行くことが出来る。彼は誘惑の何等かの
顧慮及び折目のないやうな一語をも吐かず、一瞥をも投げない。彼が如何にして現はれる——あるが
儘の彼としてでなく、寧ろ彼に付き従ふ者等にとつて、いよいよ近く彼に押し寄せるべき、いよいよ
親密に徹底的に彼に付き従ふべき、今一の拘束であるところのものとして——べきかを知つてゐるの
は、彼の完成圓熟による事である。心情の天才！ それは總ての聲高きもの已惚強きものを黙らせ、
傾聴することを教へる。それは荒々しき魂を和らげ、その新しき願望を——深き天がその上に反映す
るやう、靜かに鏡の如くして横らうといふ——を味はせる。心情の天才！ それは無骨な性急な手に

躊躇してより、やさしく掴むことを教へる。それは置かれたる忘れられたる寶を、温情と甘き精神性との滴を暗鬱な厚い氷の下に付度し、又夥しき泥や砂に久しい間埋れてゐた金の一粒々々を吸ひ出すところの魔杖である。心情の天才！ それとの接觸から各の人はより、豊富になつて去る——恵まれないで、或は驚かされて、見知らぬ温情から幸福にされ、抑へ付けられたかのやうにでなく、寧ろ自分自身の上により、豊富になり、前よりも新しくなり、打ち壊されて、融風に吹きさらされ、吹きまくられて、恐らくはより、不確實に、より、かよわく、より、脆く、より、打ち砕かれて、しかし乍ら尙ほ如何なる名をも有たない希望に充ちて、新しき意志と流れとに充ちて、新しき反意志と逆流とに充ちて……だが、私の友人等よ、私は何をしてゐるのか？ 私は諸君にまで誰の事を話してゐるのか？ 私は彼の名前をも挙げなかつたほど、私自身を忘れてゐたのか？ かくの如き仕方では、賞讃されたいとねがふ、あの疑はしき精神と神との何者であるかを、汝等にして汝等自ら既に付度しなかつたのであつたらば。なぜと云つて、子供の時分から歩き廻つたり、外國にゐたりした各の人にまで起る如く、私も亦途上に於て多くの奇異なる危険なる精神と出會つた。だが特に、さきほど私の話した精神に幾度となく出會つた。乃ち、他ならぬディオニソスの神に出會つたのだ。諸君も知つてゐる通り、私が曾つてあらゆる親密さと畏敬とを以て私の初兒をささげたところの、あの偉大なる曖昧者、誘惑者の神である（私の見るところを以てすれば、私は彼に犠牲をささげたところの最終の人間だ。なぜと云つて、

私は私が其時爲したところの物を理解したただ一人をも見出さなかつたから）だが其間に私は、この神の哲學について多くを、餘りに多くを學び知つた。そして前述の如く、口から口へ——ディオニソスの神の最終の使徒であり氏子であるところの私は、多分私は私に許されてゐる限り、私の友人なる諸君に少しばかり、此哲學を味はせることを愈々始めても構はないではあるまいか？ 當然の事ながら低い聲で以て！ なぜと云つて、その場合さまざまに内密なもの、新しいもの、見知らぬもの、奇異なるもの、無氣味なるものが問題になるのだから。ディオニソスが哲學者であるといふこと、従つて神々も哲學を立するといふことすらも私には、人を迷はせないでもない一の新規な事であり、恐らくは丁度哲學者等の間に不信の心を起したかも知れないやうに見える——私の友人等よ、諸君の間にはあの新規な事が一層否定されないのだ。そして單だそれが餘りに晩く、時機を失して來るといふだけである。なぜと云つて私にまで暴露されてゐる如く、諸君は今日神と神々とを信じたがらないから。更に私は私の物語の正直さに於て、諸君の耳の厳格な習慣にやつぱり快く受取られるより、遙かにむかひまで行かねばならないかも知れない。固より右の神はさうした對話に際してより、遠く、すつとより遠く行つた。そして常に多くの足數を私に先んじてゐた……否私は、それが許されてゐたならば、人間の習慣に従つて立派な嚴かな裝飾的稱號を彼に附與したであらう。研究家發見家としての彼の勇氣を、彼の思ひ切つた正直、誠實、及び睿智への愛を頌揚しなければならなかつたであらう。しか

し乍ら此の如き神は總てのかうした尊敬すべき見掛しを何に役立ててよいかを知らない。「これをしまつて置け」と彼は言つたであらう、「汝自ら及び汝と同じ人々の爲めに、又誰にてもあれをそれを必要とするやうな人々の爲めに！ 私は、私の赤裸々を包みかくすべき何等の理由を有たないのだ！」人は、かうした種類の神や哲學者に、事によつたら羞恥が缺けてゐるのかしらと思ふ。彼は曾つて言つた、「ある情況の下に私は人間を愛する」と。そしてそれに依つて居合はせたところのアリアド、ネの事を暗示した、「私の考によると人間は一の愉快な勇敢な獨創的な生物であつて、地上にその類がない。彼はあらゆる迷路の中をも切りぬけて行く。私は人間を好きだ。そして屢々私は、如何にして彼を更に進歩させ、今より一層より強く、より意地悪く、より深くしてやるべきかを考へる。」「より強く、より意地悪く、より深く」と私は驚いて尋ねた。「さうだ」と彼は今一度言つた、「より強く、より意地悪く、より深く。且つ又より美しく。」斯う言ひながら誘惑者の神は彼の靜謐なる微笑を以て微笑した——さながら彼が魅力あるお愛想をでも言つたかの如く。この場合直に人は、この神に缺けてゐるのが羞恥心だけでないことを知る。そして一體に、ある事物に於ては神々がいづれも我々人間の處で修業し得たことを推定すべく、そこには十分の理由がある。我々人間は、より人間的なのだから……

二九六

嗚呼！ 私の書かれたる、又畫かれたる思想よ、汝等は畢竟何であるか！ あまり久しからぬ以前に於て、汝等はまだ私をして、くさめをさせたり笑はせたりするほど、それほどけばばしく、若々しく、意地悪く、刺や秘密の藥味に充ちてゐた——そして今は？ 汝等は既に汝等の新しさをぬき去つた。汝等の中なる或る者等は、眞實になりかかつてゐるかも知れない。彼等はそれほど不死に見え、それほど痛々しく正直に見え、それほど退屈なものに見える！ そして曾つてさうでなかつたか？ そもそも我々は如何なる事を書き且つ畫くか、我々支那筆をもてる官人は、我々自らを書かせる事物の不朽化者等は、そもそも我々は何物だけを畫き得るのか？ 嗚呼、つねに單だ、正に凋萎せんとしてゐる、匂を失ひはじめてゐるところのものだけである！ 嗚呼、つねに單だ、荒れ盡して治まりかかつた暴風雨と、黄色く枯れ残つた感情だけである！ 嗚呼、つねに單だ、飛び勞れ翔び迷つたところの、そして今や手で以て、我々の手で以てつかまへられるところの鳥だけである！ 我々は、もはや生き且つ飛ぶことの出来ないもの、疲勞し爛熟した事物をのみ不朽にする！ そして單だ汝等の午後に對してのみ、汝等私の書かれたる、又畫かれたる思想よ、それに對してのみ私は色を、事によつたら多くの色を、多くの變化に富んだ濃淡と、五十種の黄と、褐色と、緑色と、赤とを有つてゐる。しかし乍ら何人も私に裏切り知らさない——如何に汝等が汝等の午前中に於て見えるかを、汝等私の寂寥の突然なる火花と驚異とが、汝等私のふるい馴染の……人惡き思想が！

高山の巔より
後曲

高山の巔より

—後曲—

* * *

嗚呼、生の正午。壯嚴なる時。

嗚呼、夏の園。

立ちつゝつ、心もそらに我は、

晝夜を分たず友を待てるに、

友よ、汝等は何處に留まれる。時はよし。

汝等の爲め氷山の灰色も、今日は

薔薇もて飾られたらずや。

汝等を小川は待ちさがし、風も雲も

いや高く濃き青に憧れ走る、

目路の果てより汝等を捜し出すべく。

山頂にして、汝等の爲め我が卓は装はれぬ。

何人か斯くも星近く、

深潭のいと恐ろしき遠方には住める。

我が領土——如何なる領土かより、廣き。

借て我が晝は——誰か味ひし。

友等よ、汝等は其處にあり！ されど、

汝等の求むるものにて我はあらざるか。

汝等は呆然としてたたずめり。嗚呼、寧ろ怒罵せよかし。」

我ははやそれにてあらぬか——手も歩調も姿も變りて。

借て我は何物ぞ、汝等友よ、今我は、

他なる者となりしか、我は、我自らの他なるものと。

尙ほ且つ我自らより生れしものと。

あまりにも屢々自らに打ち克たるる角力者と。

あまりにも屢々自己の力とあらがひ、

自らの勝利によりて傷けられ阻まれて。

我は風のいと鋭く吹ける處を求めしか。

我は住むことを學びしか——

如何なる人も住まぬ、荒涼たる北極圏に。

人と神と、呪ひと祈りとを忘れしか。

氷山の上を行く幽霊となりしか。

汝等舊き友等よ。見よ。今汝等は蒼白めり、

愛と恐れとに充ちみちて。

去れ。怒らざれ。此處に、汝等は止まるを得じ。

いと遠き氷と岩との間なる此處に。

此處に人は獵人となり、羚羊の如くしてあるべきなれば。

人惡き獵人と我はなりしか。見よ、我が弓の

如何に鋭しく張られたるかを。

斯かる箭を番ひしはいと強き者ぞ。

如何なる箭にもまさりて危きは、嗚呼、

この箭ぞ。疾く去れ。汝等につづかなからむ爲め。

汝等は去りしか——嗚呼心情よ、汝の堪へしこと足れり。

汝の希望は強さを失はざりき。

新しき友等の爲めに汝の扉を開け。

舊き者等を逐へ。追憶をして去らしめよ。

會つて汝は若かりき。今若からば更に善し。

かつて我等を結び合はせしもの、一の望の紐は——

(その昔「愛」の書き入れし

標徴を、色あせしかの文字を今誰かは讀まむ。)

手も捕ふるにためらふ羊皮紙に似て、

その如く古ぼけ、その如く乾からびたり。

もはや友等にもあらぬそれを、何とか名くべき。

單だ友等の幽霊のみ。

そは尙ほ夜毎に我が胸の窓を叩き、

我を見据ゑつつも言ふ、「曾つて我等は」と。

嗚呼、そのむかし薇薔の如く匂ひし凋びし言葉よ。

嗚呼、自らを誤解せし年少時の憧憬よ。

そを我はあこがれ求めき。

そを我は我自らに絡まりて變りしと思ひき。

されど彼等は老い衰ふるべく定められたりき。

ただ自らを變ふる者のみ我が族なり。

嗚呼、生の正午。第二の青春期。

嗚呼、夏の園。

立ちつゝつ、心もそらに我は、

晝夜を分たず友を待てるに、

新しき友等よ。いざ。時はよし。

*

*

*

此歌は終れり。憧憬の甘き叫びは

その結末に及びたり。

それをなししは或る妖術者、宜しき時の友、

正午時の友——否、何人なるかを問ふ勿れ。

正午時の事なりき、一のもの二となりしは。

一になりし勝利を確信して我等は祝ふ、

祝祭の中なる祝祭を。

わが友ツラトッストラ、客人の中なる客人は來ぬ。

今ぞ世界は笑ふ、恐ろしき帳は裂けて、

高山の園より

光と闇との爲めに結婚式の來りしなれば。

* * * * *

フリードリッヒ・ニイチェ

道徳系譜學

——の論駁書——

緒言

我々は我々に、我々認識する者等は、我々自身は我々自身に知られてゐない、それにはそれ自らの善き理由がある。我々は我々自らを探し求めたことがない。さらば我々が曾つて我々自身を見出すといふことは、如何にして起り得たか？『汝等の寶のある處に、汝等の心もまたあるべし』と言はれてゐるのは正しい。我々の寶は、我々の認識の蜂の巢のかけられてゐるところにあるのである。我々はつねにそれらの蜂の巢を求めて行く途中にゐる。生れつゝいたる飛び蟲として、また精神の蜂蜜を集めるものとして、我々は衷心から實際にただ一の事を——何等かの物を『持ち歸る』ことをのみ念頭に置く。爾餘の生活に、その所謂『經驗』について云へば、我々の中の誰がそれに對する十分な眞面目さだけをでも有つてゐるか？ 或は十分な時間だけをでも有つてゐるか？ 斯うした事柄に關しては、我々は本當に其『事』に當つたことがないかも知らない。我々は嚴密に其處に心を置いてゐない。そして我々の耳をさへも！ 寧ろあだかも、神聖なる放心に、又自分自身に沈み込んでゐる人間の耳へ、時

計がその全力を擧げて正午の十二を鳴り轟かした時、彼が忽ち目を覺まし、「あれは今しも何を打ち知らせたのか？」と自ら問ひ尋ねる如く、その如く我々も亦折々あとで耳をこすり乍ら、全き驚きと當惑との中に問ひ尋ねる、「今我々は本當に何を経験したのか？」と。更に、「我々は本當に何人であるか？」と。そして前述の如く、あとから我々の経験の、我々の生活の、我々の存在の時計の十二の鼓動のこらすを數へて見る。嗚呼！そして其時我々は數へあやまるのである。我々はどうしても我々自身にまで他人でなくならない。我々是我々自身を理解しない。我々是我々自身を穿き違へざるを得ない。我々には未來永劫、「各人は自分自身にまで最も遠い」といふ格言があてはまるのだ。我々自身に關しては、我々は何等の「認識する者」でもないのだ……

二

我々の道徳的先入見の由來に關する私の思想は——それがこの論駁書に於ける肝要事なのだから——其最初の、つづまやかな、豫備的な表白を、「人間的な、あまりに人間的な。自由な精神の爲めの書物」と題したるあの箴言集の中になしてゐる。そしてあれを書く仕事は、それまで私の精神が彷徨ひ歩いてゐたあの廣やかな危険な土地に、彷徨者の立ちとまる如く立ちとまり、それを見渡すことを私に許してくれたところの或る冬の間にて、ソレントに於て始められた。それは一八七六年より七七年

へかけての冬の間であつた。思想その物はより、ふるい。それは實質に於ては既に、私が次ぎの論説に於て再び取り上げるところのものと同じ思想であつた。我々は久しい中間期がそれに役立つたことを、それがより圓熟した、より明晰な、より強烈な、より完全なものになつてゐることを希望する。しかし乍ら私が今日尙ほそれに執着してゐるといふこと、それが其間に愈々より緊く結合して、否、互に根を下ろし合ひ、枝を絡ませ合つてゐるといふことは、私の心の内に愉快なる自信を強めてくれる。即ち、それらの思想はもともと別々に、出鱈目に、ばらばらに生じたのでなく、寧ろ一の共通な根から、魂の奥底にまで届いてゐる、いよいよはつきりと言ふところの、いよいよはつきりしたものを願望するところの、認識の根本意志から出て來たかも知れなかつた。そしてかくの如きものが、ある哲學者の場合にふさはしき唯一の事情なのである。我々は何等かの點に於てばらばらであるべき權利を有しない。我々はばらばらになつて迷ひ歩いても、ばらばらになつて眞實に射中てることをも許されない。一の樹が其實を結ぶ場合の必然さを以て、我々から我々の思想は、我々の價値は、我々の「然り」や、「否」や、「若しも」や、「いづれか」やは——互に絡み合ひ結び合つて、又一の意志の、一の健康の、一の土地の、一の太陽の證人として成長して來る。それらのものが、我々の果實が諸君の口に合ふかどうか？ しかし、それが樹木にとつて何であらう！それが我々にとつて、我々哲學者等にとつて何であらう！

私がいやいやながら告白するところの、私に特有な一の氣遣はしさに（それは道徳に關してゐる、これまで道徳として地上に崇められ來つてゐるところの一切の物に關してゐる）に依つて、私の生涯に於て左様に夙くから、左様に自發的に、左様に抑制しがたく、左様に周圍や、年代や、先例や、系統に逆行して現れる（私が殆んど、それを私の "A priori" と呼んで構はないほど）ところの一の氣遣はしさに依つて、私の好奇心並びに私の猜疑心は折々、我々の「善良と邪惡」とが實際如何なる起源を有するかといふ問題の前に、立ち停まつて見なければならなかつた。全くのところ十三歳といふ少年時代に於て既に「邪惡」の起源の問題は私の念頭を去來した。「胸の内に半ば遊戯を、半ば神様を」有つてゐる時代に於て私は、右の問題にまで私の最初の文學的遊戯を、私の最初の哲學的演習をささげたのである。そして私の當時「解決」について云へば、乃ち私は當然の事乍ら神に名譽を與へて、彼を「邪惡」の父となした。私の "A priori" が丁度そのやうな事を私から要求したのであるか？ あの新しい反道徳的な、少くとも不道徳的な "A priori" が、又その聲であつたところの、殘念乍ら隨分反カン卜的な、隨分多くの問題を含んだ「直言命令」が（その後私がいよいよ多くの注意を、注意以上の物をさへささげたところの）、その事を要求したのであるか？ 幸にもやがて私は神學的先入見を道徳的先

入見から差別することを學び知つた。そしてもはや邪惡の起源を世界のかなたに探し求めることをしなかつた。一體に心理學的な問題に關する生得の優秀なる能力を度外に置いて、若干の歴史的文學的修養は、まもなく私の問題を別の物に造りかへた。曰く、如何なる條件の下に人間は「善良と邪惡」といふあの價值判斷を彼自らの爲めに發明したのであるか？ 又如何なる價值をそれらの物自らが有つてゐるか？ それらの物はこれまで人類の福祉を阻害したか？ 是れをささげたか？ それらの物は困厄の、貧弱の、生の頹敗の徴候であるか？ 或は反對に、それらの物の中に生の充實が、力が、意志が、其勇氣が、其自信が、其將來が暴露されてゐるか？ この點に關して私は心の中に多趣多様な解答を見出し且つ敢てした。私は時代を、民族を、個人の階級を差別した。私は私の問題を専門化した。私の解答からは新しい疑問や、探究や、推定や、蓋然性やが生じて來た。そして終に私は私自身の一の土地を、私自身の一の地盤を、内密の、成長し、花咲くところの一の世界を、謂はば、何人も豫覺し得なかつたやうな隠れたる花園を有するに至つた……お、如何に我々は、我々認識する者は幸福であるかよ——我々にして十分に久しく沈黙することをさへ知つてゐるならば！

四

道徳の起源に關する私の假説のどれだけかを公表しようといふ第一の衝動を、明晰な、すつきりし

た、小氣の利いた、小生意氣な位の一小著が私に與へてくれた。その中には、一の正反對な間違つた、諸君の本當に英吉利的（英吉利的）な種類の系譜學的假説が、はじめて明白に私の前へ立ち現れた。そしてそれが私の心を惹きつけた——總ての正反對なもの、總ての對蹠人的なものが有するところのあの魅力で以て。右の小著の標題は「道德的感情の起源」といふのであつた。その著者は博士パウ・レエで、その現れたのは一八七七年。恐らくはあの書物に於けるほど、命題毎に、結論毎に私が否定したやうな、そんな書物を私はかつて讀まなかつたであらう。もつとも其否定には格別の不機嫌（不機嫌）や苛立（苛立）たしさも伴はなかつたのだけれど。その頃私が書いてゐた従前の述作に於て、私は折善く又折悪しく、あの書物の色々の文句に言及した。それは私がそれらの物を駁撃する爲めでなかつた（單に駁撃して見たところでは何にならうぞ！）。むしろ一の積極的な精神にふさはしい事である如く、もつともらしからぬ物の代りにもつともらしき物を置き、たまには一の誤謬の代りに他の誤謬を置くためだつた。前に言つた通り、其頃私は、これらの論説がさげられてゐるところのあの起源論をはじめて公表したのだけれど、その不手際なことは最もよく私自身に知れてゐた。なにしろまだ一本立ちもむつかしく、此等の特殊なる事項に對する特殊なる言葉もなく、そしてさまざま（さまざま）な再發（再發）や動搖をもつてゐただけだから。細目に亘つて云へば、私が「人間的な、餘りに人間的な」上巻に於て、「善良」と「邪惡」との二重の前歴史（即ち、貴族の階級及び奴隷の階級からの）について言つてゐるところのもの——箴言四五——を比

較して見よ。同じく禁慾道德の價值及び起源に關する箴言一三六以下を。同じくかの、利他主義的倫理（その中に博士レエは總ての英吉利の道德系譜學者と同様倫理上の「ディング・アン・ジッヒ」を見てゐるのだが）とまるつきり別な、すつとより古い、より根本的な種類の道德、即ち「風習の道義」に關する箴言九六、九九、下巻箴言八九を。最後に箴言九二を。同じく、ほぼ平等な權力をもつた人間の間の平衡（あらゆる契約の、従つてあらゆる法律の前提としての均勢）としての正義の起源に關する「人間的な、餘りに人間的な」下巻第二部箴言二六、「黎明」箴言一一二を比較して見よ。同じく、刑罰起源に關しては「人間的な、餘りに人間的な」下巻第二部箴言二二、二三を参照せよ。刑罰に對しては、虐壓的な目的は本質的でも根原的でもない（博士レエの謂ふ如く。それは寧ろ、一定の情況の下に、又常に一の附録として、何等かの追加物として刑罰の内へ持ち込まれるにすぎないのだ）。

五

實際あの時分には、道德の起源に關する私自身の、もしくは他人の假定説よりも、すつとより重要な何物かが私の心を占めてゐた（或は一層正確に云へば、後者はそれが多くの手段の中の一をなしてゐるやうな一の目的の爲めばかりに）。私にとつて大切なのは道德の價值であつた。そして其事について私は殆んど單だ私の大なる教師シ・オ・ベン・ハウエルとのみ協商したければならなかつた。そして一

人の現存者への如く彼にまで、あの書物の熱情と内密の矛盾とは向けられた。(なぜと云つて、あの書物も亦一の論駁書であつたから)。争點は妙な事乍ら「反利己的な」本能の、同情の、自己否定の、自己犠牲の本能の價值如何にあつた。右の本能こそはシ・オ・ペンハウエルから随分久しく鍍金され、神聖化され、超現實化された爲め、遂には彼にまで「價值」自體——それを根柢として彼は人生へも、彼自身へも否定を言つたのだ——と見えて來たところのものである。しかし乍ら丁度此本能に反對して私の内部から一の愈々根本的な猜疑が、一の愈々掘り下げられたる懷疑が物言ひ出した！丁度此處に私は人類の大なる危険を、彼等の最も崇高なる誘惑を見た。だが、何への誘惑か？ 虚無への誘惑か？ 丁度此處に私は結末の發端を、停止を、回顧するところの疲勞を、生命に逆行する意志を、弱々しくメランコリッシュに自らを告げ知らして來るところの最後の病氣を見た。私は哲學者等にすらとり附いて病氣にするところの愈々蔓延し行く同情道徳が、我々の物凄くなつた歐羅巴文明の最も物凄しい徴候であり、一の新しき佛教への？ 一の歐洲佛教への？ 虚無主義への？ 其の迂路であることを理解した……同情に對する近代哲學者等のかうした特別扱ひと過重とは、全く一の新しい現象である。同情の無價值といふことについては、これまで哲學者等はその見るところを一にしてゐた。私はただプラトオと、スピノオザと、ラ・ロッシュフオオと、カントとだけを擧げよう。この四人は互に異り得る限り異つてゐたけれど、一の事に於て同じであつた——即ち、同情を輕視するといふ點に於て。

六

同情及び同情道徳の價值の問題は(私は恥づべき感情の近代的柔弱化の敵對者である)初めにはただ何等かの孤立したもの、それ自らに對する一の疑問記號たるにすぎない。けれども一たび此問題の前に立ちとまり、如何に問ひ尋ねべきかを學び、知るところの人は、私の經驗したことを經驗するであらう。一の眺望が彼の前に展開し、一の可能性が眩暈の如く彼を捕へ、あらゆる種類の不信が、猜疑が、恐怖が湧き上り、道徳に對する、總ての道徳に對する信仰が動搖し、終に一の新しき要求が聞えて來る。我々はそれを、その新しき要求を言明しよう。我々は道徳的諸價值の一批判を必要としてゐる。此等の諸價值の價值はそれ自ら一たびは疑問の中に置かれねばならぬ。そして此目的に對しては、それらの諸價值が成長し、發展し、偏曲して來た(結果としての、徴候としての、假面としての、偽善主義としての、疾病としての、誤解としての道徳である。けれども又、原因としての、治療法としての、刺戟劑としての、障害としての、毒藥としての道徳でもある)ところの條件や事情の知識を必要とする。特にさうした知識がこれまで存在してもゐなかつたし、單に熱望されてだけでもゐなかつたのだから。此等の「價值」の價值は一定したものととして、すべての疑問を超越した、争ふべからざる事

實として取られた。これまで何人も「善良」な人間が「邪惡」な人間より高い價值をもつてゐると判断し、一般に人類の進歩、功利、繁榮（人類の將來といふことをも念頭に置いて）に關して、一層高い價值をもつてゐると判断する上に、聊かの疑惑動搖をも感じなかつたのである。どうであらう？ 眞實がその反對であつたとしたならば！ どうであらう？ 「善良」な人間の中にも、後戻りの一の徴候がひそんでゐたならば、同じく又、現在がよつて以て將來を犠牲にして生きたやうな一の危險が、一の誘惑が、一の毒藥が、一の痲醉劑がひそんでゐたならば！ 恐らくはより、安樂に、より、無事に、けれども又より、つまらなく、より、低劣に！……其結果、人類のあり得べき最高の力強さと華々しさとがつひに到達されない時、丁度かの道徳が其責めを負はれたとしたならば！ 丁度かの道徳が諸の危險の中なる危險であつたとしたならば！

七

兎に角、此眺望が私の前に展開した後、私自身は博學な、勇敢な、勤勉な仲間を捜し求めるべき理由をもつた（私は今日でもその事をやつてゐるのだが）。それは聲高き新しき質疑を、並びに新しき眼を携へて道徳の——本當に存在したところの、本當に生きたところの道徳の——巨大なる、遙かなる、また全く包みかくされたる國土へ旅行することを意味してゐる。そしてこれは殆んど此國土をはじめ

て發見するにひとしいではなからうか？……此際もしも私が他の人々と共に上掲の博士レエへ考へ及んだならば、それはほかでもない。私は彼が其問題の性質上、彼の解答を獲る爲めにより、正しい方法に倚頼すべく餘儀なくされたであらうことを、聊かも疑はなかつたからである。この點に於て私は自身を欺いたであらうか？ いつでも私の願望は、あんなにも鋭く、あんなにも偏らない目にまで一のより、善き方向を、實際の道徳史への方向を與へること、及び斯うした空虚な、英吉利的假定説に對して、まだ間に合ふ内に彼を警戒してやることであつた。道徳系譜學に對して如何なる色が丁度青より百倍も重要であらねばならぬかは明白である。例へば灰色は信憑すべきもの、實際に確認し得べきもの、實際に存在したものである。換言すれば人間道徳の過去の久しき、讀み取りにくき象形文字全體である！ これが博士レエにまで知られないでゐた。けれども彼はダアキンを讀んでゐた。されば彼の假定説の中には、ダアキン風な禽獸と「もはや咬みつかない」最も近代的な、生眞面目な道徳上のや、さ男とが、少くとも樂みになるやうな仕方ではて慇懃に手を握り合ふ。その際後者は悲觀と疲勞との一粒がまじつたやうな或る人の善げな、リフインされた懦弱の表情を面にはしてゐる。あだかも總ての斯うした事物を、道徳の問題をそんなに眞面目にとるのが、本當に何の甲斐もない事でもあつたかの如く。ところで私には、眞面目にとつて一層甲斐のあつたやうな、全く何物もないと思はれるのだ。その報酬の一部分は、例へば、人が他日事によつたらそれらの物を陽氣に扱ふべき許しを獲る

といふことの如きである。全くのところ此陽氣さは、私の言葉遣ひで云ふならば、この悦ばしき智識は一の報酬である。勿論多數人の場合ならぬ、一の長き、勇敢なる、勤勉なる、そして地に潜んでゐるところの嚴肅さに對する一の報酬である。しかし乍ら我々が張ち切れるやうな胸からして、「進め！我々の舊道徳も喜劇に適してゐる！」と言ふ日になれば、「魂の運命」といふディオニソスの戯曲に對して一の新しき結構と可能性とを發見したであらう。そして彼は直ぐにそれを利用するであらう（それには賭をしてもいい）——彼は、我々の生存の大なる古い永久の喜劇詩人は！

八

よし此述作が誰かに解りにくく、そしてうまく耳へはいらないとしても、私はそれが必ずしも私の責任であると思はない。私の假定する假定からすれば、人が先づ私の從來の述作を讀んでゐるといふこと、それに際して若干の骨折りを惜まなかつたといふことは、かなり明白である。それらの私の述作は全くのところ近づき易くない。例へば私の「ツラトストラ」に關して云ふと、何人にもせよ、あの言葉の一つひとつから何時か深く傷けられ、また何時か深く魅し去られなかつた限り、その人を私はあれの精通者として許さないのである。乃ち右の如き經驗をした時にのみ彼は、あの作品を生み出した翡翠的元素に、その日當りよき明るさ、遙けさ、廣さ、並びにたしかさに恭しく分前を取ること

との特權を享受し得るのだ。他の場合にあつては箴言的形式が困難を生ずる。それは此形式が今日あまりにお手軽に扱はれてゐるからである。正當に鑄固められた一の箴言は、即座に讀み破られ、讀みほぐされるべきものでない。寧ろ人はその時先づその解明をはじめなければならぬ。そしてその爲めに解明の技術が必要である。この書物の第三の論文に於て私は、かの提出されたもののかくの如き場合私が「解明」と呼ぶところのものの一の雛形をもつてゐる。あの論文の劈頭には一の箴言が置かれてゐる。論文その物は右の箴言の註釋である。固よりさう云ふ具合に技術としての讀書を行ふ爲めには、今日最も酷だしく忘れられてゐる（それ故、私の述作が「讀める」やうになるのにまだまだ年月を要するのだ）ところの一の事が、何よりもまさつて必要である。その事の爲めに人は殆んど牛であらねばならず、又絶對に「近代人」であつてはならぬ。その事とは何であるか？ 曰く、反芻すること！

一八八七年七月

オオベルエンガディンなるシルス・マリイアに於て

第一論文 「善良と邪悪と」、「良好と劣悪と」

道徳の起源史に到達しようといふ企てに對して感謝されるべき。今日までのところ唯一の人達である。それらの英吉利の心理學者は、彼等は彼等自身を以て決して小さからぬ謎を我々へ提出してゐる。その上忌憚なく云へば、彼等は丁度その事以て、生きた謎として、彼等の書物より先きに立つた何等かの本質的なものを有つてゐる——彼等はそれ自らに興味あるものである！ これらの英吉利の心理學者は、彼等は本當に何を欲してゐるのか？ 故意にもせよ、故意でないにもせよ、つねに彼等は同一の仕事に従つてゐる。換言すれば我々の内部世界の *Patrie honteuse* (ひそやかな部分) を前景の方へ押し出すといふこと、及び人間の理智的自尊心がそれを見出すに最も氣乗りのしないやうな丁度其部分に於て(例へば、習慣の *vis inertiae*——死重又は重荷に於て、或は忘れつぼさに於て、或は盲目的、偶然的な觀念結合及び機構に於て、或は何等かの純粹に受動的なもの、自働的なもの、反射的なもの、分子的なもの、及び根本的に愚劣なものに於て)、本當に有効な、指導的な、發展を決定するところの原理を捜し求めるといふことである。丁度この方向に於て全く常に此等の心理學者を驅り立てるところのものは何か？ それは陰險な、兇惡な、卑俗な、自分自身にも恐らく不可解なやうな、人間の矮小化の本能ではないか？ 或は事によつたら一の悲觀主義的な猜疑心ではないか、幻滅して、

陰鬱に、毒々しく緑になつた理想家等の不信ではないか？ 或は事によると一たびも識閥を越えたことのない、基督教(及びプラトオ)に對する小さな識閥下の敵意と怨恨とではないか？ 或は加之、生存の奇怪なもの、痛ましく逆説的なもの、いかがはしき馬鹿馬鹿しきものに對する淫逸なる趣味ではなかつたか？ 或は最後に、あらゆる物のどれだけか、即ち少しばかりの卑俗さと、少しばかりの陰鬱と、少しばかりの反基督教主義と、少しばかりの胡椒に對する慾望とではなかつたか？……だが私の聞いてゐるところでは、それは單に老いたる冷き退屈な蛙の事にすぎない——あたかも彼等が其處を得たかの如く、換言すれば一の沼の中にゐたかの如くして、人間のまはりに、人間の内に匂ひ歩いたり跳び歩いたりするといふのは。私は其話を受けつけない。否、私はそれを信じないのである。そして知り得ない場合にも願望することを許されるものならば、私は衷心からして願望する——正反對な比喩が彼等に當てはまり得たことを。此等の魂の探求者顯微鏡使用者が實際に勇敢な、豪氣な、尊大な生物であつて、彼等の心情並びに彼等の苦痛を抑制することを知つて居り、そしてあらゆる願はしき物を眞實の爲めに、各の眞實の爲めに、露骨な、粗暴な、醜惡な、忌まはしき、非基督教的な、反道徳的な眞實(なぜと云つて、さうした眞實もあるのだから)の爲めにさへも犠牲にすべく、自ら教育したであらうことを。

二

さらば、此等の道徳史家の中に勢力をふるひたがるであらうやうな善き精神にまであらゆる敬意を拂へ！けれども固より、彼等に歴史的精神その物の缺けてゐるのは、彼等が丁度歴史のあらゆる善き精神その物から全く見棄てられてゐるのは残念である！彼等はいづれも皆、いつでも舊式な哲學者等のやる通り、全然反歴史的に思想する。それには何等の疑をも容れない。彼等の道徳系譜學に於ける拙劣さ加減は、「善」といふ概念及び判断の起源をたしかめることが問題になるとき、初めからして直ぐに明らかになる。「人は本來」と彼等が宣明する、「非利己的な行動が示される」ところの、従つて有用になるところの人々の側からして、その非利己的な行動を賞讃し、そして善であると言つたものである。あとで人はかうした賞讃の起源を忘れてしまつた。そして非利己的な行動は單に、それらのものが習慣的にいつも善しとして賞讃された爲めばかりに、更に善として感じられるやうになつた！—あだかもそれらのものがそれ自らに於て何等か善なものであつたかのごとく。事態は明白である。この最初の溯源が既に英吉利の心理學者の氣質のあらゆる典型的特徴をもつてゐる。「有用」と、「忘却」を、「習慣」を、また最後に「誤謬」を、それらのものを引括めて我々は、より高い人間がこれまで人類の特權の一種を誇る如く誇つてゐたところの、一の評價の土臺にしてゐるわけである。かうした誇は

引きすり下され、かうした評價は價值をなくされねばならぬものだ。ところでそれがそこまで行つてゐるだらうか？……さて第一に私にまで明白に考へられるのは、これらの理論では「善」といふ概念の本當の發源地が間違つた場合に求められ、且つ定められてゐるといふことである。即ち「善」といふ判断は「善」の示される人々の間から起つて來ないのだ！寧ろ「善き人々」自身こそ、換言すれば高貴なる人々、強大なる人々、高い處に置かれた人々、及び高い心を有つた人々こそ、自分自身及び其行爲を善として感得したのである。總ての低級な、心の低級な、卑俗な、賤民的なもの正反對として、最高級のものとして感得したのである。かうした距離の感奮からこそ彼等ははじめて、價值を創造し、價值の名を銘刻することの權利を獲たのである。功利が彼等にとつて何であらうぞ！階級を創造決定する最上の價值判断の此の如き熱烈なる湧出に對しては、功利の見地は思ひ切り縁遠く且つ不適當なものである。右の湧出に於ては、各の打算的な惻巧さに、各の功利的計量に土臺をなすところの、あの生温さの對照が感じられる——たまにでなく、除外例的な一時の事ではなく、寧ろ始終の事として、前述の如く高貴と距離との感奮が、一のより低劣な種屬との、一の「下等なる」種屬との交渉に於ける、一のより、高き支配者的な種屬の、持續的專制的な總體的感情が、根本的感情が、それが「良好」(Gut)「劣悪」(schlecht)對立の起源である。(命名することの主人權は、言葉その物を支配者の權力表示と見做すことが許される程度にまで達する。主人等は「これはこれこれである」と言ふ。彼等は一の音を以

てあらゆる事物や事件に封印し、それに依つて謂はばそれを占有してしまふのである。かうした起源の故に、『良好』(Good)といふ言葉は本来、それらの道徳系譜學者の迷信する如く、必ずしも『非利己的な』行動に結びついてはゐないのである。寧ろかうした『利己的』『非利己的』といふ對立全體が人間の良心を愈々壓迫するやうになるのは、貴族的價值判斷の衰頹に際して起ることなのだ。この對立の中に結局表白されるのは、私一流の言葉遣ひを以てすれば、畜群本能である。そして其場合にも、だいたつてから後はじめて、道徳的評價がかの對立に解きがたく纏ひ着くほど、この本能は支配者になるのである(例へば現今の歐羅巴に於ての如く。今日では『道徳的』や『非利己的』や『無利慾』を同價概念と見做すところの先入見が、既に『固定觀念』や頭の病氣のやうな力を以てはたらいてゐるのだから)。

三

だが次ぎに、『良好』といふ價值判斷の起源に關するかの假定説が、歴史的に支持され得ないといふ事實から全然離れても、尙ほ且つそれは一の心理學的自己撞着をまぬがれないのである。非利己的行動の功利が其賞讃の起源であらねばならぬとする。そしてこの起源が忘れられねばならぬとする。さうした忘却はそもそもどうしてあり得るか？ 事によつたら此の如き行動の功利がどうかした場合に

休止したのでもあらうか？ 事實は正反對である。この功利は寧ろあらゆる場合に於ける日常的經驗であり、従つて斷間なくつねに新しく強調されるところのものである。その結果は、意識から消え失せる代りに、忘れられてしまふ代りに、それが愈々大なる明白さで以て意識に刻みつけられねばならないのである。例へばハアバート・スペンサアに代表されるところの、あの反對な理論の方が如何に遙かにより、合理的であるかよ(だからと云つて、より眞實なでもないけれど)！ スペンサアに依ると、『良好』といふ概念は『本質上有用』や『合目的』といふ概念と同一なことから、『良好』『劣惡』の判斷に於て人類は正しく、有用に合目的なものに關する、有害に不合目的なものに關する彼等の忘れられなかつた並びに忘れられ得ない經驗を總勘定し裁決してゐるわけである。この理論によると、『良好』は前にそれ自らの有用なることを證據立てたところのものの屬性である。かくてそれは『最高度に價值ある』もの、『それ自らに於て價值ある』ものと見做されることを要求し得るのである。前述の如くかうした説明方法も間違つてはゐる。しかし乍ら少くとも説明その物は筋が通つて居り、且つ心理學上から許されるのである。

四

私にまで正當な道を指し示したのは、色々な國語に鑄込まれたる『良好』の觀念記號が、語原學上實

際に何を意味してゐるかといふ問題である。その時私が見出したところに依れば、それらの觀念記號が、いづれも同一の概念變化へ溯つてゐる。どこでも社會的意味に於ける『貴族的』(vornehm)『高貴』(edel)が根本的概念であり、それから『貴族的な高貴な魂をもつた』といふ意味での、『高級な魂を賦與された』といふ意味での、『魂の上に特權を有する』といふ意味での『良好』(gut)は必然に發展して來てゐる。『卑俗』(gemein)や、『賤民的』(Pöbelhaft)や、『下等』(niedrig)を結局『劣惡』(schlecht)といふ概念にしてしまふところの、かの今一の發展といつても並行して走る發展である。かの發展に對する最も雄辯なる例證は、『劣惡』(schlecht)といふ獨逸語その物である。此言葉は schlicht (飾氣なき、むき出しの)と同意義である——“schlechtweg”, “schlechterdings” を参照せよ——そして本來單に貴族的な人々と對照をしてゐるだけの、まだ何等の廻り氣や邪氣を生じてゐない、むき出しの、卑俗な人間を言ひ現してゐた。凡そ三十年戦争の頃、従つてかなりおそくなつてから此意味が今日行はれてゐるやうなものに變移したのである。道徳系諸語に關しては、これが一の大切な發見であるやうに思はれる。その發見がこんなにもひまどつてゐるのは、近代的世界に於ける民主的先入見があらゆる起源問題に關して阻害的影響をはたかしてゐるからである。そしてこの影響は、一見最も客觀的な自然科学や生理學の領域にまでは入り込んでゐる(ここではただ暗示するだけに止めて置くのだが)。しかし乍ら此先入見が一たび憎惡を縱ままするやうになつたや否や、特に道徳及び歴史の上に如何なる

不都合を働き得るか、有名なるパツクルの場合によつて示される。即ち英吉利的起源を有するところの近代精神の平民主義は、その時再び其本來の地盤から、どろどろの噴火口の如く暴烈に、又これまで總ての火山がもつてゐたやうなあの鹽つばい、騒々しい、俗惡な雄辯を以て噴き出したのである。

五

當然内密の問題と呼ばれ得る、そして單だ少數者の耳にのみ訴へようと欲するところの我々の問題に關しては、次ぎの事實を確定するのは決して小さかな興味のある事である——『良好』を言ひ現すあの言葉や語根の中にも屢々、貴族的な人々が自らをより、高き階級の人間のやうに感じた場合の、根本的色調の閃いてゐるといふ事實を。固より彼等は恐らく最も屢々、權力に於ける彼の優勝にしたがつて自ら名づける(『強大者』、『君主』、『命令者』として)、或は此優勝の最も見易き記號に従つて、例へば『富める者』、『所有者』として自ら名づける。(これは *possessor* の意味である。そして *エラアニッシュ*、*スラアフィッシュ* の諸語に於ても照應してゐる)。だが一の典型的な特質に従つても自ら名づけられる。そしてこれが、今我々に關係してゐるところの場合である。例へば彼等は自らを『誠實なるもの』と呼ぶ。それをまつ先きにやつた希臘の貴族の代辯者は、メカラの詩人テオグニスである。その目的の爲めに

鑄込まれた *calios* といふ言葉は語原學上、「あるところの、現實性を有するところの、現實であるところの、眞實であるところの人」を意味してゐる。次に「眞實なる者」から「誠實なる者」への主觀的一推移を経てゐる。概念變化のこの位相にあつては、それが貴族階級の標語になり合言葉になり、「高貴なる」といふ意味への推移へを完全にしまつたので、テオグニステオグニスの考へ描いてゐる如く、*so* 吐きの卑俗な人間からの差別になつてゐる。そして終に其言葉は貴族階級の亡んだ後、靈性上の貴族的傾向を表示するだけのものになり、謂はば立派に圓熟し切つたのである。*kakos* といふ言葉に於ては、*delios* (*agathos* と對照をなすところの平民) に於ての如く、臆病といふことが強調されてゐる。これは恐らく數倍も明白な *agathos* の語原學的由來が如何なる方向に求めらるべきかをほのめかすであらう。私が *melas* と並置する拉丁語の *malus* に於ては、平常人は暗色種族として、とり分け毛髪の黒い種族 (*hic niger est*) として、伊太利のアリアン前居住者(その皮膚の色が金の髪白面の、即ちアリアン系の征服種族からの最も明白なる相違點を形作つてゐた) として特色づけられた。少くともゲエル語は嚴正に相應した場合を私にまで提供した。即ち *fin* (たとへば *Fin-Gal*) といふ名稱に於ける) は貴族を、優良な、高貴な、純粹な、本來は金髪の人間を、暗色の毛髪の黒い原住者から差別するところの言葉である。序でながらケルト人等は全く金髪白面の種族であつた。ギルコフが尙ほやつてゐる如く、獨逸のより周到なる人種學的地圖の上に見らるる、本質的に髪の毛の暗い人民の

それらの痕跡を、何等かのケルト的祖先や混血に聯結するといふのは間違ひである。寧ろ此等の場所では獨逸のアリアン前人民の方が優勢なのである。(同様の事が殆んど歐羅巴全體についても云はれる。事實上從屬種族が結局そこに再び、色や頭蓋の短さに於て、加之加之恐らくは理智的及び社交的本能に於ても、優勢になつたのだ。近代の民主制が、更により、近代的無政府主義及び特に、歐羅巴のあらゆる社會主義者に共通してゐる「共產制」への、原始的社會形式へのあの傾向が、その本質に於て一の巨大なる後歸後歸を意味しないと、誰が保證するか? 征服者であり、支配者であるアリアン人種が、生理的にも劣等になつてゐないと、誰が保證するか?)。思ふに拉丁語の *bonus* は「戰士」として説明し得られるであらう。私が正當に *bonus* を一のより古い *duonus* から引き出し得たのであれば (*bellum* = *duellum* = *duen-lum*。そしてこの内にかの *duonus* が包容されてゐるやうに私には思はれるのだから)。乃ち *bonus* は不和合の、争鬪 (*duo*) の人として、戰士として——古代羅馬にあつて、ある男子に對する彼の「良好」が何を意味してゐたかは分明である。我々の *bonum* といふ獨逸語その物も、「神の如き」(*göttlichen*) 人を、神の如き種族の人間を意味せざるを得なかつたではないか? そして *Goythe* (の民族的(本來は貴族的)名稱と同一のものではなかつたか? 此處にはかうした推定に對する論據を擧げることにはさし控へて置く。

六

政治上優先の概念が常に靈性上優先の概念の概念に歸着するといふ通則に對しては、特に尙ほ何等の除外例もない(除外例への機會はあるのだが)——最高階級が同時に僧侶階級であり、従つて彼等の一般的特色の中でも、彼等の僧侶的職分を想ひ起させるやうな肩書きが傑出してゐるとしたならば、此等の場合、例へば「純潔」と「不潔」とがはじめて階級的特徴として對立する。そして此處にも後程一の「好良」と一の「劣悪」とが一のものはや階級的でない意味に於て發展する。加之、「純潔」と「不潔」との此等の概念をはじめから餘りに重苦しく、餘りに廣く、乃至餘りに象徴的にさへも取らないやうに、人々は氣を附けなければならぬ。古代人のあらゆる概念は寧ろはじめの内、我々にまで殆んど思料しがたき程度に於て粗野に、露骨に、外的に、狭く、特に非象徴的に理解されたのである。「純潔な人間」は最初の内、自らを洗ひ濯ぐ人間、皮膚の病を起し易い一定の食物を取らない人間、下層階級の穢らしき婦等と共に眠らない人間、血を恐れる人間たるにすぎない。單にそれだけのものである。一方では勿論、何故丁度かうした初期に於て對立價値の危險なる内化と鋭化とを招致し得たかが、一の本質的に僧侶的な貴族制の全性質からして明らかになる。全くのところ、此等の對立價値によつてこそ、自由精神をもつたアキルすら戰慄しないでは越えないやうな裂目が人と人との間に口を開くのであ

る。初めからして此の如き貴族制の中には、又さうした社會を支配してゐる、行動をさげ乍らも、一面内省的で一面爆發的な習慣(その結果として總ての時代の僧侶等に殆んど避けがたく附着するところのあの内觀的病態と神經衰弱とが現れる)の中には、何等かの不健全なものがある。だがかうした彼等の病態に對する治療法として彼等自身から發明されたところのものに關して云へば、それは結局、それによつて癒されるべき病氣より、百倍も危險な効果をもつてゐたのだと言はざるを得ないではないか? 人間性その物が尙ほ此僧侶的治療法のお目出度さの効果によつて悩み病つてゐる! 例へば肉食を避ける飲食方式だとか、斷食とか、性的禁慾だとか、「荒野への」逃避だとかを考へて見ることがよい(それは一種のキア・ミッテル式隔離で、勿論それにつづく食療法過食療法——禁慾的理想のあらゆるヒステリイに對する最も有効な療法である——をも伴つてゐるのであるが)。その上肉感を敵視した、怠慢にし狡猾にするところの僧侶の形而上學全體を考へて見るがよい。フアキルや婆羅門——梵天を玻璃ボタンや固定觀念として用ひる——のやりかたにならつた彼等の自己催眠を考へて見よ。そしてかの根本療法なる虛無(又は神——一の unio mystica に對する願望は、虛無に對する、涅槃に對する佛教徒の願望である。そしてそのほかの何物でもない!)に對する餘りにも解りすぎた結局の普遍的な飽足を考へて見よ。僧侶社會にあつてはあらゆる事物がより、危險な度合に於て醫藥や治療法になるのみならず、更に慢心に、復讐に、洞察に、逸樂に、愛情に、野心に、徳に、病氣になる。尙

は多少公正なる附け加へをして云へば、この本質的に危険な人間の、僧侶階級の生存形式を地盤としてこそ、一體に人間は興味ある生物になつたのであり、さうしてこそ人間の魂は一のより、高き意味に於て深みを獲、邪惡(Diese)になつたのである。そしてこれこそは爾餘の生類に對する人類のこれまでの優勝の二の根本形式なのである。

七

如何にたやすく僧侶的評價方法が騎士的貴族的評價方法から派生し、やがて其反對物にまで發達し得るかを、人々は既に洞見したのであらう。その對立を生ずる爲めにはいつも、僧侶階級と戰士階級とが互に嫉妬心をもち合ひ、懸賞品の處分について一致し得ない時、特別なる動因が與へられる。騎士的貴族的價值判斷の前提をなしてゐるのは一の力強き肉體であり、それを保存するに必要な物と共に、華やかな豊かな、加之溢れるばかりの健康であり、戦争や、冒險や、狩獵や、舞踏や、拳闘であり、更に苟くも、強い自由な快活な行動に包容されてゐるところの總てのものである。僧侶的貴族的評價方法は——我々は見た——ほかの前提をもつてゐる。戦争が問題になつて來るときは、この階級にいつてかなり都合が悪い！僧侶等は既に知れ渡つてゐる如く、最も邪惡なる敵である。だが何故であるか？なぜならば彼等が最も無力なものであるからだ。彼等の無力はその憎しみを巨怪な陰險なものに、最も巧慧な最も有毒なものにまで成長させる。僧侶はつねに世界の歴史に於ける最も大なる憎悪者全部であり、又最も伶俐なる憎悪者である。僧侶的復讐の利巧さに比べれば、一體にほかのあらゆる利巧さが殆んど言ふに足りないのである。人類の歴史は、無力な者等によつて持ち込まれた利巧がなかつたならば、全く餘りにも愚かしきものであつたらう。我々は直ぐにも最大の事例を取つて見よう。地上に於て『高貴なる者等』、『強大なる者等』、『主人等』、『有力者等』に對してなされた一切のものは、猶太人等が彼等に對してなしたところのものに比すれば言ふに足りない。かの猶太人等はこの僧侶的な民族は結局、一の根本的な價值顛倒によつて、乃ち最も利巧な復讐の一行爲によつてのみ、彼等の仇敵や虐壓者等に腹癒せすることを知つたのである。しかしながらこのやり方は一の僧侶的な民族にまで、最も陰險な僧侶的復讐をもつた民族にまでふさはしいものだつた。猶太人こそはかの貴族的方程式(如法=對峙=闘争=對峙)に對して、氣味惡き論理で以て正反對を敢てし、最も深刻な憎しみ(無力の憎しみ)の齒ぎしりをやりながら、次ぎの方程式を固執した——『あはれなる者共のみ善良なる人々である。貧しき、無力なる、卑しき者共のみ善良なる人々である。苦しめる、乏しき、病める者共は又、唯一の信心深き人々、唯一の祝福された人々である。彼等の爲めにのみ救ひはあるのである。これに反して汝等は、汝等高貴なる、また有力なる人々よ、汝等は永久に亘つて邪惡なる人々、残忍なる人々、淫逸なる人々、飽くことを知らざる人々、神を無みする人々である。

第一論文

汝等は又永久に祝福せられざる人々、呪はれたる人々、罪に定められたる人々であるだらう！……我々はこの猶太人的價值顛倒の相續産を何人が作つたかを知つてゐる。猶太人等があらゆる宣戰の中の此最も根本的なものに關して示した、巨怪なる、度はづれに宿命的な手ほどきにつけても想ひ出されるのは、一のほかの機會に於て私が筆にしたところのかの文句である（『善惡の彼岸』箴言一九五）。即ちそれは、猶太人の間に於て道徳上の奴隸一揆が始まつてゐるといふのである。そして其一揆はその背後に二千年の歴史をもつて居り、且つそれが凱歌を奏した故にこそ、今日我々の眼前から退いて居るといふのである。

八

しかし乍ら汝等はこれを理解しないか？ 汝等は勝利を獲るために二千年を要したところの或る物に對し、何等の眼をも有しないのか？……それには驚き異むべき何物もない。すべての久しきに亘る經過は見るに、見渡すに困難なものだから。しかし乍ら事件は斯うなのだ。復讐及び憎しみの、猶太人的な憎しみ——理想を造り出し、價値を造りかへるところの、最も深く最も崇高な憎しみで、曾つて地上にそのやうなものを見たこともないのである——あの樹の幹から、同じやうに比類なき或るものが、一の新しき愛が、あらゆる種類の愛の中で最も深く最も崇高なものが生ひ立つて來た。そし

て如何なる他の幹からしてそれが生ひ立ち得たことぞ？……しかし乍ら、この愛があつた復讐慾の實際の否定として、猶太人的憎惡の反對物として成長し來つただらうなぞと推察すべきでない！ 否、事實はその反對なのである！ この愛はかの憎惡から成長してゐた——其冠冕として、最も澄み切つた明るさと日光の豊かさとの中に、廣くより廣くひろがつて行くところの、勝ち誇れる冠冕として。そして其冠冕は、かの憎惡の根が深く且つ邪惡なる一切の物へ、愈々深刻に且つ熱望的に沈み行くときのやうな強さで以て、謂はば光と高さとの領内に、かの憎惡の標的を、その勝利を、その獲物を、その誘惑を追求してゐたのだ。かうしたナザレのイエスは、肉體化されたる愛の福音は、貧しき者、病める者、罪ある者にまで祝福と勝利とをもたらすところの此『救済者』は、彼こそは其最も陰險なる最も抵抗しがたき形に於ける誘惑ではなかつたか？ 恰かもかの猶太人的價値及び理想の革新への誘惑なり迂路なりではなかつたか？ イスラエルは此『救済者』の、このイスラエルの外見上の敵對者破壊者の迂路によつてこそ、その崇高なる復讐心の最終標的に到達しなかつたか？ それは一の眞に偉大なる復讐政略の、一の遠方を見るところの、地底にひそめる、徐ろに活動し畫策するところの復讐の、神祕なる黒き魔法に屬してゐないか？——イスラエル自身が全世界の前に、其復讐の本當の道具を何等か仇敵の如きものとして拒否し、十字架につけねばならなかつたので、その爲め『全世界』即ちイスラエルの敵全體が丁度此餌へ何の廻氣もなく喰ひつき得たといふのは、加之、どんなに聰慧な人間に

もせよ、そもそも一のより、危険なる餌を案出することが出来たであらうか？ 誘惑し、陶醉させ、昏迷させ、頽敗させる力に於て、『神聖なる十字架』のあの象徴に比すべき、『十字架上の神』といふあの恐ろしき逆説に比すべき、人類を救ふ爲めの神の自己刑罰に於ける、不可思議に極度に残忍なるあの奇蹟劇に比すべき何物かを、案出することが出来たであらうか？……少くともたしかなのは、sub hoc signo（此旗の下に）イスラエルが其復讐とあらゆる價値の顛倒とを以て、これまで總ての他の理想を、總てのより、貴族的な理想をいつもいつも征服して來てゐることである。

九

「しかし乍ら何故なれば汝は尙ほより、貴族的な理想といふことを口にするか？ 我々をして事實に歸服せしめよ。民衆は——或は『奴隸』は、或は『賤民』は、或は『畜群』は、或は何にてもあれ、汝が名づけたいと思ふところのものは——打ち勝つた。これが猶太人等の間に起つたとするならば、宜しい！ 其場合如何なる民族も世界史上のより、大なる使命を會つて有たなかつた。『主人等』はなくされた。凡常人の道徳は打ち勝つた。此勝利は同時に血を毒したものと見做される（それは人種を互に混り合はせた）。私はそれを厭撃しない。けれども此酔つ拂はせが成功したのに何の疑ひもない。人類の『救済』（精しくは『主人等』からの）は最もうまく行つてゐる。總ての物が明白に猶太人化され、或は基督

教化され、或は賤民化されてゐる（言葉なんぞどうでもいい事だ）。人類の全身に廻り行く此毒害の進路は、阻止し得べくも見えない。しかも其テムボオと歩調とは今から後愈々より、徐々に、より、デイリケエトに、より、靜かに、より、慎重になつてもよい。まだ時はたつぷりあるのだから……これに關して云へば、教會は今日尙ほ何等かの必要なる任務を有つてゐるか？ そもそも存在すべき權利を有つてゐるか？ それも人は教會なしにやつて行くことが出来たか？ Quæritur,（それは疑はしむ）。教會は右の進路をはかどらせる代りに、拘束し阻止するやうに見える。よし、それすらもその役に立つたかも知れない……固より教會は所詮、一のデイリケエトな聰明さに、本當に近代的な趣味に抵觸するところの、粗野な農民的な或る物なのである。少くともそれはどれだけか自らをより、精やかにしてはならなかつたか？……今日それは誘惑するよりも以上に遠ざからせる……全くのところ、もし教會といふものがなかつたならば、我々の中の誰が自由思想家になりたがつたことぞ！ 我々を逐ひ斥けるのは教會であつて、その毒ではない……教會といふものを別にして考へれば、我々もまたあの毒を愛する……」——これは私の言説に對するある『自由思想家』の、ある名譽ある生物（彼が夥しく證明した如く）の、加之ある民主主義者のエピログ（結論）である。彼はそれまで私に聽いてゐた。そして私の沈黙を我慢し得なかつた。だが私にして見れば、その場合口にしないで置く可き多くの物があつたのだ。

道徳上に於ける奴隸一揆は、怨恨その物が創造的になり、價值を産み出すといふことで以てはじまる。それは實際の反動が、行爲の上の反動が禁じられてゐる爲め、單に想像上の復讐によつてのみ賠償を得るやうな人々の怨恨である。總ての貴族的道徳が自分自身への勝ち誇れる肯定から出て來るのに對して、奴隸道徳ははじめからして「外の」ものにまで、「他の」ものにまで、「自身ならぬ」ものにまで否定を言ふ。そして此否定はその創造的行爲である。評價眼のかうした轉回は、自分自身へ引き返す代りに、外の方へのかうした必然的な方向は、正しく怨恨の特性なのである。奴隸道徳はそれが成立する爲めに、つねに先づ一の反對世界を、また外部世界を必要とする。生理學的に言へば、それは苟くも行動し得る爲めに外部的刺戟を要するのである。その行動は根本的に反動である。貴族的評價方法の場合は事情を異にする。それは自發的に行動し成長する。それはただ自分自身に對し更に、より感謝深く、更に、喜びに然りを言ふ爲めに、その反對物を求めるだけである。その消極的概念なる「下等」、「卑俗」、「劣惡」などをその積極的な、生命や欲情で以て飽和されきつた根本概念なる「我々高貴なる者、我々優良なる者、我々美なる者、我々幸福なる者」などに比べると、單に、後生の青白い對照畫たるにすぎないのである。貴族的評價方法が道を迷ひ、現實に對して罪を犯すな

らば、それはそれが十分に知らないところの範圍——全くのところ、その本當の知識に對して、それは侮蔑の心を以て自らを防衛するのだ——に限つて起る事である。場合によつては、それはそれから輕蔑されたる範圍を、卑俗な人間の、下層民の範圍を誤判する。一方では又、十分考慮の中に加へらるべきは、輕蔑の、見下しの、倨傲の感情が、輕蔑されたものの畫像を偽造するとしても、いつも其感情が、無力者の陰險な憎しみや復讐の、その敵に對する——勿論畫像に於てだが——攻撃を特色づけるやうな、あんな偽造からずつと遠ざかつてゐるだらうといふことである。全くのところ輕蔑の中には餘りに多くの無頓着や、餘りに多くの雲烟過眼視や、苛立たしさを、餘りに多くの特有な歡喜さへも混在してゐるので、それは其對象を本當の戲畫や化物に變化してしまふことが出來ないのである。更に注意を拂はねばならないのは、例へば希臘の貴族が下層民を自分自身から差別するに使つた總ての言葉に置いたところの、あの殆んど慈み深き色調である。惻隱、留意、顧慮の一種が絶えず混入され加味されて行つた結果は、卑俗な人間に適用されたる殆んど總ての言葉が、結局「不幸な」、「氣の毒な」に對する表白として殘存してゐる dei ios, delaios, Poneros, moxthelos. を参照せよ。後の二は實際に勞働奴隸及び駄獸としての卑俗人を言ひ示してゐる。そして他方では「劣惡」や「下等」や「不幸」は、「不幸」を中核とする一の音調で以て、希臘人の耳に響き渡ることを休めたことがない。これは輕蔑の下にも自らを否定しない古代の高貴なる貴族的道徳の相續産である（言語學者等は如何

なる意味に於て oixuros, hanolpos, tlemou, dustuxein, Xunp'ion. が用ひられてゐるかを想起するがよい。『生れのいい人々』は自らを單に『幸福な人々』であると感じた。彼等は先づ其敵へ目を走らせて人工的に其幸福を組立てたり、場合によつては説きつけたたり、でつち上げたり（怨恨をもつた總ての人々がいつもするやうに）することを要しなかつた。同じく彼等は完全な、力の充ちみちた、従つて必然に活動的な人間として幸福から行動を引き離さないでゐた。彼等にあつては、活動してゐるといふことは必ず幸福の中に數へられるのである（これが eu Pratein の語源なのである）。總てが毒々しき敵意をもつた感情の湧き立つてゐる、無力な者共や抑壓された者共の幸福に對し、著しき對照をなしてゐる。それらの無力な、抑壓された人々にあつては、幸福が本質的に麻醉藥として、昏迷として、休息として、平和として、『安息日』として、情意の鎮靜、四肢の伸張として、一口に云へば受動的なものとして現れる。貴族的な人間は自分自身の前に信任と開放をもつて生きてゐるのだけれが (genaios, 『高貴の生れ』は『正直』といふ色調を、恐らくはまた『素樸』をも強調する)、怨恨をもつた人間は正直でもなければ素樸でもなく、自分自身に對して立派に眞直ぐでもないのである。彼の魂は偷み見る。彼の精神は潜匿所を、忍口を、裏門を愛する。總てのかくされた物が彼にまで、彼の世界、彼の保證、彼の神膏として悦ばれる。彼は沈黙と、忘れないことと、待つことと、手廻しよく自らを小さくし、自らを卑くすることとを心得てゐる。此の如き怨恨をもつた人々の種族は必ずや

遂に何等かの貴族的な種族よりもより、細心たることを證據立てるであらう。彼等は全く別な尺度に於てさへも、換言すれば最高級の生存條件としてさへも細心を尊重する。これに對して貴族的な人々の間に於ける細心は、ややもすれば贅澤とか上品とかいふやうな精かな味を添へられてゐる。彼等の間では細心があまり大切なものではない——中心になつてゐる無意識的本能の完全にたしかな働きほどに、或は危険に向つてでも、敵に向つてでも、勇敢なる突進と云つたやうな或る放膽さほどに、或はあらゆる場合貴族的な魂がよつて、以て互に認知し合ふところの、憤怒や、愛や、畏敬や、感謝や、復讐のあの、狂熱的な爆發ほどに、それほど大切なものではない。貴族的な人間の怨恨は、それが彼に現れて來る場合、その場の反動に於てそれ自らを遂行し消耗してしまふ。それ故にそれは毒害しない。これと共に、弱者無力者の間でならばそれが避けがたいやうな無数の場合にも、それは全然現れないでしまふこともあるのである。其敵を、其災厄を、其非行その物をさへ久しく氣にかけてゐることが出来ないといふ——これは造形的な、鑄固めるところの、癒すところの、更に忘れさせるところの力を夥しくもつた、強い完全な人間性の徵證である（近代の世界に於ける其好適例はミラボオである。彼は彼の上に加へられたる侮辱や汚名に對して何等の記憶をももつてゐなかつた。又彼は彼が——忘れた故にのみ、恕すことが出来なかつたのである。此の如き人間は他人の内に自らを埋めようとする多くの蟲共をも、體の一揺りで以てふり落してしまふ。苟くも地上に於てあり得るとしたならば、た

だからした性格に於てのみあり得るのである——本當の「敵に對する愛」なるものは。げに、その敵に對する如何に多くの畏敬を貴族的なる人間が有つてゐることぞ！そしてかくの如き畏敬は既に愛への一の橋梁である……彼は彼自身を資格づけるものとして彼自身への敵を要望する。げに彼が堪へ得るのは、何等の侮蔑すべき物をも有せずして、甚だ多くの尊敬すべき物を有するが如き敵だけである！これに反して怨恨をもつた人間の考へるやうな「敵」といふものを想像して見よ。(そして丁度そこにこそ彼の行爲があり、彼の創造があるのだ)。彼は「邪惡なる敵」を、「邪惡なる人間」を考へてゐる。しかもこの根本概念から今彼は、相對的な對照的な物として更に「善良なる人間」を、彼自身を案出するのである——自分自身を！

一一

かくの如きは「善」といふ根本概念を自發的にいきなり造るところの、換言すれば自分自身から考へ出し、それからやがて自分自身の爲めに「劣惡」(Schlecht)といふ觀念を造り上げるところの、貴族的な人間のやり方と正反對である！貴族的起源をもつた此「劣惡」と、満ち足らはざる憎しみの醸造槽から出て來たかの「邪惡」とを比べると、前者は模造品であり、附録であり補色であるし、後者は原物であり、發端であり、奴隸道徳の概念に於ける本當の行爲である。外見上一の概念なる

「善」に對立した「劣惡」「邪惡」といふ二の言葉が如何に相異つてゐるかよ！しかし乍らそれは本當に同一の概念なる「善」ではない。寧ろ人は、誰が怨恨道徳の意味するところに従つて實際に「邪惡」であるかを自ら問はなければならぬ。あらゆる嚴格さに於て答へられる——他の道徳の「善」なる人間その人、高貴なる人間その人、強大なる人間その人、支配する人間その人が、怨恨の毒々しい眼で別の色へ、別の意義へ、別の外觀へ持つて行かれてゐるだけである。この場合我々が最も否定したくないのは次ぎの一事である——それらの「善」なる人々を單に敵としてのみ認めることを學んだ人は、更に何者をも「邪惡」なる敵として認めないことを學んだ。そして慣例や、崇敬や、風習や、謝恩によつて、尙ほより多く相互の監視によつて、同等者の間の嫉妬によつて左様に嚴格に拘束されてゐるところの同じ人々は、一方では相互の交渉の中に顧慮や、自制や、溫情や、誠實や、自尊や、友情を表示すべき左様に多くの方法を見出すところの同じ人々は、外の方へそこに縁遠い物が、異邦がはじまるのだへ向つて、解き放たれた猛獸よりすつと上のもではない。彼等は其處にあらゆる社會的拘束からの自由を享樂する。彼等は社會の平和に於ける久しき檻禁拘留が與へるところの緊張を、荒野の中に恙なくゆるめられてゐるやうに思ふ。彼等は猛獸の良心の無邪氣さの中へ引き返して行く。恐らくは虐殺や焼打や凌辱や苛虐の戦慄すべき一條から、得々として、又靈の安らかさを以て引上げて行く(あだかも單に學生のある惡戯が演じられただけのものでもあるかの如く、そして詩人達が

またもや歌つたり讚美したりすべき十分なテエマをもつたといふことを確信しながら)ところの歡び狂へる怪物共の如く。あらゆるかうした高貴なる種族の心髓に於ては、かの猛獸を、立派な、獲物や勝利を熱望的に追ひ廻してゐる白面獸(Blonde Bestie)を認めないわけには行かない。この隠れたる心髓にとつては折々息をぬくことが必要である。禽獸は再び放たれねばならぬ。再び野へ歸つて行かなければならぬ。羅馬の、日耳曼の、日本の貴族も、ホメエルの勇者も、スカンディナヴィアの海豪も、この必要に於ては總てが皆軌を一にしてゐる。自分達の通り過ぎた總ての足跡に、「蠻人」といふ概念を残したものはかの貴族的な種族等である。彼等の最高文化からさへも蠻人主義の意識や、それに對する誇すらが露れてゐる(例へばペリクレスが彼の有名なる葬式演説に於て彼のアテン人等にまで、次ぎの如く言つてゐる場合である。曰く、「あらゆる陸地と海との上に我々の不敵さは道を開いて行つて、善良にも邪惡にも到處に自らの不滅なる紀念碑を建てた」と)。氣違染みてゐるとも、馬鹿げてゐるとも、唐突とも云はば云へるやうな、高貴なる種族のかうした無敵さは——ペリクレスはアテン人等の Paphlagonia を格段に華々しいものにしてゐる——安寧、身體、生命、和樂等に對する彼等の無頓着や輕蔑は、あらゆる破壊に對する、勝利や殘忍のあらゆる樂欲に於ける彼等の恐るべき晴ればれしさや深刻なる悦ばしさは、總ての此等のものはその爲めに苦しみられた者共にとつて、「蠻人」の、「邪惡なる敵」の、事によつたら「ゴス人」の、「バンダル人」の肖像の中に結晶した。獨逸人が權力を握つたや

否や、そして現在でもまた、彼が引き起すところのあの深い冷たい不信はやはり、數世紀に亘つて歐羅巴が日耳曼の白面獸の狂暴を前に經驗したところの、あの消しがたき恐怖の餘響である(古代日耳曼人と我々獨逸人との間には、血縁的關係は別として、殆んど何等の概念的關係もないのだけれど)。ヘシオオドが文化時代の序列を考へ出し、それを金や銀や青銅で表白しようとなつた時、あの時の彼の當惑にまで私は會つて注意を促して置いたことがある。彼は彼があの立派な、けれども同時にあんなに恐ろしく、あんなに荒々しいホメエルの世界に面して經驗したところの矛盾を片附ける場合、一の時代を二に分け、それを前後に並べるといふことよりほかに方法を知らなかつた。即ちその一はトッロヤアやテエベンの勇者及び半神等の時代であつて、その内に自分達の祖先を有したる高貴なる家門の記憶に残つてゐるところのあの世界である。今一は青銅時代であつて、壓抑されたもの、掠奪されたもの、虐待されたもの、放逐されたもの、賣り飛ばされたものの子孫に見えたところのあの、同じ世界である。前述の如く、酷く、冷たく、殘忍な、感情も良心もない、總ての物を搗き碎き、總ての物を血に染めるやうな青銅の時代なのである。今日ともかくも眞實と思はれてゐるところのものが、即ち總ての文明の本質は「人間」といふ猛獸、飼ひ馴らされ文明化された動物から出てゐるといふことが眞實であつたとしたならば、總てのあの反動的怨恨的本能——その助けによつて貴族的な種族と並びに彼等の理想とが終に辱め虐げられるのだ——は疑ひもなく本當の文明の用具と見做されねばならな

かつたであらう。もつともそれで以て、それらの用具の所持者等がまたそれ自ら文化を代表するといふことにはまだならないだらう。寧ろ其反對の事が、ただにありさうに思へるだけでなく——然り、それは今日目前に見るところのものである！ 虐壓するところの支配を欲するところの本能のかの所持者等は、總ての歐羅巴的なまた歐羅巴的な奴隷民、とりわけアリアヤ前住民の子孫等は、彼等は人類の退歩を代表してゐる！ かうした『文明の用具』は人類の恥辱であり、より多く一般に『文明』への懷疑であり反對論據である！ 人が總ての貴族的種族の衷心に横はれる金髪白面の獸を恐怖し、それを警戒するといふのに何等の無理もない。しかし乍ら何人が、恐れないで済む代りにはあの出来損ひの、小さな、いちけた、汚毒された者を見る胸悪さを免れなくなるよりも、寧ろ百倍にも恐れる——同時に嘆美し得るならば——方を選ばなかつたらうか？ そしてそれが我々の宿命ではないか？ 何が今日我々をして『人間』に反感をもたせるか？——我々が人間の爲めに苦しみ悩んでゐることには何等の疑ひもないのだから——恐怖ではない。寧ろ、我々がもはや人間に於て何等の恐怖すべきものを有しないと云ふことである。『人間』といふ蛆蟲が前景にあつて蠢動してゐるといふことである。『飼ひ馴らされた人間』が、救ひがたく凡庸な、元氣づけてくれない生物が既に自らを、標的及び頂點として、歴史の意義として、『より、高き人間』として感ずることを學び知つたといふことである。否、彼が出来損ひや、病弱者や、疲勞者や、老朽者の過剰（今日全歐羅巴がその惡臭を發しだしてゐるのだ）に對抗して、少くとも比較的な成功を収めて居り、少くとも尙ほ人生に堪へ得るものを有つて居り、少くとも人生に『然り』を言ひ得るものであることを感ずる限りに於て、前述の如く自ら感ずべき若干の權利を有するといふこと、その事である。

一一

此點に於て私は一の嘆息と一の最終の希望とを禁じ得ない。私にまで全く堪へがたいところの丁度その物は何であるか？ 私だけが脱却してゐないところのもの、私を窒息させ失神させるところのものか？ 空氣の惡さよ！ 空氣の惡さよ！ 何等かの出来損つたものが私に近づいて來るといふこと、私がある出来損つた魂の内臓をかがされねばならぬといふこと……それを除いては人が困迫や、缺乏や、悪い天氣や、氣分の惡さや、疲勞や、孤獨の何を堪へ得なかつたか？ 實際のところ人は、彼の生れついてゐる如く地下的な鬭争的な生存にまで生れついてゐるならば、ほかの如何なる事物をも始末し得るであらう。人は幾度となく光明へ引き返して來る。人は幾度となく彼の勝利の黄金時を體驗する。そしてその時、人は彼の生れついてゐる如く壞りがたく緊張して、あらゆる困迫が一層強く引きしぼるに過ぎない弓と同じやうに、新しきものにまで、更により、困難なもの、より、遙かなるものにまで身構へして立つてゐるのである。だが折々は私に一の瞥見を許し與へよ——善惡の彼岸に天上

的な許與者等があるとしたならば——尙ほ何等か恐怖させるところの完全な、實現されきつた、幸福な力強き、勝ち誇つた或るものへの、切めて一の瞥見だけを私に許し與へよ！ 人々の生存を道理あるものにするところのある人間への瞥見である。よつて以て人々への信仰が固執され得るやうな、ある補足的救済的な人間的幸福への瞥見である……なぜといつて事態は斯うなのだから——歐羅巴人の矮小化及び均一化は我々の最大危険を包みかくしてゐる。なぜならばこの瞥見が疲労させるからである……我々は今日、より大きくならうと欲するところの何物をも見ない。我々はそれがつねに後方へ後方へと、より稀薄なもの、より人の善いもの、より利巧なもの、より安逸なもの、より凡庸なもの、より無頓着なもの、より支那人的なもの、より基督教徒的なものへ退却してゐることを付度する。人間は（疑もなく）いよいよ「より善く」なる……歐羅巴の宿命は正しく次ぎの一事の中に横はつてゐる——人間に對する恐怖をなくすると共に我々は、彼への愛をも、彼に對する畏敬をも、彼への希望をも、否人間にならうとする意志をもなくしてしまつた。人間を瞥見することは今や人をして疲労を感じしめる。今日虚無主義がそれでなかつたら、そもそも何であるか？……我々は人間に疲労倦怠してゐる。（譯者註——獨逸語の *mitte* は疲労倦怠の二の意味をもつてゐる。）

一三

だが我々は引き返さう。「善」の——怨恨をもつた人間の案出した如き善の、他の起源の問題は、その解決を願望する。小羊共が大きな肉食鳥を怨み憤るといふのは異しむに足りない。けれどもそれは大きな肉食鳥が小さな小羊共を捕ることを責めるべき何等の理由にもならない。そして小羊共が彼等自らの間に、「これらの肉食鳥は邪惡である。そして出来るだけ少く肉食鳥であるところの者は、寧ろその反對物は、小羊は、彼こそは善良であり得なかつたか？」と言ふ時、一の理想の斯うした樹立に對しては何等の咎め立てすべきものもない——かの肉食鳥等がそれを多少嘲笑的に見やりながら、恐らくは彼等自らにまで、「我々は彼等を、これらの善き小羊を、聊かも怨み憤つてゐない。加之我々は彼等を受してゐる。何物も柔かな小羊より旨くはないのだから」と言ふであらうけれど、強さがそれ自らを強さとして表白しないこと、それが壓服しようとの願ひ、倒壊しようとの願ひ、君臨しようとの願ひ、仇敵や抵抗や凱旋への渴望でないことを、強さに對して要求するといふのは、弱さがそれ自らを強さとして表白することを、弱さに對して要求するのと、丁度同じほどに馬鹿らしきことである。力の一分量は衝動や、意志や、行爲の丁度さうした一分量である。寧ろそれは丁度この驅逐や、意欲や、行動よりほかの全く何物でもない。そして總ての行動を一の行爲者によつて、一の「主體」によつて規定されたものとして理解し且つ理解し損ふところの言葉（及びその中に石化されたる理性の根本的誤謬）の誘惑の間にのみ異つて現れ得るのである。民衆が電光をその閃きから引きはなし後者を

爲されたものとして、電光と稱する一の主體の働きとして解釋する如く、恰かもその如く民衆道徳はまた強さを強さの表出から引きはなすのである——さながら強者の背後には、強さを表出するものもないも其心任せであるやうな一の無關心な主體があつたかの如く。しかし乍らそこには何等のさうした主體があるのでない。行爲や、動作や、轉成の背後には何等の『存在』もない。『行爲者』は行爲に附加された虚構物たるに過ぎない。行爲が一切である。全くのところ民衆は行爲が電光をして閃かしめる時、それを二重にするのだ。彼等は同一の出來事を先づ原因にし、次ぎには更に其結果にするのだ。自然科学者等が『力は動かす、力は引き起す』云々と云ふ時、彼等は事態をより善くしてゐるのではない。我々の科學全體があらゆる彼等の冷靜、彼等の感情超越にもかかはらず、尙ほ且つ言葉の誘惑の下に立つてゐる。そして『主體』といふ迷信的な『取換兒』から脱却することに成功してゐないのである(例へば原子はカント流の『ディング・アン・ジヒ』同様な『取換兒』なのである)。抑へつけられた、幽かにほの見える復讐や憎惡の感情が、それ自らの爲めに此信仰——『強者にとつては弱くなるのも心の儘であり、肉食鳥にとつては、小羊になるのも心の儘である』といふ——を利用するとも、加之之全くのところ、如何なる信仰をもより、熱情的に固執しなからうとも、何の異むべきことぞ。これによつて彼等はげに、肉食鳥にまで肉食鳥たるべき責を負はせることの權利を自ら獲得する。抑へつけられた者踏みじられた者等が無力さの執念深い奸策から彼等自らにまで次ぎの如く言ふとせよ、『我

我をして邪惡な者等と異つて、即ち善良であらしめよ！そして各の壓服しないところの者は、何人をも傷けないところの者は、攻撃しないところの者は、仕返ししないところの者は、復讐を神の手に委ねるところの者は、我々が爲す如く自らを匿すところの者は善良である。我々辛抱強き者、謙遜なる者、正義なる者と同じく、すべての邪惡なる者を避け、一體に人生より僅かの物を要求するところの者は善良である』と。斯うした言葉が冷靜に且つ先入見なしに聞かれたとしても、尙ほ且つそれは實際に『我々弱者は何を云つても弱者なのだ。我々が十分強くないやうな何事をもしないのは善である』より以上の何物をも意味しない。しかし乍ら斯うした陰慘なる事態は、昆蟲類(大なる危険に際して、『あまりに多く』をなさないことの爲めには好んで死を裝ふであらうところの)さへも有つてゐる斯うした最低級の惻巧さは、無力のあの誤魔化しと自己欺瞞とのお蔭で、禁欲的な、寡言の期待をもつた徳のきらびやかさに包まれた——弱者の弱さその物が、換言すれば實に其存在が、其働きの、其全く唯一の避けがたく解きがたき現實性が、一の任意な遂行、何等かの意欲され、選擇されたもの、一の行爲、一の功績でもあつたかの如く。かうした種類の人間は、各の虚偽がよつて以て自らを神聖にするのを常とするところの自己保存、自己肯定の一の本能から、かの無頓着な心の儘なる『主體』に對する信仰を必要なるものに感ずる。主體が(或は民衆的な言葉遣ひをするならば魂が)今日まで地上の最善なる信條であつたのは恐らく、それが人類の多數にまで、あらゆる種類の弱者や壓抑され

てゐる人間にまで、弱さその物を自由と解釋し、その甲であつたり乙であつたりするのを功績と解釋する、あの崇高な自己欺瞞を可能にしてやつたからの事である。

一四

如何にして地上に理想が製造されるかの秘密を、何人かがどれだけなりとものぞき込み、見下ろすことを欲するか？ 誰がその勇氣を有するか？……いざ！ ここにあの暗い工場が見渡されてゐる。ねがはくば少時の間を待て、私の親愛なるおせつかい君よ、やみくも君よ。君達の目は先づ此偽りのさまさまに色を變へるところの光に慣れなければならぬ……さらば！ 十分である！ 今汝等は語れ！ あの向うでは何が起りつつあるか？ 汝等、最も危険なる好奇心をもつた人間が何を見るかを語れ。今私はそれに耳を傾けてゐる者である。

「私は何物をも見ない、私は愈々多くを聞く。それはあらゆる隅々からの用心深き、怨みがましき、微かなる眩きと嘯きとである。私には、人々が虚言を吐いてゐるやうに思はれる。甘つたるいやさいさが各の聲音に附着してゐる。弱さが功績にまで誤魔かし變へられてゐる。それには何等の疑ひをも容れない。その事は汝等が言つた通りである。」

それから！

「そして報復しないところの無力は「善良」になり、びくびく物の卑屈が「謙遜」になり、人々の憎悪するところのものへの隷従は「恭順」になる（精しくは、この隷従の命令者であると人々が言つてゐるところの者に對する恭順である人々は彼を神と呼んでゐる）。弱者の無事な性格が、彼の夥しく有つてゐる臆病その物が、彼の「戸口に立つこと」が、彼の據んどころなき待望がここに「忍耐」といふやうな立派な名稱を獲得する。それは更に「徳」とも呼ばれるだらう。復讐し得ないのは復讐を欲しないのだと云はれ、事によつたら寛恕とさへも云はれるだらう（なぜと云つて、彼等は何を彼等が爲してゐるかを知らないのだから。ただ我々だけが、彼等の爲すところの事を知つてゐる！）人々は更に其「敵に對する愛」を口にする。そしてその場合苦しい汗を流してゐる。」

それから！

「彼等はいじめである。それには何の疑ひもない。總ての此等の密談者質造者等は、互に相近く蹲踞することによつて温まらうとするのだけれど。しかし乍ら彼等の私にまで云ふところに依れば、彼等のみじめさは神から與へられた特別の恩寵である（人は最も多く愛するところの犬を打ち叩くではないか）。事によつたら此みじめさは更に一の準備、一の試験、一の訓練である。事によつたらその上にも、他日賠償するところの、又巨大なる利子をつけて金貨で以て、否、幸福で以て拂ひもどされるであらうところの或物である。これを彼等は「福祉」と呼んでゐる。」

それから！

「今彼等が私に理解させるところに依れば、彼等は單に強大者なる地上の君主等——その唾を彼等は嘗めねばならぬ（恐怖からでなく、全然恐怖からでなく！むしろ總ての權威を尊むべきことを神が命ずる故に）——より善良であるだけでない。彼等は更に「より善き時」を有つてゐる。少くともいつかは「より善き時」を有つてあらう。だが、澤山だ！澤山だ！私はもはや我慢が出来ない。空氣の悪さよ！空氣の悪さよ！理想の製造されるこの工場は、私が思ふに、眞赤な嘘の臭氣を發散してゐるやうだ。」

否！尙ほしばし！汝等はまだ、どんな黒からでも白を、乳を、無邪氣を造り出すところの、これらの魔術師の傑作について何も言はなかつた。汝等は彼等の手の込んだ完成が、彼等の最も大膽な、最も細緻な、最も怜悯な、最も奸譎な藝當が何であるかを氣づかなかつたか？注意せよ！復讐心と憎しみとで一杯になつてゐる此等の害の獸は、彼等はげに彼等の復讐心と憎しみとからして何を爲すか？汝等は此等の言葉を聞いたか？汝等にして苟くも彼等の言葉を信用したならば、汝等は汝等怨恨をもつた人々の間にのみあつたといふことを付度したであらうか？

「私は理解する。私はまたもや耳を聳てる（嗚呼！嗚呼！嗚呼！そして私は私の鼻をふさぐ）今私は、彼等があんなにも屢々言つたところのものはじめて聞く、「我々善良なるものは、我々は正

しき人間である」と。彼等が願望したところのものを、彼等は報復と云はないで、むしろ「正義の勝利」と云ふ。彼等が憎むところのものは彼等の敵でない。然り！彼等は「正しからざること」を、「神を無みすること」を憎むのだ。彼等が信じ且つ望んでゐるところのものは、復讐に對する望、甘き復讐（「蜜よりも甘き」と既にホメエルが呼んだ）の酔心地でなく、むしろ「神を無みする者に對する神の、正しき神の勝利」である。地上に愛すべきものとして彼等の爲めに残されてゐるのは彼等の憎しみに於ける兄弟でなく、むしろ彼等の言ふ如く、彼等の「愛に於ける兄弟」、地上のあらゆる善く且つ正しき人々である。」

さて彼等は、人生のあらゆる苦惱の慰めとして彼等に役立つところのものを如何に名づけるか——豫期されたる未來の福祉に對する彼等の幻像を？

「如何に？私は正しく聞いてゐるだらうか？彼等は「最終の審判」と呼んでゐる。彼等の國「神の國」の出現と呼んでゐる。けれどもそれまでのところを彼等は「信仰に」、「愛に」、「望みに」生きてゐる。」

澤山だ！澤山だ！

何に對する信仰にか？ 何に對する愛にか？ 何に對する望みにか？ これらの弱者共——彼等も亦いつかは強者でありたいとねがふ。それには何等の疑ひをも容れない。いつかは彼等にも「國」が來たければならぬ。それは前述の如く彼等から「神の國」と呼ばれてゐる。成る程彼等はあらゆる事物に於てまことに従順である！ 尙ほ且つかの「國」を體驗する爲めには、久しく生きることを、死を越えて生きる必要がある。然り、「信仰に、愛に、望みに」生きるあの地上生活を「神の國」に於て永久に填め合はせ得ることの爲めには、永久の生命が必要である。何を填め合はすのか？ 何によつて填め合はすのか？……ダンテは私が思ふのに、一の物凄い慧敏さを以て、彼の地獄の門の上にあの「私をも永久の愛が造つた」といふ題詞を置いた時、とんだ大間違ひをやつたものである。ともあれ、基督教の天國及びその「永久の福祉」の門の上には、「私をも永久の憎しみが造つた」といふ題詞の掲げられてゐる方が、より正當であり得たであらう。一の虚言への門の上に一の眞實が立ち得たとしたならば！ なぜと云つて、あの天國の福祉とは何であるか？……我々は恐らく既に推察してゐるであらう。けれども、かうした事物に於て輕視すべからざる一權威、即ちかの偉大なる教師にして且つ聖徒なるアクイノのトオマスから我々にまで、それを證明された方が一層よゝ。「Beati in regno coelesti」と彼は小羊の如く柔和に言つてゐる。「videlunt poenas damnatorum, ut beatitudo illis magis complacere」或は我々が、公の觀物の殘忍なる耽樂をその弟子達へ警戒してやつた、ある勝ち誇つた教父の口

からでも一のより、強い調子で語られるのを聞かうと思ふならば——「だが何故か？ 信仰は我々にすつとより、多くを提供する」と彼は言ふ(de spectac, c. 29 ss.)「すつとより、強い物を。救ひによつて實に全く別種類の悦びが我々の意の儘になる。闘技者の代りに我々は我々の殉教者を有つてゐる。我々にして血を欲するならば、よし、我々は基督の血をもつてゐる。しかし乍ら彼の引き返して來る日、彼の凱旋の日に至つて何が我々を待つてゐるか？」それから彼は、狂喜したる幻想家はつづける。「At enim supersunt alia spectacula, ille ultimus et perpetuus iudicii dies, ille nationibus insperatus, ille derisus, cum tanta saeculi vetustas et tot ejus natiuitates uno igne haurientur. Quae tunc spectaculi latitudo ! Quid admirer ! Quid rideam ! Ubi gaudiam ! Ubi exultem, spectans tot et tantos reges, qui in coelum recepti nuntiabantur, cum ipso Jove et ipsis suis testibus in imis tenebris congnescerent ! Item praesides (州知事等) persecutores dominici nominis saevioribus quam ipsi flammis saevierunt insulantibus contra Christianos liquescentes ! Quos praeterea sapientes illos philosophos coram discipulis suis una conflagrantibus erubescerent, quibus nihil ad deum pertinere suadebant, quibus animas aut nullas aut non in pristina corpora redituras affirmabant ! Etiam poetas non ad Rhadamanti nec ad Minois, sed ad inopinati Christi tribunal palpitantis ! Tunc magis tragoedi audiendi, magis scilicet vocales (より聲高な聲とより荒々しき叫びとを云ふ) in sua propria calamitate ; tunc histriones cog-

noscendi, solutiores multo per ignem; tunc spectandus auriga in flamma rota totus rubens, tunc xystici contemplandi non in gymnasiis, sed in igne jaculati, nisi quod ne tunc quidem illos velim vivos, ut qui malim ad eos potius conspectum insatiabilem conferre, qui in dominum desceverant. Hic est ille, dicam, fabri aut quaestuariae filius (次ぎの言葉總てが、又特にタルムウダからの有名な耶蘇の母の記述が示してゐる如く、テルト・リアマンはこれから猶太人等に言及してゐるのである) sabati destructor, Samarites et daemonium habens. Hic est, quem a Juda relemistis, hic est ille arundine et colaphis diverberatus, sputamentis dedecoratus, felle et aceto potatus. Hic est, quem clam discentes subripuerunt, ut resurrexisse dicatur vel hortulanus detraxit, ne lactucae suae frequentia commentium laederentur. Ut talia spectes, ut talibus exultes, quis tibi praetor aut consul aut quaestor aut sacerdos de sua liberalitate praestabit? Et tamen haec jam habemus quomodo per fidem spiritu imaginante representata. Ceterum qualia illa sunt, quae nec oculus vidit nec auris audivit nec in cor hominis ascenderunt? (1. Cor. 2, 9.) Credo circo et utraque caeva (第一の又第四の、或は他のものに依れば、喜劇的並びに悲劇的舞臺) et omni stadio gratiora. — Per fidem かくの如く書かれてゐる。

一六

我々をして結論を下さしめよ。「善と劣悪と」「善と邪惡と」の二の反對價值は一の恐るべき幾千年に亘る久しき戦を地上に戦つた。そして如何にたしかに第二の價值が久しい間優勢であつたとは云へ、尙ほ且つ今も其戦の勝敗を分ちがたく戦ひつづけられる場所がないではない。その間に戦は愈々高く引き上げられ、又それと共に愈々深く、愈々精神的になつてゐるとも云はれ得る。乃ち今日では恐らく、その意味に自己撞着であり、且つ實際に尙ほあの對抗の爲めの戦場であるより以上に「より、高き性質」の、より、精神的な性質の何等のより、決定的な徴證もないのである。あらゆる人類の歴史を通して今日まで讀むに足るものとして残つてゐるところの、一の書き物に書かれたる此戦の象徴は「羅馬對猶太、猶太對羅馬」と呼ばれてゐる。今日まで此戦より、此疑問より、此不倶戴天の矛盾より大なる如何なる出來事もなかつた。羅馬は猶太人の中に反自然その物のやうな或るものを、謂はば彼の對蹠的な怪物を感得した。羅馬にあつては猶太人が「全人類に對する憎しみの罪を定められたるもの」と見做された。人類の福祉及び將來を貴族的價值の、羅馬的價值の絶對的支配に結びつけることが正當である限りに於てそれも正當である。ところで猶太人等は羅馬に對して何を感得したか？ 人は千百の徴證よりしてそれを村度する。しかし乍ら、復讐をその本心にもつてゐるところの、あらゆる書かれた

る激發の最も放逸なるもの、即ちヨハネの黙示録を今一度念頭にのぼせて見るだけで十分である、(人は更に、基督教的本能の奥深き論理が、丁度この憎しみの書物の上に愛の使徒の名を書き、その使徒にまであの熱情的法悦的な福音を歸した時、その奥深き論理を輕視してはならぬ。その中に一部の眞實が潛伏してゐる、如何に多くの文學的贋造が此目的のために必要であつたらうとも)羅馬人等はげに強く且つ高貴であつた。より、強く且つより、高貴なる民族は、これまで曾つて地上に存在しなかつた。曾つて夢想されたことさへもない。彼等の何れの遺物もが、いづれの銘刻もが恍惚たらしめる——何者がそこに書いてゐるかを付度されたならば。反對に猶太人等は別して怨恨をもつたあの、祭司的な民族であり、民衆的道徳に對する比類なき天賦をもつた民族であつた。人々は支那人又は獨逸人などの如き類似の天分をもつた諸民族と猶太人とを比べて見、何が第一級のものであり、又何が第五級のものであるかを想見するがよい。羅馬と猶太と彼等の中の何れが暫くのところ勝利者であつたか? しかしそれには全然疑問を容れる餘地もない。今日羅馬その物の中で何人の前に人々が、あらゆる最高價值の精髓に跪く如く跪いてゐるかを——そして羅馬に於てのみならず、苟くも人間が飼ひ馴らされてゐる、もしくは飼ひ馴らされようとしてゐる限りの到處に於て、殆んど地球上の半ばに亘つて——試みに考へて見よ。人々も知れる如く三人の猶太人と、そして一人の猶太婦人ではないか(ナザレのイエスと、漁夫のペテロと、天幕匠のボオロと、そしてマリアと呼ばれたる、前述イエスの母と)これは

甚だ顯著なる事柄である——羅馬は何等の疑ひもなく敗北してゐる。成程復興期には古典的理想の、一切事物の貴族的評價の華々しく無氣味なる蘇生があつた。羅馬自身が正氣にかへつた假死者の如く新しい、その上に築かれたる猶太化された羅馬——全地上的會堂の外觀を有つてゐて、そして「教會」と呼ばれたところの——の壓迫の下に自らを動かした。けれども直ぐに又猶太は、宗教改革と呼ばれるあの根本的に賤民的な(獨逸及び英吉利の)怨恨運動のお蔭で勝利者となつた。それには宗教改革の必然的な結果であるところの教會の再興、並びに古典的羅馬の古い墓地的平安の再興もがあづかつて力ありしことを勘定に入れなければならぬ。それまでのより一段嚴格な一層深刻な意味に於て猶太は、佛蘭西革命と共に今一度古典的理想を克服することが出來た。歐羅巴にあり得た最終の政治上貴族主義、即ち十七八世紀の佛蘭西に於ける貴族主義は、賤民的怨恨本能の下に崩壊した。地上に於て曾つてより、大なる歡呼の聲が、より、喧しき狂亂が聞かれたことはない! 固よりその眞中には最も奇怪なる事、最も豫期されなかつた事が起つた。古代的理想その物が生々しく、且つ前代未聞の華々しさで以て人類の目と良心との前に立ち現れた。そして又もや、前よりもより、強く、より、單純に、より、痛切に、多數者の特權に關する怨恨の古い偽りの合言葉に反對して、低下への、卑屈への、均一化への、人類の頽敗退化への意志に反對して、少數者の特權に關するかの恐るべき魅力をもつた反對の合言葉は響き渡つた! 他の諸の道への最終の道標の如くナポレオンは、曾つてあつたところの最も比類な